紫電掌
鬼哭街
The Cyber Slayer
Authored by
虚淵玄
(ニトロプラス)
角川スニーカー文庫

鬼哭街

紫電掌

虚淵 玄(Nitroplus)

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

目次

一　鬼哭雨夜
二　機拳功剣
三　恩讐追想
四　浦東地獄変

「ぁ……ぅ……」

苦しげに呻うめく少女の乳ち房ぶさに、鋼鉄の指が這はう。

その容よう赦しやない硬かたさと冷たさが少女の肌はだを苛さいなむ一方で、触さわる側の触しよつ覚かくデバイスは、生身の指と同等……いや、それ以上に敏びん感かんに、きめ細かな肌の柔やわらかさを、ぬくもりを貪むさぼって、樟ジヤン賈・ジヤ寳ボウの脳へと伝達する。

樟ジヤンの両りよう腕うでの構造は、女を扱あつかうには向いていない。柔やわ肌はだを愛あい撫ぶするのでなく、むしろ相手の肉体を扱うのであれば、苦痛すら与あたえる隙すきもなく破は壊かいしつくす。そういう仕様で出来ている。法定規格を遥はるかに超こえた重装そう甲こうサイバーアーム。

この腕で、樟ジヤンは幾いく多たの敵を引き裂さき、叩たたき潰つぶして、今いる地位と威い名めいを手に入れた。『金こん剛ごう六ろつ臂ぴ』の樟ジヤン賈・ジヤ寳ボウ…もう武ぶ林りんではそれなりに知れた名だ。

「ひぐっ……ぅ……!!」

漏もれ出る吐と息いきは悲鳴に近い。それでも、樟ジヤンの恩情が指使いを緩ゆるめることはまったくない。

もし力加減を誤って、この繊せん細さいな身体からだを挽ひき肉にくにしてしまったとしても……大事はない。そのときは修理すれば済むことだ。

樟ジヤンの腕がそうであるように、少女の躰からだもまた神ならぬ人の手による被ひ造ぞう物ぶつ。完かん璧ぺきなプロポーションも、染しみひとつない肌も、瑞みずみずしい肉ししむらの感かん触しよくも、何一つ賛さん嘆たんには値あたいしない。そうデザインされ、設計されただけのこと。少女は自動人形ガイノイド……女でなく、人ですらなく、それは樹じゆ脂しとカーボンで再現された模造品の女体に過ぎなかった。

サイバネティクス技術の粋すいを集めたガイノイドは、決して安価な玩具おもちやではない。

が、機械の遊び女めと戯たわむれるのは二流の慰なぐさめとみなされるのが常だ。それ専門という倒とう錯さくした趣しゆ味みの持ち主でもない限り、大枚をはたいてまで抱だこうとは思わない。

いくら見み目め麗うるわしく、提供する快楽が生の肉に勝まさろうと……だからといって、そこに何の悦よろこびがある？　本当に雄おすを愉たのしませるのは、貶おとしめ、屈くつ服ぷくさせ、略りやく奪だつし……存在そのものを汚けがしつくす。そんな凌りよう辱じよくの味なのだ。こればかりは人間の女を犯おかしてこその醍だい醐ご味みである。

心あるもの、魂たましいを具そなえたもの、だからこそ傷つけることに悦びがある。空っぽの人形からは、何一つ奪うばい取れない。

この特注品を手に入れるまでは、樟ジヤン自身、ドールフリークの客は一段下に見ていた。

だが、この人形『媽マー祖チエ』に限って言えば……

「かっ……は……ぁ……」

油圧チューブの無機質な唸うなりとともに、凶きよう器き同然の指先で柔肉を圧あつ搾さくされるたび、少女は怯おびえを隠かくしきれず身をわななかせる。

プログラムでそういう情動をエミュレートし、演技をして見せる人形も無論ある。だがそれすらも、樟ジヤンの人形が見せる表情とは根本的な何かが違ちがう。

知性だけでは推おし量れない共感というものがある。さながら猟りよう犬けんが、追い立てられる兎うさぎから恐きよう怖ふの気配を嗅かぎ分けるように──動物的恐怖というものは、被ひ虐ぎやく者しやの精神へ本能的に働きかけるのだ。

「ぐ……が……ひ……ぁひ……ッ!!」

もがき苦しむ指がシーツを掻かきむしる様は、溺でき死し寸前で必死に手がかりを探し求めているかのようだ。目め尻じりには涙なみだ

まで溢あふれている。

この苦しみも、悦びも、すべて偽いつわり……並の人形なら、確かにそうだ。だがこの色街では誰だれもが知っている。樟ジヤン私有のガイノイドは何かが違うと。目で見て、触ふれれば誰もが気付く。

樟ジヤンが秘蔵の人形を貸かし与える一夜には、超ちよう一いち流りゆうの高級娼しよう婦ふと同等の値がついた。

これが道みち端ばたのポン引きならば、嫉しつ妬と逆さか恨うらみの的にもなっただろうが、樟ジヤンはこの上シヤン海ハイにその名も轟とどろく『青チン雲ワン幇パン』の一員……それも腕っ節ひとつで幹部にまでのし上がり、今は磨モー坊フアン街ジエの女ぜ銜げんたちの総元もと締じめとして君臨する男である。

たとえ街一番の美女を囲っていたとしても、難なん癖くせをつける者はいないだろう。ただ、訝いぶかるだけだ。あの人形はいったい何なのか？　と。

その秘密を知る者は―樟ジヤンを含ふくめて、この世にたった六人限り。

すべてが機械任せの、馴れてしまえば満足感も何もない陳ちん腐ぷな人形遊び……なのに性せい戯ぎとなれば百戦錬れん磨まの樟ジヤンが、今になっても飽あきもせずこの機械仕じ掛かけの肉に溺おぼれている。

生身の女に飽きていたのもある。この街で春をひさぐ全すべての女が、樟ジヤンの所有物だといっても語ご弊へいはない。毛色の違う愉しみを探していたのも確かだ。が……

「―ふぅ」

事を終えた樟ジヤンは余よ韻いんに浸ひたることもなく、さっさと身を起こして煙草たばこに火を点つける。

外は相変わらずの豪ごう雨うだった。この街か、もしくは同じ空の下の何処どこかで撒まき散らされた、ありとあらゆる有害汚お染せん物ぶつの成れの果て。繰くり返し凌りよう辱じよくされた空が今、報ほう仇きゆうの涙を流している。汚お穢わいはまた大地に還かえり、

街を、人を、より一層汚しつくす。

雨は嫌きらいだった。樟ジヤンだけに限らず、誰であろうとこの街の雨を喜ぶ者はない。

雲の中で濃のう縮しゆくされた毒素のフルコースが降り注ぐ中、出歩くような馬ば鹿かがいるわけがない。魔都に跋ばつ扈こするもろもろは、今それぞれの穴蔵に隠れ潜ひそんで、呪のろいの雨をやり過ごしているはずだ。

樟ジヤンは肺に吸い込んだ紫し煙えんの香かおりで憂ゆう鬱うつを払はらいのけながら、傍かたわらでシーツにぐったりと身を投げ出している人形を見み遣やる。

荒あらい呼吸、汗あせに濡ぬれた肌はだ。メーカーの動作保証を遥はるかに超こえた扱あつかいを受け、息も絶え絶えの人形は、まだ回復の兆きざしを見せない。

こんなもので遊ぶようになって、もう一年近くになる。いかに出来が良かろうと、すぐに遊び尽つくして飽きがくる玩具。手に入れたときはそう思っていた。なのに、まだ……樟ジヤンはこの人形を手放す気になれない。

虚うつろなレジンの瞳ひとみの奥に、時折かいま見えるもの……情じよう緒ちよエミュレーターの演出とは明らかに違う、玄げん妙みような何か。それが何なのか樟ジヤンには解わからない。この人形を作った男なら、たぶん〝哀かなしみ〟とでも言い表すことだろうが、そんな言葉遊びに興味はない。それでも気になる、この目つきは……

そう、あの女。一年前、この手で犯おかした少女と同じ目だ。

樟ジヤンとその仲間たちで、寄って集たかって輪姦まわして、壊こわした。それだけなら餓が鬼きの遊びで終わっただろうが、あの夜は違ちがった。

これまで数え切れないほどの女を犯し、狂くるわし、堕おとしてきた樟ジヤンだったが、その生いけ贄にえには我を忘れるほど没ぼつ頭とうさせられたのだ。

容姿や身体からだだけではない。彼女には品格があった。まるで希

少種の蘭らんか何かのように慈いつくしみ愛めでられて育ってきた、深しん窓そうの姫ひめ君ぎみ。

育ちや身分が違うだけで、女の味はこうも違うものか……それまで女などただの肉にく壺つぼだと思っていた樟ジヤンにとって、それは衝しよう撃げき的な体験だった。その悲鳴と嗚お咽えつ、赦ゆるしを乞こい願う涙なみだ声ごえ……今も思い返すだけで、黒い悦よろこびが胸に湧わく。

時間にしてほんの数時間。だがあんな興奮を味わうことは、もう二度とあるまい。もちろんあの女にしてみれば、人生最後の数時間は無限の地じ獄ごくに思えただろうが。

そんな宴うたげの記念品とも言うべき、この人形。参加者全員に配られた、気の利きいたテイクアウト。

この人形を嬲なぶることで、自分はあの夜の余韻を味わい続けているのかもしれない。そう思えば納なつ得とくがいく。ありきたりの娼婦など、それこそ飽きがくるほどに抱だいてきた。

人形だって捨てたもんじゃない。裏切ることも、つけ上がることもない。生身の女が引き起こす一いつ切さいの面めん倒どうとは無む縁えんな玩具おもちや。それでいて本物の女よりなお犯し甲が斐いがあるのなら、文句をつける筋合いは何一つない。

そして何より、稼かせぎになる。傷もうが磨すり減へろうが、いかようにも修理が利きく人形だ。生身の躰からだと違って、耐たい用よう期間というものがない。いくら他の男に貸かし与あたえて、手て荒あらな扱いを受けてこようとも、一向に惜おしくはなかった。

この雨が止やんだら、また客を取らせよう。そんなことを考えながら、樟ジヤンは吸いさしの煙草たばこを窓の外に投げ捨てた。

……蕭しよう。

雨の中、囁ささやくように鈴すずが鳴る。

……蕭。

かつて、この鈴の音と共にあった笑え顔がお。同じ響ひびきを耳にすれば、今も瞼まぶたの裏に蘇よみがえる。

この世に二つとなく尊く、愛いとおしかった──彼女の笑顔。

鈴の音の響きは轟ごう々ごうたる雨音に呑のみ込まれ、追想の幻げん視しもまた儚はかなく消える。

重く、憂鬱を押し込めるように四よ方もから迫せまる雨の音。立ちこめる水みず煙けむりに、虚うつろな輪りん郭かくを切り抜ぬく人ひと影かげが、ふたつ。

雨の上海旧市街を好きこのんで出歩くような手合いが他ほかにいようはずもなく、彼らの姿を目に留める者は一人としていない。

かたや長身痩そう軀くの外がい套とう姿。隣となりには、その腰元まで至るかどうかという矮わい軀く。

長身は……一目見れば幽ゆう鬼きと見み紛まがう男だった。落ち窪くぼんだ昏くらい眼まな差ざし。削そぎ落としたように窶やつれた頬ほお。

聳そびやかす肩かたに纏まとった黒衣の、ほつれ目からはみ出た電熱線と罅ひび割われた液えき晶しようパネルは、かつてその外套がサーモスタット内蔵の耐たい環かん境きようコートだった頃ころの名残なごりだろう。とうに機能を失っているのは見るまでもない。今となっては肌のぬくもりを守るだけの効果もあるのかどうか。

外套の下の胴どう着ぎも長ちよう靴かも、ひとしきり汚よごれていた。裏路地で雨風をしのぐ無宿人と見て相応の出いで立ちである。そんな印象を、だがしかし、左右の手に携たずさえ持った代しろ物ものがそれぞれに裏切っていた。

左手には、一ひと振ふりの刀。ありふれた〝柳りゆう葉よう刀とう〟とは異なる細身で反りの浅い刀身。その道の者なら〝倭わ刀とう〟と見て取るだろう。硬こう度どに優すぐれ、刺し突とつと斬ざん撃げきを共にこなす玄人くろうと向けの器械である。

艶つやの失うせた黒くろ鞘ざやといい、飾かざり気けのない柄つか

頭がしらといい、銘めい刀とうの類たぐいではありそうにないが、その過か酷こくな風月を偲しのばせる蒼そう然ぜんの程ほどは……熾し烈れつな使い込みに耐たえ抜いてきた、業わざ物ものの証あかしとも取れる。

そして右手に摑つかむのは、瀟しよう洒しやな鈴をあしらった銀の腕うで輪わ。細さい緻ちな彫ほり細工に雅が趣しゆ薫かおる、紛まぎれもない逸いつ品ぴんである。貴人の腕うでを飾かざるならまだしも、男のみすぼらしい風ふう体ていにはあまりにそぐわない。

……蕭。鈴の音が、またひとつ。

ささやかな響きが拡がって消える一いつ刹せつ那な、その刹那だけ、また優やさしい追つい憶おくが男の脳のう裏りに去来する。

肩を打ち据すえる水圧に項垂うなだれながら、男……孔コン濤・タオ羅ローは濡ぬれそぼつ手に握にぎった銀の鈴すず環わを凝ぎよう視しする。

視線が横に逸それるまで、どれほどの時が経たっただろうか。その眼めは雨の帳とばりに煙けむる空よりなお昏くらい。

「……おい」

濤タオ羅ローは抑よく揚ようのない声で、傍かたわらに付き従うもうひとつの人影──華きや奢しやな矮わい軀くに声をかける。この場に居合わせる上で、その容姿はある意味で彼以上に異質なものだった。

降り注ぐ豪ごう雨うの直中で、少女は寒気に震ふるえることも、濡れ髪がみに嘆なげくこともない。ひたと虚こ空くうに据えたきり、微み塵じんも動かぬ無機質な視線。見る者が見れば一目で看破できる。少女は、人間ではなかった。

年とし端はもいかぬ小児を模した愛玩人形ガイノイド。肉の薄うすい繊せん細さいな体たい軀くは、雄おすの欲望をそそるものとは思えなくても、特とく殊しゆな嗜し好こうの手合いには垂すい涎ぜんの的かもしれない。

もとより禁じられた欲望に応こたえる器うつわがガイノイドの由ゆ縁えんである。市場では、こうした倒とう錯さくした趣しゆ向こうの

モデルもさして珍めずらしいものではなかった。

　呼びかけに遅おくれて反応し、人形の少女はゆるゆると濤タオ羅ローを見上げる。歩く仕草、視線の動き……一挙手一投足が機械的でぎこちない。明らかに彼女には、自律運動に必要最低限なプログラムしか実装されていなかった。出荷状態のプリインストールでさえ、もう少しましな挙動を見せる。

「……」

　この卦け体たいな同どう伴はん者しやをどう扱あつかっていいものか、濤タオ羅ローは未いまだに判断がつかない。

　事ここに至っても、彼にこれを託たくした男の言葉については半信半疑……いやむしろ、九く分ぶ九く厘りん信じていない。

　しかし、もし『左さ道どう鉗かん子し』の言げん質ちに僅わずかなりとも真実があるのなら、そのために濤タオ羅ローは命を差し出しても惜おしくはなかった。だからただ一厘の賭かけといえど、乗ってみるだけの価値はある。

　無言のまま、濤タオ羅ローは左手に携えた刀を人形の少女に差し出す。

　音声入力によらずとも、最低限の挙きよ措そ判別プロンプトだけで、人形は濤タオ羅ローの意図を判読した。ぎこちない仕草で両りよう腕うでを掲かかげ上げ、その手に濤タオ羅ローの倭わ刀とうを戴いただく。

　少女の軽量な自重にとって、課された質量は酷こくなものだったのかもしれない。刀を受け取った途と端たん、人形はぐらりと傾かしぎ、あわやというところで二に脚きやく歩行のバランスを回復する。

　危なげな人形少女の挙措を冷ややかに見守った後、濤タオ羅ローは眼前の建物を、雨煙の空を透すかして仰ぎ見みる。

　所番地に間ま違ちがいはない。前世紀末の再開発の波をやり過ごした老ろう朽きゆう建築。遺い跡せきと見紛うアール・デコの古こ雅がは、あるいは百年余りを遡さかのぼるフランス租そ界かい時代の築かもしれない。

今となっては素す性じようの怪しい輩やからが蟄ちつ居きよするこのアパートの、最上階のロフトハウスで、目指す男は生業なりわいを営んでいるという。捜さがし求めた五人のうちの、まずは最初の一人。

降り注ぎ、滝たきのようにコートの表面を流れ落ちる、雨。分厚い布地越ごしに、暗い空の温度が男の肩かたを背中を冷やす。

総身の血は滾たぎり、そのくせ身体からだの芯しんは氷柱つららのように凍こごえている。凍しみるような雨も、今はむしろ肌はだに心地ここちよい。

今すぐに訪おとずれるのは下策だった。この豪雨の中、女を目当てに女衒を訪ねる客などいようはずもない。間違いなく相手は疑いを懐いだく。

どこか雨を凌しのぐ場所を見つけ、訝いぶかられない程度に身体を乾かわかして、それから出向くべきだろう。雨が止やむまでは、待つしかない。

……蕭しよう。また鈴すずの囁ささやきが、雨音の中で囁いて、消える。

あとはただ無人の街路を、ただ纏てん綿めんと叩たたく雨だけが残った。

樟ジヤンにとっては見るからに気にくわない客だった。風ふう体ていだけなら文無しとしか思えない。普ふ段だんならこんな奴やつは、玄げん関かん先さきをうろつくだけでも許さない。

ところが男はドアカメラの前で、まるで魔ま法ほうか何かのように懐ふところから札束を取り出して見せた。前金で全額と言われては、商あきなう側には難なん癖くせのつけようもない。

「……」

得体の知れない人間を招き入れて良いほど長閑のどかな界かい隈わ

いではないが、この珍ちん奇きな客には何の危険性もなかった。軒のき先さきに立った時点で相手は、十指に余る検知器で全身くまなく走査スキヤンされている。

結果はオールグリーン。爪つま楊よう枝じほどの凶きよう器きもなければ、生体バイオ危険物ハザードの反応もない。

驚おどろいたことに、男は丸まる腰ごしなばかりかサイボーグですらなかった。非合法パーツどころか医い療りようパーツ、肝かん機き能のう強化さえ見当たらない。今きよう日び日ここまで真まっ新さらに生身な人間は珍しい。

ひとくさり考え込んだ後、樟ジヤンはオートロックを解除した。

「……よし。入りな」

「……」

直じかに見ればさなきだに、気にくわない客だった。

女を使って稼かせぐなら、客の求めるところを一目で見み抜ぬけないようでは務まらない。そしてその道の専門家である樟ジヤンが察するに、どう見てもこの男、これから愉たのしもうという風情ふぜいではない。

女を買いに来た男にしては、あまりにも隙すきがなさすぎる。尖とがってる、などという程度ではない。居合わす者を緊きん張ちようさせずにはおかない、まるで抜ぬき身の刀のような冷ややかな気配。

そのくせ当人はまるで硬かたくなっている様子はなく、挙措はあくまでしなやかで緩ゆるい。そんな〝緩さ〟がなお一層、危あやういのだ。どこか獲え物ものを狙ねらう蛇へびのような、油断ならないものを窺うかがわせる。

見るからに、人目のない場所で出会うのは敬遠したい類たぐいの手合いだった。とはいえ、金を持っていれば客は客。そもそも樟ジヤンが男を恐おそれる理由は何一つない。

この部屋に施ほどこしたセキュリティシステムは万ばん全ぜんだ。部屋の四よ隅すみに配置されたマイクロウェーブ銃は、すでに玄関の

開いた直後から来訪者に焦しよう点てんを合わせ、今も追つい尾びし続けている。

　トリガーは樟ジヤンの脳とダイレクトＤインターＩフェイスＳで接続されている。その気になれば樟ジヤンは小指ひとつ動かさず、相手を骨こつ髄ずい液えきまで沸ふつ騰とうさせることができた。

　そして何よりも樟ジヤン自身が全身に一二〇kg以上の非合法パーツを組み込んだ重サイボーグである。『金こん剛ごう六ろつ臂ぴ』の名は伊達だてではない。生身で丸腰の男など、目の開かない子こ猫ねこも同然だ。何となれば金だけ巻き上げて叩き出したっていい。

「どこで聞きつけたのか知らねぇがよ……困るんだよな。いきなり押しかけられても。ちゃんとアポとってくれねぇことにゃ、こっちだって持て成し方ってもんが……」

　それ以上樟ジヤンが言う前に、男は折りたたんだ紙片を樟ジヤンに放ほうってよこした。

　空中でさらうと、指先で器用に広げる。

　オーバーサイズの義手ではあるが、必要とあらば外科医並に緻ち密みつな作業も出来た。本人に外科医の心得と繊せん細さいさがないだけだ。

　本物の紙を漉すいた半紙に、墨すみでしたためられた落らつ款かんと朱しゆ印いん。見み違ちがえようもなく青チン雲ワン幇パンの紹しよう介かい状じようである。

　肉筆の書状は時代錯さく誤ごと見えてその実、デジタル万ばん能のうの時勢にはむしろ信しん頼らい度どが高い。紙は幇内の職人が手ずから漉すいた特製品。複雑に絡からむ草書の墨ぼく跡せきには、巧たくみに織り交ぜられた符ふ丁ちようが数カ所にある。部外者には複製も模造も不可能だ。

「……この綴つづりは？」

「無モー妄ワン趨チユー同トン人レン、同トン人レン趨チユー大ダー有ヨウ」

「ふん……」

幇パンの符丁を持ち、それが読めるなら、男は間ま違ちがいなく青チン雲ワン幇パンゆかりの人間である。これで樟ジヤンも相手を邪じや険けんにあしらえなくなった。
「で？　人形がお好み、ってわけかい？　あんた」
「ただの玩具おもちやなら、興味ない」
気け怠だるげにそう嘯うそぶいてから、男は底光りする眼まな差ざしを樟ジヤンに向け、続ける。
「……だがあんたの所には、ひと味違ちがう人形があると聞いた」
「おうよ」
樟ジヤンは男の視線を正面から受け止めながら、しかし胸の内では依い然ぜん、相手の真意を量りかねていた。
「それを聞いただけで前金で五〇〇〇元か。ナリに似合わず豪ごう毅きな奴だな」
「それだけの価値はないのか？」
「そうは言ってねぇ」
商あきない物に自負するところをかけて、樟ジヤンは余よ裕ゆうの笑えみを見せる。
「もちろん、損はさせねぇよ」
樟ジヤンは指を鳴らして、自じ慢まんのガイノイドを呼び寄せた。
衣い裳しよう部屋に控えさせていた媽マー祖チエが、客の前へと進み出る。
フレームはエルメスの最新流行モデル。皮ひ膚ふや頭とう髪はつの質感はもちろん、互ご換かん性のあるパーツは悉ことごとく最高級オプションに換かん装そう済みである。睫まつげと虹こう彩さいの処理など、通の拘こだわり所にはとりわけふんだんに金がかかっていた。
だがそんな艶つややかさとは裏腹に、主あるじの許もとへと歩み寄る足取りは妙みように悄しよう然ぜんとおぼつかない。まるきり艶の売り方を解わかっていない素人しろうと女も同然だった。
もとよりガイノイドの挙きよ措そは、プログラムによって統すべられた完全無む謬びゆうのものである。歩法ひとつにしてみても、ソフ

ト次し第だいで宮きゆう廷てい官女の気品も、あるいはトップモデルの蠱こ惑わくも、思いのままに再現できる。

一流の女性を期待して金を払はらった男なら、これだけで幻げん滅めつしたとしても無理はない。だが……

「……大したものだな」

「ホォ、判わかるかい？」

樟ジヤンはそれまでの愛想笑いに、幾許いくばくか本物の歓かん待たいを交えた。この客……弁わきまえている。なかなかどうして人形に遊び馴なれているらしい。

所しよ詮せんは機械人形にすぎないガイノイドにとっては、むしろこういう〝自然な〟挙措こそ再現が困難なのだ。役者の演技と同じである。計算づくの動作より、素そ朴ぼくで自然な風情ふぜいの方が演出は難しい。

「既き存そんのエモーショナル・エンジンじゃ、調教したってこうはいくまい。……独自スクリプトだな。誰だれが書いた？」

「書いたわけじゃねぇのさ……」

男の素す性じようと嗜し好こうが本物だと知れた時点で、樟ジヤンの警けい戒かいは弛ゆるんでいた。

徒いたずらに吹ふい聴ちようすべきことではないのは承知している。が、樟ジヤンを含ふくむ幇幹部たちが特別製のガイノイドを保有しているのは、幇の中では公然の秘密だ。

この男が青チン雲ワン幇パンとどういう拘かかわりがあるにしろ、その身元に間違いがないのは符丁の半紙が保証している。こいつが警察のイヌである可能性は万に一つも有り得ない。

「たとえば……ほれ」

やおら危険なほどの勢いで、樟ジヤンは巨きよ大だいな義手を伸のばして人形の頭を鷲わし摑づかみにした。油圧駆く動どうのマニピュレーターが、あわやセラミック製の頭ず蓋がいを握にぎり潰つぶすかと思えた刹せつ那な、義手はぴたりと静止する。

「!?」

媽マー祖チエは……動かなかった。何の自衛機能も見せず、さりとて反応しなかったのでもない。

反応できなかったのだ。瞳ひとみを一いつ杯ぱいに見開いて、出かかった悲鳴を呑のみ込むように口元をわななかせ……人形は総身を硬こう直ちよくさせていた。

「……な？」

樟ジヤンが頭上の手をどけると、人形は脱だつ力りよくして床ゆかにくずおれた。ようやく肩かたをわななかせるほどに強こわ張ばりがほぐれたらしい。上うわ目め遣づかいに樟ジヤンを見上げる双そう眸ぼうには、哀あわれなほどに差し迫せまった、危あやうく儚はかない色がある。

恐きよう怖ふ、だった。この人形は怯おびえ、畏い縮しゆくしている。生命いのちなき機械人形には有り得ない反応だった。

「こいつの感情はな……ナマなんだよ」

「……ナマ？」

「皆みなまで言わせる気かい？」

「ああ、成る程ほど……」

男は、相変わらず表情の読めない眼まな差ざしで人形を凝ぎよう視ししながら、抑よく揚ようなく呟つぶやいた。

「これが噂うわさに聞く、〝魂こん魄ぱく転写〟か」

電脳刑けい法ほうにおける最大の禁きん忌き。だがそれを口にする男の語調には、何の動どう揺ようも窺うかがえない。

「なに気取ってんだよ。珍めずらしくもねぇって顔に書いてあるぜ」

魂魄転写などという言葉が出てくる時点で、この男が一いつ端ぱしの人形ドール狂フリークなのは間ま違ちがいない。

「……」

はたして男が続けて口にしたのは、かなり専門分野に踏ふみ込んだ内容だった。

「ここまで人間味を出すのに、どれくらい注入したんだ？」

「ざっと二〇％ってとこか」

「……」
　男を沈ちん黙もくさせたのは、今度こそ驚きよう愕がくだったのだろうか。だが依然としてその貌かおには、糸ほどの動きも顕あらわれない。
「それだけ吸い出されたら、母体が一発で壊こわれるのでは？」
「そんな勿もつ体たいないことはしねぇよ」
「吸い出したのはゴッソリ全部……一〇〇％だ。そいつを後から五等分したのさ」
　樟ジヤンの言葉は、殺人の自白に他ほかならなかった。
　魂魄転写の違い法ほう性は、倫りん理り的問題もさることながら、転写元の人体に与あたえる苦痛と、脳が被こうむる深刻なダメージにある。繰くり返せば廃はい人じん化も免まぬかれない。
　一〇〇％の吸い出し……この人形のために犠ぎ牲せいとなった人間は、脳内に蓄たくわえたありったけの情報信号を引きずり出されて死んだのだ。当然、その過程で味わったのは生き地じ獄ごくの拷ごう問もんだっただろう。
　納なつ得とくしたのか、満足したのか、どちらともとれない沈黙のまま、男は床に座り込んだ人形の傍かたわらに膝ひざをつき、人形の貌かおを覗のぞき込む。
「……」
　これだけ言葉を交かわしながら、未いまだに何一つ感情の動きを見せない男の態度に、樟ジヤンは言い知れぬ不安を感じ始めていた。
　まぎれもなく樟ジヤンは、この部屋と、そこで販ひさがれるガイノイドの主あるじである。その自負を危あやうくさせるほど、男の沈黙は謎なぞめいて、何か秘ひめたものを感じさせた。
　やはりこの男は、どこかおかしい。まるで樟ジヤンのことも、この人形とそれにまつわる秘密のことも、すべて事前に承知しているかのような……
〝まさか、こいつ……？〟
　不意に樟ジヤンは横おう柄へいな態度を一転させて、白々しいほど

に顔を綻ほころばせた。
「なぁ、ひょっとして俺、あんたに会ったことあるか？」
「……」
「俺は、まぁ知ってるかもしれんが……訳あって人の顔の見分けがつかねぇタチでよ」
　実のところ樟ジヤンは、かつてニューラル系の改造を託たくした藪やぶ医者の執しつ刀とうミスが原因で、相そう貌ぼう失しつ認にんを患わずらっていた。脳の後頭葉に負った外傷のせいで、他人の目鼻顔立ちを再さい認にんすることができなくなる視覚障害である。非合法なサイバー化手術が横行する中、こうした事故は珍しくもない。
　が、一昔前ならいざ知らず、今ではこうした失認症しようが深刻な障害となる例は少ない。これもまたサイバネティクス改造の普ふ及きゆうによる恩おん恵けいだった。たとえば樟ジヤンは聴ちよう覚かく神経も機械化しているため、声せい紋もんを記録し照合することで話し手を識別できる。
　男の声に〝聞き覚え〟はない。初対面の相手だとばかり思っていた。だがそうではない可能性もゼロとはいえない。機械任せの記き憶おくでは、この辺の機き微びがままならない。
「なにぶん古い知り合いだと、履歴キヤツシユを消しちまってることもあるかもしれねぇ。もしそうなら、気を悪くしねぇでほしいんだが……」
「構わんさ」
　男の声は前にも増して静かだった。どこか優やさしげなものさえ窺える。
「気にしてないよ」
「そ、そうかい」
　もはや気のせいではなく、男は雰ふん囲い気きを変えていた。人形の頬ほおに、まるで壊れ物を扱あつかうように指を這はわせながら、男ははっきりと相そう好ごうを崩くずしている。だがその豹ひよう変へんぶりは樟ジヤンを安あん堵どさせるより、なおいっそう不安を煽

あおり立てた。
「俺には解わかるよ。姿形や声なんて問題じゃない。本当に大切な相手は……ほんのわずかな気配だけで、解る」
　さっきまでとはうって変わった、優しく柔やわらかい声音。能面のような無表情よりも、この男は笑え顔がおの方がより不気味だった。
　まるでこの場に居合わせない誰だれか、幽ゆう霊れいか何かと言葉を交かわしているかのような……そうだ。この男、さっきから樟ジヤンに一いち瞥べつもよこさない。
「お前も忘れたか？　俺のこと」
「……あ？」
　相変わらず男は樟ジヤンなど眼中にないまま、じっと人形を見つめている。もはや疑いはなかった。男は……人形に話しかけている。
「俺は覚えてる。忘れやしない」
「……？」
「こんな風に髪かみを梳すいてやった。いつも……お前の髪、細くて柔らかくて……いつも誉ほめてやってたよな？」
〝何を……言ってるんだ？　こいつは〟
「この中に」
　男は慈いつくしむように、ガイノイドの小さな顎おとがいを指に載のせる。
「今のお前は、たった二割しか残ってないんだもんな。俺のこと、解らなくても……無理ないよな」
　不意に部屋中の照明が消えた。
「!?」
　停電……だとすれば即そく座ざに予備電源に切り替かわるはずだ。なのに照明は沈ちん黙もくしたきり、復活する素そ振ぶりを見せない。
　不ふ吉きつな予感に、樟ジヤンは脳内のインターフェイスで部屋中のセキュリティを呼び出した。が……何の反応もない。
　すべての電子機器が死んでいる。バグやフリーズとは思えない。物

理的に機能を停止している。
「何……何ィッ!?」
　動力が失うせ、オートロックも機能しない、玄げん関かんのスライドドア。今やただの板きれと化したその引き戸を滑すべらせて、小さな人ひと影かげが現れた。
　いたいけな少女は無害と見えても、その手に恭うやうやしく捧ささげ持った一ひと振ふりの倭わ刀とうは、決して歓かん迎げいできるものではない。招かれざる侵しん入にゆう者しやが、ぎこちない足取りで敷しき居いを跨またぐ。だが警報も迎げい撃げき装置も務めを忘れて、沈黙で少女を迎むかえ入れる。
　樟ジヤンはパニックの一歩手前にあった。
　大枚をはたいて投入したセキュリティが、作動しない。あり得ないことだった。一機二機なら故障もあり得よう。だがすべての機器が一いつ斉せいに沈黙するというのは……
「貴様、一体……」
　こいつか？　この男のせいなのか？　だが……だとしたらどうやって？　手も触ふれずに、いつの間にそんな細工を？
「俺の声の履り歴れきを残さなかったのは……二度とこの声を聞くことがないと思ってたからか？　樟ジヤン賈・ジヤ寶ボウ」
「な……」
　有り得る可能性が、ひとつだけ。……電磁パルスＥＭＰだ。稲いな妻ずまなどの高エネルギー現象で発生する電磁パルスは、あらゆる電子デバイスの導体に電磁誘ゆう導どうを引き起こし、わずか数ミリ秒のうちに破は壊かいしてしまう。
　生体に組み込まれるサイバーウェアであれば、ある程度のＥＭＰ対策が講じられている。樟ジヤンと彼のガイノイドが無事に済んだのもそのためだろう。だがそれも、接せつ触しよくするほどの至近距きよ離りからパルスを打ち込まれれば話は違ちがう。
　現にそういう武術が存在するのを、樟ジヤンは知っていた。内ない家か拳けん法ぽう家の秘ひ奥おう義ぎのひとつ……特とく殊しゆな練

気によって掌しよう勢ぜいに電磁パルスを孕はらませ、触れると同時に放射する。テクノロジーが戦いの形を変えていく中で、先古の武術大系が生み出した新たなる〝功こう〟。

　対サイバー気功術『電でん磁じ発はつ頸けい』。徒手空拳でサイボーグを屠ほふる殺アー戮ツ・のオブ絶・ウ技オー。

「あんたは……」

　樟ジヤンはひとつの名を知っている。ただ独り……想像を絶する鍛たん錬れんの果てに、その功クン夫フーに至ったただ独りの男。

　人呼んで、『紫し電でん掌しよう』孔コン濤・タオ羅ロー。決して思い返すはずのなかった男。

「死んだはずだ！」

　半ば裏返った声で樟ジヤンは糾ただした。

「あんたは死んだ……あんたは、とっくの昔に!!」

「そうだ、樟ジヤン。俺は死したも同然よ……」

　男の声音は凍こおっていた。もはや人の声とさえ思えない。黄泉よみの底から吹ふく風なら、きっとこんな音を立てるだろう。

「同じ釜かまの飯を食った貴様らに、義兄弟の杯さかずきを交かわした貴様らに……今日より俺は牙きばを剝むく」

　恐怖に囚とらわれた樟ジヤンを余所よそに、少女は無言のまま刀を差し出した。

「孔コン濤・タオ羅ローはマカオで死んだ。今ここで剣けんを執とるのは、ただ一匹ぴきの鬼おに……復ふく讐しゆうの、鬼よッ!!」

　殺意に凍こごえた鞘さや鳴なりとともに、男は刀を抜ぬき払はらう。

　亡もう者じやとの対面。その恐怖に呑まれてなお拳を繰くり出した樟ジヤンは、かつて名を馳せた兵つわものだけのことはあった。

　機械化した右みぎ腕うでから繰り出す『丹たん鳳ほう朝ちよう陽よう』は、歴れつきとした外家正調、少しよう林りん拳けんの一手である。片かた腕うで二二・三kg、最終拳速二六〇m／s……破壊力で言えば対戦車兵器に匹敵する剛拳が濤タオ羅ローを襲おそう。

拳風を浴びただけでも脳のう震しん盪とう。直ちよく撃げきすれば遺い骸がいは原形を留とどめない。殺傷力過剰の剛拳は濤タオ羅ローの体組織を、ただの一いち撃げきのもとに解体しつくす……

そう信じて疑わなかっただけに、おのれの拳が空から振ぶりに終わった事実を、樟ジヤンは容易に受け入れかねた。刹せつ那な、閃ひらめいた剣光は……樟ジヤンの拳を弾はじいたものだろうか。

ならば受けた剣ごと粉ふん砕さいせんと、左拳から繰り出す『左さ穿せん花か手しゆ』の追い討うち。倭わ刀とうの細い刀身など木っ端ぱも同然に叩たたき折る……

そう意気込んだ大おお技わざが、またもあらぬ方向に逸それて空を切る。濤タオ羅ローの刀に触れた途と端たん、手て応ごたえらしい手応えもなく。

「ぐおおっ!!」

怒ど号ごうとともに、樟ジヤンは立て続けに拳を振ふるった。第一式『闖ちん少しよう林りん』の三七手……左右から間かん髪ぱつ置かず、縦横に軌き道どうを変えて放つ連続突づき。

濤タオ羅ローは動かない。ただ白はく刃じんの輝き線せんだけが、水みず飛沫しぶきのように虚こ空くうを流れ散る。そのたびに樟ジヤンの攻こう撃げきは、見当違ちがいの方向へと導かれて不発に終わる。

頼たのみの拳が、まるで意のままにならない。剣光が文あや目めを描えがいて紡つむぎ出す糸に、まるで搦からめ捕とられでもしたかのように。

濤タオ羅ローの刀はジャンの攻撃を弾き返しているわけではない。むしろ逆に、刀身を鋼はがねの拳に絡めるや、手前に引き寄せるようにして釣つっている。敵の攻撃に手ずから勢いを加えているようなものだ。

次し第だい、樟ジヤンの拳はよりいっそう速度を増すものの、その拍ひよう子しにわずかにベクトルを狂くるわされ、結果、標的を逸れて振り抜く羽目になる。

重さで勝まさる武器をいなす軽けい妙みようの技は、まぎれもなく戴たい天てん流剣けん法ぽう『波は濤とう任にん櫂とう』……軽かろきを以もつて重きを凌しのぎ、遅おそきを以て速きを制す。これぞ中国武術の深しん奥おう『内家拳』の極ごく意いに他ほかならない。

樟ジヤンのように身体能力のみを頼みとする『外家』には、想像も及およばぬ境地である。

〝くっ……！〟

樟ジヤンは神経回路のリミッターを解除。同時に肩かたの増加装そう甲こうを投とう棄きする。

「くたばれぇぇッ!!」

双そう手しゆから挂グワ拳チエン、蓋ガイ拳チエン、劈ピー拳チエン、抛パオ拳チエン、横ホウ拳チエンの六段式を一いつ斉せいに放つ必殺の『阿あ修しゆ羅ら憤ふん怒ぬ弾だん』。功を極きわめた樟ジヤンでなくとも、機械化された肉体で繰くれば速力、威い力りよくともに達人の域である。

左右から振りかぶる拳速はもはや動体視力の極限を超こえ、無数の残像を伴いながら一斉に濤タオ羅ローに襲いかかった。これぞ樟ジヤンの『金こん剛ごう六ろつ臂ぴ』たる由ゆ縁えんである。

おのが拳風の轟とどろきの中、だが樟ジヤンは―確かに聞いた。拳と白はく刃じんを挟はさんだ向こう側に、侮ぶ蔑べつを込めた憫びん笑しようの吐と息いきを。

怒濤の猛もう攻こうに応じる濤タオ羅ローの刀は、なおいっそう軽く、速く、柔じゆう靭じんに……繚りよう乱らんと闇やみに躍おどる白刃は、最大速度の連続拳をこともなげに捌さばき続ける。

〝馬ば鹿かな……〟

連れん撃げきに連撃を重ねながらも、恐きよう懼くがじわじわと樟ジヤンの思考を蝕むしばんでいく。

両腕を動員して振るう樟ジヤンの猛攻を、依然濤タオ羅ローは右手の一刀のみで防ぎ続けている。そして空いた左手は……指で剣けん訣けつを結ぶでもなく、ただ緩ゆるく五指を広げて宙に浮ういたまま。

それは樟ジヤンにとって大たい砲ほうの筒つつ先さきも同然だった。いずれ濤タオ羅ローが繰り出すに違いない、あの左手……その掌しよう底ていで触ふれたとき、樟ジヤンの命運は尽つきるのだ。

触れてはならない。あの掌てのひらに触れてはならない。

刀はむしろまやかしだ。いかな利刀といえど、一撃二撃、斬きられてどうなる身体ではない。我わが身は鋼。すでに骨肉に非あらず。だが、奴やつの掌だけは……

樟ジヤンの焦あせりとは裏腹に、二人の間合いは悪夢のように着々と、数ミリ刻みで狭せばまっていく。もはや掌打の間合いまでは幾許いくばくもない。

〝凌しのぎきれ……〟

もはや祈いのるような胸中で、樟ジヤンは己おのれを叱しつ責せきした。

相手は生身の人間だ。間ま違ちがいなく限界が来る。肺から酸素を注つぎ込んで動かす筋肉……そんな非効率な器官が、機械駆く動どうの義手より勝まさるわけがない。このスピードで刀を振るい続ければ、いつか必ず息切れを起こす。

にも拘かかわらず濤タオ羅ローの剣けん舞ぶは、一向に鈍にぶる様子がない。どう考えても有り得ぬことではあるが、まさかこのまま……濤タオ羅ローが力ちから尽つきるより先に、樟ジヤンの腕うでがオーバーヒートで停止するのでは？

〝有り得ない……有り得ない！〟

焦燥に歯噛みする樟ジヤンは、すでにひとつの理ことわりを忘れていた。

内家の達人が得え物ものを執るとき、それは硬かたさ鋭するどさだけでは語れない。丹たん田でんより発する氣きを込めて振るわれたとき、ただの布帯は剃刀かみそりに変じ、木もく片へんが鉄てつ槌ついへと変ずる。

同様に、鋼の刃やいばは……

鋼の刃の変ずる果ては、ただ因果律の破断のみ。それは形在るもの

悉ことごとくを断ち割る、絶対にして不ふ可か避ひの破は壊かい。

樟ジヤンが耳にしたのは、ただ一いつ刹せつ那なの風切音。限りなく鋭く疾はやい、ただそれだけの気流の響ひびき。断じてそれは──鉄と鉄とが触れ合う音ではなかった。

なのに樟ジヤンの右みぎ腕うでは、肩から離はなれて視界の外へと飛び去った。まるで腕そのものが樟ジヤンの身体を見捨てたかのように。途と方ほうに暮れた持ち主を見限ったかのように。

刀術とて侮あなどるべきではなかったのだ。内家の功夫極きわまるとき、その手の刃を阻はばむものはない。濤タオ羅ローが氣を練るだけの時間、そこまで戦いを長引かせた時点で、樟ジヤンの敗北は決していた。

驚きよう愕がくと絶望の中で、樟ジヤンは残る左拳こぶしを引き戻もどすのを忘れていた。

とうに標的の失うせた空間を趨はしり抜ぬけ、勢い余った左腕は床ゆかへ……カーペットを裂さいてコンクリートの床ゆか材ざいまで、深々と貫かん通つうして埋うまる。

それとほぼ同時に、斬きり飛ばされた右腕が最後に振ふり抜いた勢いのまま、砲ほう弾だんのように部屋を飛び抜けて向かいの壁かべを破壊する。

樟ジヤンはただ放心して、穴の空いた壁を眺ながめていた。粉こな微み塵じんになって舞まい上がる建材の埃ほこりの向こうに、わずかに垣かい間ま見みえる鉄てつ屑くずは……かつてあれほどに硬く、力強く、無敵無む双そうと頼たのんだ己の腕。

あの拳で樟ジヤンは、何者に負けるつもりもなかった。二度と膝ひざを屈くつすることはないと、そう信じて疑わなかった。なのに……

床に突つき刺ささったままの左腕の肘ひじを、靴くつ底ぞこで踏ふみ押さえる脚あしがある。濤タオ羅ローだった。樟ジヤンが敗北という事実に心奪うばわれていた隙すきに、舞うような身のこなしで背後へと回り込んでいたのだ。

その左の掌が、樟ジヤンの延えん髄ずいに押し当てられる。冷たい

その感かん触しよくは、もはや人ひと肌はだの温度でさえなく、白はく刃じんの鋼はがねも同然に感じられた。

深く静かな、濤タオ羅ローの吸気。樟ジヤンには解わかった。内力から電磁パルスを発生させる秘伝邪じや法ほうの練功術。丹田を巡めぐって練られた氣が、掌から放たれるとき……神経系を機械化したサイボーグには、免まぬかれようのない死が訪おとずれる。

床に埋まった左拳を抜くことは叶かなわない。その素そ振ぶりを見せただけで、紫し電でんの炎ほのおが樟ジヤンの脳を焼き尽くすだろう。

「俺は……違ちがう」

死の淵ふちに立つとき、人はとりわけ饒じよう舌ぜつになる。樟ジヤンはこれまでにない程ほどに、言葉という言葉を吐はき出したい気分になっていた。

「たしかに……あんたの妹にしたことは、謝る、あ、謝るよッ!!　だが俺は、俺は殺してない！　あ、あんたの妹をこんなにしたのは……」

「そうだな。貴様だけじゃない。心得てるとも」

濤タオ羅ローの声は謳うたうように軽かった。わずかな殺意の重みさえない……あるいは、殺す相手を人として認にん識しきしていない、声。

「いずれ一人残らず、貴様の後を追う。まずは貴様が先さき触ぶれだ。樟ジヤン賈・ジヤ寶ボウ、地じ獄ごくに皆みなの席をとっておけ」

そして、灼しやく熱ねつの見えざる炎が樟ジヤンの頸けい椎ついへと打ち込まれた。

掌てのひらより発した電磁パルスはテンペスト規格のシールドを通過し、鋼線を張はり巡めぐらした中ちゆう枢すう神経に電磁誘ゆう導どうを引き起こす。

「ギャァァッ!!」

激痛は光の速さで樟ジヤンの体内を燃え広がった。全身の神経に植

え込まれた電子部品、そのすべてが一斉に焼き鏝ごてへと転じたのである。

　喩たとえて言うなら、総身の痛点を剝むき出しにされた上で硫りゆう酸さんの中に放ほうり込まれたようなものだ。

「うぎゃぁァァァァァッ!!」

　生身のままなら決して味わうこともなかった筈はずの、この世のものでない激痛……それがサイバー殺しの『紫電掌』。

「ァァ……ガ、ァァァ……」

　だが生き地獄も長くは続かない。許容量を超こえた刺し激げきの前に、樟ジヤンは肉体より先にまず精神を破壊され、すぐに苦痛すら届かない世界へ追いやられた。次いで神経系と同様に機械化されていた循じゆん環かん器き系が停止。酸素と栄養素の供給が途と絶だえた脳が、ゆっくりと壊え死ししはじめる。

　死体と呼ぶにも残ざん骸がいと呼ぶにも語ご弊へいのある人型のオブジェが崩くずれ落ち、重い震しん動どうが床を揺ゆする。それを見下ろす濤タオ羅ローの双そう眸ぼうには、もはや何の感かん慨がいもない。

「……」

　すでに樟ジヤンの拳を封ふうじた時点で、憤ふん怒ぬは胸の底に沈しずんでいた。

　殺してみれば、この男の命に奪うだけの価値があったかどうか。

　裁くには死すらも軽い。償つぐなわせるには一いつ生しよう涯がいあっても足りない。ただ濤タオ羅ローは、この男が生き続け、日々の享きよう楽らくを甘受し続けることが許せずに……それだけで剣けんを執とった。

　復ふく讐しゆうとは虚むなしいものだ。遂とげたところで、失われたものは戻もどらない。何ひとつ癒いやされない。

　濤タオ羅ローは顔を上げ、居合わす者たちを順に見み遣やった。

　短くも激しい戦いを見守っていた二体の人形。かたや欠けつ陥かん品ひんの如ごとく無反応に人命の危機を放任し……

「……」
　かたや主あるじの断だん末まつ魔まを、人形にはあるまじき怯おびえの相で看み取とったガイノイド。
　恐きよう怖ふ。それは生あるもの、滅ほろびを知る者だけの特権。樟ジヤンの絶ぜつ叫きようが意味するところを汲くみ取った、その表情は……内に秘ひめた魂たましいの証あかし。
　人でも機械でもない少女は、白はく刃じんを手にしたまま向き直った殺人者の視線に射い竦すくめられて、歯の根が合わぬほどに震ふるえあがった。
　その表情が、濤タオ羅ローの胸を哀かなしみと憐れん憫びんで締しめ上げる。
「大だい丈じよう夫ぶ……」
　声に精せいーいつ杯ぱいの優やさしさといたわりを込めながら、濤タオ羅ローは怯える機械人形に歩み寄った。
「じっとしておいで。すぐに済む。……痛くはしないから」

　樟ジヤンの部屋での騒そう動どうは、警察よりもまず先に青チン雲ワン幇パンへと通報された。この近きん隣りんに住まう者たちは、法なき街の法を心得ている。
　すぐさま銃じゆう器きと戦せん闘とうサイバーウェアで身を固めた若衆が数人、惨さん劇げきの現場へと駆かけつけた。樟ジヤンの脳死からは五分と経たっていない。にも拘かかわらず、部屋はすでに無人だった。
　切断された右の義手以外、それらしき破損も見当たらない遺い骸がいは、名の知れたサイバー武芸者の末まつ期ごにしては奇き妙みように過ぎた。遺骸が調べられ死因が明らかになるのは、まだ先の話だ。
　樟ジヤンの自じ慢まんのガイノイドについては、若衆の誰だれもが知っていた。人形が下げ手しゆ人にんを視し認にんしていれば、メモ

リから画像を抽ちゆう出しゆつできる。
　だがその望みも、ガイノイドの残骸が回収されると同時に潰ついえた。
　破損が酷ひどすぎたからではない。メモリを内蔵していた頭部が、現場のどこにも見当たらなかったからだ。

　ここまで来れば、追っ手には見つからない……そう確信したところで、濤タオ羅ローは足を止めた。
「く……」
　緊きん張ちようが弛ゆるむと同時に、焼けるような痛みが胸を襲おそう。
　あまりに人体の機能を逸いつ脱だつした気功の運用法は、深刻なダメージとなって使い手を苛さいなむ。
　電でん磁じ発はつ勁けいなどはその最たるものだった。使えば決まって内傷を負う。それが紫し電でん掌しようの一いち撃げきの、最後の切り札たる所以ゆえんである。これも生身のままサイボーグと相対するリスクと思えば許容するしかない。
　特に今夜は『轟ごう雷らい功こう』で室内のセキュリティを一いつ掃そうしてから、ろくな調ちよう息そくもせぬままに『紫電掌』を放った。無理が祟たたるのも当然である。
　ここまで軽けい功こうで駆けてくる間、小こ脇わきに抱かかえていた幼年型ガイノイドを地面に立たせてから、濤タオ羅ローは壁かべに背を預けて座り込んだ。
　心を静めて内息を整え、乱れきった気脈を清せい澄ちようにすると、やがて内傷の痛みは潮が退ひくように鎮しずまっていった。完治させるには養よう生じようが必要だが、当面は調息だけで乗り切れる。
　幼い人形は、そんな濤タオ羅ローをしばし無言のまま見守ってか

ら、両手に抱だきかかえていた荷物を差し出した。
　斬きり落としてきた、樟ジヤンの人形の首。魂こん晩ばく転写を施ほどこされた有機メモリは、この中に収まっている。
「……来い」
　濤タオ羅ローは幼年型ガイノイドを招き寄せると、その懐ふところに手を入れてＰＤＡを取り出した。樟ジヤンの部屋での立ち回りに備え、人形に預けておいたのだ。
『轟雷功』は周囲の電子デバイスを悉ことごとく破は壊かいする。使い手が身につけた電子機器も例外ではない。電磁発勁を使うとなれば、こうした用心も必要だった。
「後ろを向け」
　従順に、だが機械的な動作で踵きびすを返す人形。その耳みみ朶たぶの裏に隠かくれるようにして設しつらえられたマルチスロットに、ＰＤＡの端たん子しと転送ケーブルを挿そう入にゆうする。
　ケーブルのもう一いつ端たんは、同じく樟ジヤンのガイノイドのスロットに。
　接続と同時に、ただの生首だったガイノイドの有機メモリが活性化し、チックめいた瞬まばたきを始めた。同時に幼年型の方も外部ドライブを認にん識しき。震える生首と呼応するように顔筋を小さく痙けい攣れんさせる。
　手順は『左さ道どう鉗かん子し』に教わった通り、何一つぬかりはない。これでいよいよ、あの闇やみ医者が詐さ欺ぎ師しかどうか判別がつく。
　震える指で、濤タオ羅ローはＰＤＡに転送コマンドを入力した。ＰＤＡの液えき晶しよう画面に転てん送そう状じよう況きようを示すインジケーター・グラフが表示される。
「……」
　奇き妙みようなダイアログも、不正処理のアラートも一いつ切さいない。何の変へん哲てつもないデータ転送。だが……
「……か……」

それまで一切の声を発していなかった幼年型ガイノイドが、不意に喉のどから息を漏もらした。能面のような無表情が崩くずれ、不自然なほどに瞼まぶたが見開かれる。

ＰＤＡの画面上では、淀よどみなく処理されていく筈はずのグラフの帯が、突とつ如じよとして狂くるったように躍おどり始めた。樟ジヤンから奪うばった人形の首から、濤タオ羅ローの持参した人形へ……ただのビット情報とは異なる〝何か〟が、転送ケーブルを通過し始めている。

「あぁぁぁぁぁうぅぅぅあぁぁぁぁ……」

壊こわれたラジオか何かのように、意味を成なさない発声を繰くり返す幼年型ガイノイド。それと共鳴するように生首の方も、声こそ出さないが、激しく顎あごと眼球を痙攣させる。

そっと手を伸のばし、震える生首の額に触れる濤タオ羅ロー。セラミックカーボンの頭ず蓋がいが、じんわりと熱を帯びている。

「……」

その表情を強こわ張ばらせるのは、未知なるものへの畏い怖ふだった。

まぎれもない脱魂レイス燃焼バーン──今この現場を押さえられただけで、第一級の電脳犯罪が成立する。

魂たましいというものを定義する法律用語はない。それゆえ刑けい法ほうにおいては、その怪かい現象そのものを犯罪の証しよう拠こととして認定する。即すなわち、転送ログの消しよう滅めつと、転写元の記録媒ばい体たいの自然崩ほう壊かい。

かすかな異い臭しゆうが鼻をつく。樹じゆ脂し製の頭とう髪はつが焦こげつきはじめている。データを吸い出される生首は、すでに触さわれないほどの高温を放っていた。中の有機メモリは溶よう解かいを始めているだろう。

脱魂レイス燃焼バーンの結果として、出力側となったドライブは修復不能な破損を被こうむる。

炭素、珪けい素そ、磁気媒体、いずれにせよ例外はない。生体の脳

から量子化された情報は、なぜか転写されるたびに元の記録メディアを破壊してしまう。脳のう細さい胞ぼうは死し滅めつし、ハードディスクは溶解し……悉ことごとく修復不能な〝死〟を迎むかえる。

ただのデータ転送が、いったいどういう原理で物理的崩壊をもたらすのか？　そのエネルギー、熱量はどこから発生するのか？

脳生理学、電脳情報学、いや物理法則そのものを根本から揺ゆさぶる怪現象。だがすべては謎なぞに包まれたまま、解明の試みさえ為なされていない。

それは魂の禁きん忌きを暴あばくことに躊ちゆう躇ちよした、学会の権けん威い者しやたちによる計らいだった。脱魂レイス燃焼バーンは研究自体が禁忌であり、ただ〝神の摂せつ理り〟という戒かい句くだけで事足れりとされているのが現状である。

魂は唯ゆい一いつ無二のもの。それを複製することは、人じん智ちを超こえた法則により規制される。それ故に……

魂こん魄ぱく転写の犠ぎ牲せい者しやは脳に障害を被る。その度合いは、転写された情報量に比例する。樟ジヤンの自じ慢まんの人形と、残る四体のガイノイドのために、かつて一人の少女が生いけ贄にえとなった。彼女の脳は、細さい胞ぼうの最さい後ごの一いつ片ぺんに至るまで壊え死ししして果てたのだ。

「か……は……く……ぁ……」

狂ったようにフリッカーを続けるＰＤＡの画面。人形の細い生体は音程の外れたノイズを放ち続け、その腕うでに抱だかれた生首の方は、うっすらと煙けむりを漂ただよわせはじめる。

「……」

どれほどの時が経ったただろうか。濤タオ羅ローが意識したよりも、それは短い時間だったかもしれない。

はたと人形が目を閉とざし、奇き声せいを発していた口を噤つぐむ。

ＰＤＡに目を遣やると、画面はいつの間にか元に戻もどり、何事もなかったかのように転てん送そう終しゆう了りようのダイアログを表

示していた。
　しばし躊躇した後、濤タオ羅ローは転送ケーブルをスロットから抜ぬく。湯気を立てる生首は、地面に落ちるがままに捨て置いた。
　小さな肩かたに手を載のせて、そっと揺すると……人形は微睡まどろみから醒さめたように目を開けた。
　視線が合う。凝じつと見返す人形の視線は、真っ直すぐ濤タオ羅ローの眼めに。それから焦点を引いて濤タオ羅ローの顔全体を捉とらえ、彼の手がおのれの両りよう肩かたに乗っている有様を、少し当とう惑わくしたように交こう互ごに眺ながめる。
　雨の中、焦しよう点てんの定まらない視線を虚こ空くうに漂ただよわせるだけだった瞳ひとみが、今ははっきりと意味のある挙きよ措そを見せている。
　濤タオ羅ローには言葉もなかった。樟ジヤンの部屋で人形を見たとき、確かに感じた気配と同じもの。
　姿形など問題ではない。本当に大切な相手は……ほんのわずかな気配だけで、解わかる。
　だから濤タオ羅ローには理解できた。この世に二人となく大切に、慈いつくしんだ妹の魂を。
　声もなく、笑え顔がおもなく、だが見み違ちがえようのない──それは彼女の眼まな差ざしだった。
「瑞ルイ麗リー……」
　その名に万ばん感かんの想おもいを込めて呼ぶ。涙なみだは遅おくれてやってきた。
「……」
　声を殺して慟どう哭こくする濤タオ羅ローを、幼い人形は困こん惑わくめいた眼差しで見守っていた。

そこは、時に置き去りにされた部屋だった。

紫し檀たんを彫ほり抜いた虎とら像が声なき咆ほう吼こうを放ち、掛かけ軸じくには墨ぼく筆ひつの龍りゆうが雄ゆう渾こんに躍おどる。かそけき明かりすら電気ではなく、鯨げい油ゆに火を灯ともす龕がん灯どうである。

内装から調度品に至るまで、その寝しん室しつは古こ色しよく蒼そう然ぜんたる宮きゆう殿でん式で統一されていた。

連れん子じ窓まどから忍しのび込むのは、はるか悠ゆう揚ようたる長ちよう江こうを渡わたって届いた風。だが運び込まれたその夜気は、油ゆ煙えんと錆さびの匂においを孕はらみ、過ぎし日の江こう南なんの開かい豁かつな爽そう気きはない。

天てん蓋がいつきの寝しん台だいでは、老いたる帝てい王おうが死に瀕ひんしていた。

李レイ天テイエン遠ユエン。その名を聞けば無ぶ頼らいの輩やからはことごとく顔色を失う。江南に長くその歴史を刻み、今なおアジアの黒社会にその名を轟とどろかせる秘密結社『青チン雲ワン幇パン』の、彼こそは当代寨さい主しゆであった。

だがそんな肩かた書がきの威い勢せいも過日のもの。病びよう床しように痩やせ衰おとろえた矮わい軀くは、ただ死に瀕した老人のものでしかない。

体内器官の機械化で延命を図はかることは容易たやすいが、敢あえてそうしたサイバー化を忌き避ひする高こう齢れい者しやも、まだ珍めずらしくない。李レイもまた、肉体の機械化に抵てい抗こうを持つ最後の世代の一人だった。

いかがわしい先せん端たん技ぎ術じゆつを拒こばんで天てん寿じゆを全まつとうせんとする気き概がいも、しかし彼の侍じ医いたちには通じなかったのであろう。老人の枕まくら辺べは、容よう赦しやなくテクノロジーの侵しん略りやくを受けている。

寝台のぐるりを取り囲み、消えゆく命を冷然と見守る生命維い持じ装置。冷れい却きやくファンの抑おさえた唸うなりも、静せい謐ひつ

を掻かき乱すには充じゆう分ぶんだ。一群の医い療りよう装置は、その存在感だけで室内の古こ雅がを蹂じゆう躙りんしていた。

〝せめて今際いまわのきわぐらい、過ぎた時代の郷きよう愁しゆうに浸ひたりつつ果てたかったものを……〟

死に際ぎわさえままならぬ我わが身を、老いた帝王は嘆たん息そくする。

持って生まれた肉体に固こ執しゆうする老人の頑がん迷めいさは、健全な器官まで切り捨てて機械部品と交こう換かんしている今日きよう日びの若者たちからすれば、物笑いの種でしかあるまい。

だが同様に李レイもまた、人と機械の境界を脅おびやかして憚はばからない手合いには、どうあっても心許せない。

四し肢しや臓ぞう腑ふのみならず脳にまで配線を巡めぐらし、半導体を詰つめ込んだ怪かい物ぶつたち。

彼らの肉体のみならず、それを良しとする心理そのものに、李レイは悪お寒かんを禁じ得なかった。連中は人なのか？　機械なのか？　己おのれの魂たましいの拠より所を何処いずこと心得ているのだろうか。

特に、あの男……

部屋の静せい寂じやくを蹴け散ちらすように、颯さつ爽そうと足を運ぶ音が床ゆかを踏ふみ鳴らす。おのれを阻はばむものは何もない。自らそう自負し、他者にもそう認めさせて憚はばからない、そんな傲ごう岸がんさがありありと窺うかがえる足音の主は、李レイには馴な染じみのものだった。

男―劉リユウ豪・ホー軍ジユンは李レイの枕辺で踵かかとを鳴らすや、取り繕った恭うやうやしさで拱きよう手しゆ抱ほう拳けんする。

「……お休みのところ、失礼いたします」

艶やかな繭けん紬ちゆうの布地に龍の刺し繍しゆうをあしらった長ちよう衫さんは、香ホン港コンの最新モード。そんな華か美びな出いで立ちが何のけれんも感じさせないのは、その風ふう貌ぼうの端たん麗れいさと、匂におい立つような気品ゆえであろうか。

だがこの男、姿形は至し極ごく真っ当な人間と見えて、その実、脳と脊せき髄ずい以外に生まれ持った身体からだは残っていない。生身の肉体と見分けがつかぬ機械の身体。李レイからしてみれば、なまじ無機物の本ほん性しようを露あらわにするよりおぞましい姿である。

加えて、その心根に至っては……およそぬくもりのある血が巡めぐっているとは思えない。

「こんな夜よ更ふけに、何の用かね？　劉リユウ副ふく寨さい主しゆ」

幇ほう会かいナンバー２の肩書きを背負うには、男の容姿は若すぎたものの、その威い風ふうは充分すぎて余りある。寨主の前でこうも物もの怖おじせずに振ふる舞まえるのは余よ程ほどの傑けつ物ぶつか、さもなければ只ただの馬ば鹿かだけだ。

「寨主にあられましては、本日もご機き嫌げん麗うるわしゅう……」

口調ばかりは慇いん懃ぎんでも、澄ました声音には畏い敬けいなど欠片かけらもない。むしろ痩やせ枯かれた四し肢しの、寝台に縫ぬい止められた有様をまるで見下すかのような……そんな冷れい笑しようめいたものさえ窺うかがわせた。

「何の用か、と訊きいておる」

嗄しわがれた声に、底冷えのするような険がまじる。老いさばらえてなお李レイは寨主。若造の不遜を是ぜとすることはない。

王位とその簒さん奪だつ者しや……互たがいに狸たぬき芝しば居いで腹を探さぐり合う関係はとうに過ぎていた。哀しいかな、戦いの趨すう勢せいは既すでに決している。いかに人の世に徳と義があろうとも、最後に審しん判ぱんを務めるのは、流れ過ぎる時間の非情さなのだ。

それゆえ、一方は憎ぞう悪おと憤いきどおりを隠かくすこともなく。もう一方はそれに怖おじることもなく飄ひょう々ひょうと。それがこの二人の会談の、いつも変わらぬ空気であった。だが──

「濤タオ羅ローが街に戻もどりました」

短く言い捨てた劉リユウの言葉に、老人の陰いん鬱うつに乾かわい

た眼めが鋭するどさを増す。
「ほう。濤タオ羅ローが……な」
「今夜、私の配下の一人が奴やつの手にかかりました。まぎれもなく〝紫し電でん掌しよう〟。見み違ちがえようはありません」
「一年前、奴はマカオで死んだと……そう告げたのは貴様だったか？」
「面めん目ぼく次し第だいもありません」
「彼奴きやつの命運は貴様の〝鬼き眼がん〟をもってしても見み抜ぬけなんだか。善ぜん哉ざい、善ぜん哉ざい……」
　乾ひ涸からびた喉のどから悪意もあらわな笑いを搾しぼり出したあとで、李レイは炯けいけいたる眼光で劉リユウを見み据すえる。
「一年か……隠れ潜ひそんで傷を癒いやし、卑ひ劣れつな裏切りで削そがれた英気を養っておったとすれば、大凡おおよそ、その程度かかるであろうな」
「いささか空想を逞たくましくしすぎではありませぬか？」
　白々しく諫かん言げんする劉リユウを無視して、李レイはますます語気を荒あらげる。
「壮そう士しは去りて還かえらず、江湖に義ぎ俠きようの志は潰ついえ……されど天意は必ずや示される。貴様の奸かん計けいに屈くつせず、孔コン濤・タオ羅ローは戻ってきた。あ奴こそは真の功夫。これぞ天の采さい配はいと言わずして何たるか」
「随ずい分ぶんな言われようですな。まるで私が外げ道どうか何かのようだ」
「違ちがうとは言わさんぞ。〝鬼き眼がん麗れい人じん〟……貴様の心しん胆たんは、その身体と同じ。……姿形ばかり人を装よそおって、一皮剝むけば化け生しようの本ほん性しようが隠かくれておる」
　面と向かって罵ば倒とうされた劉リユウが、ようやく表情らしい表情を見せる。だがそれは怒ど気きとは程ほど遠とおい、冷ややかな憫びん笑しようだった。
「貴方あなたと貴方の幇ほう会かいのために粉ふん骨こつ砕さい身し

んしてきた後こう輩はいに、ずいぶんな御お言葉ですね」
「たわけ……」
　病床の虜りよ囚しゆうとなった李レイの耳にも、上海の現状は届いている。青チン雲ワン幇パンが好漢俠きよう客かくの風を吹ふかせたのも、今は遠い昔のこと。
「今の青チン雲ワン幇パンには〝義〟もなければ〝仁〟もない。血に飢うえた亡もう者じやの群ではないか」
「心外ですな。私は今という時代に沿って、組織を刷新してきただけのこと。―古い時代に生きた方々には、お気に召めさない形だったようですが」
「貴様は義ぎ俠きようの精神を根絶やしにした。先代が尊び培つちかってきたすべてを貶おとしめた。
　悪あつ鬼きの業わざに人は抗こうせず、されど必ずや天が裁きを下す。我らが幇会を悪あつ鬼き羅ら刹せつの巣にしおった報むくい……いよいよ受ける時が来たのだ」
「悪鬼……ですか。この私が」
　嘆息して宙を仰あおぐ劉リユウ。その視線は虚こ空くうを流れ……やがて天てん井じようの片かた隅すみの監かん視しカメラを捉とらえて止まる。レンズに向けたそれとない目配せに、だが臥所ふしどの李レイは気付かない。
「私には私なりに、慈じ悲ひの心もあるのですがね」
　劉リユウの声音がわずかに変わる。先さき程ほどまでより若じやつ干かん低く、ほんのわずかに抑よく揚ようを欠いた……ただそれだけの変化でありながら、致ち命めい的てきな何かが欠け落ちた口調。
「たとえば……だ。すぐ目の前に、生きながら朽くち果てんとしている老人がいたとする。
　彼の残り少ない余生には、何一つ慰なぐさめがない。一いつ生しよう涯がいをかけて築いた世界が汚けがされ、崩くずされていく様を、為なす術すべもなく見守るしかない。屈くつ辱じよくを噛かみしめながら」

李レイの乾涸らびた顔が怒ど気きに染まるのも構わず、劉リユウは冷れい笑しように口元を歪ゆがめる。
「哀あわれだね。まったく……見るに偲しのびない。
いっそ引導を渡わたしてやるのが慈悲、と──そう思う俺は、やはり悪鬼なのかい？　寨さい主しゆ」
「貴様は……」
一声を発したその直後、李レイ天テイエン遠ユエンはこの世の人でなくなっていた。言いさした言葉を何が阻はばんだのか、それすらも理解できぬまま。
苦痛に襲われる暇いとますらない、迅じん速そくな死。殺す者の心はどうあれ、死に方としてはたしかに慈悲深い。

モニター装置の警報音に安あん眠みんを破られた侍じ医いが、おっとり刀で老寨主の寝しん室しつへと駆かけつけたのは、数分の後だった。
寝室では、仰ぎよう臥がする寨主を囲った生命維い持じ装置の群が、おのおの勝手気ままにアラート音の重奏を奏かなでている。
それを傍かたわらで見守っているのは、誰あろう劉リユウ豪・ホー軍ジユン……『鬼き眼がん麗れい人じん』の渾名あだなで知られる幇会のナンバー 2 ではないか。それがなぜ、こんな夜よ更ふけに寨主の寝しん所じよにいるのか？
だがそんな侍医の疑念は、劉リユウの冷ややかな一いち瞥べつを浴びた途と端たんに消し飛んだ。
この視線の前では、ただの一挙手とも間ま違ちがいは赦ゆるされない……彼に見据えられた者は皆みな、そんな得体の知れない緊きん張ちよう感かんにとらわれる。
「ろ、老師の様よう態だいが急変を……」
「見ての通りだ」

端たん整せいな顔を仮面のように引き締しめて、劉リユウは寝しん台だいの寨主へと視線を戻もどす。

その凝視から免れて安あん堵どしたのも束の間……李レイ老人が明らかに息絶えているのを見て取って、侍医は再び恐きよう慌こうの一歩手前まで追いつめられる。

「慌あわてずとも良い。今さら貴様に出来ることは何もない」

侍医の狼ろう狽ばいぶりとは裏腹に、劉リユウはあくまで泰たい然ぜん自じ若じやく。この非常時において平素と変わらぬ冷れい淡たんな居住まいは、さすが副寨主の器うつわと言うべきか、あるいは冷れい酷こくと言うべきか。

「いったい、何が……」

「さてな。私も今来たところだが……」

劉リユウは無造作に骸むくろの上うわ掛がけを捲まくり、胸むな元もとをはだける。痛ましいほどに肋あばらの浮うき出た老師の胸には、黒々と鬱うつ血けつした手形が惨むごたらしく残っていた。

「ただの一いち撃げきで五ご臓ぞう六ろつ腑ぷがことごとく破は裂れつしている。……この掌しよう痕こん、まさしく『黒こく手しゆ裂れつ震しん破は』。戴たい天てん流の内ない功こう掌しよう法ほうに違ちがいない」

「な、内功……？」

武芸を心得る劉リユウの見立てに、門外漢の侍医は私見の挟はさみようもない。

「事の次し第だいは一いつ切さい伏ふせておけ。いま寨主の死が露ろ見けんしては青チン雲ワン幇パンの存亡が危あやうい。……この場の采さい配はいは貴様に一任する。報告はすべて私に直じき々じきに」

「は、はい……」

毅き然ぜんと下げ知ちをくだす劉リユウの言葉に、侍医は一も二もなく頷うなずいた。事態の重大さに錯さく乱らんしつつある彼にとっては、副寨主の判断だけが頼たのみの綱つなだ。差さ配はいできる人間がこの場に居合わせたという偶ぐう然ぜんを、ただ天に感謝するば

かりである。
　事後処置の手配を始める侍医に背を向ける前に、劉リユウは横目でもう一度、天てん井じようの監かん視しカメラを見み遣やる。眼下に繰くり広げられた秘ひめ事のすべてを見届けた電子の眼め。レンズの輝かがやきが、唯一の証人として冷ややかに劉リユウを睨にらみ据すえる。
「……」
　劉リユウは颯さつ爽そうたる足取りを淀よどませることもなく、今は死せる王の霊れい廟びようと化した寝室を後にした。

　浦プー東ドン、金きん融ゆう貿易区……
　雲をついて林立する摩ま天てん楼ろう。過か剰じよう供給の電力を誇こ示じするかのように夜通し輝くイルミネーションは、アジア圏けんにおける金融、文化の中心地を担になう次世代モデル都市としても、面めん目ぼくを果たして余りある。
　陸路にひしめく有輪車しや輌りようはもちろんのこと、ビルの合間を縫ぬうようにして空中に敷ふ設せつされた誘ゆう導どう軌き道どうを、悠々と飛翔する推力スラス推進ト・ヴ車輌イーグルの往来もまた、まるで都市という巨きよ大だいな肉体を循じゆん環かんする血流のように、昼夜を問わず止やむことがない。
　スラスト・ＳヴィーグルＶによる都市区画への進しん入にゆうが規制されない街は、アジア圏においては未いまだこの上海しかない。何千台ものＳＶの自動操縦を並列処理できる管制システムと、螺ら旋せん状に街区を網もう羅らする誘導軌道。いずれも巨きよ額がくを投じたインフラ整備の賜たま物ものである。
　そんな光の洪こう水ずいを地上三〇〇メートルの高みから見下ろしながら、だが劉リユウ豪・ホー軍ジユンはその果て―黄こう浦ほ江こうの対岸に広がる深い闇やみを遠望する。絢けん爛らんな近景とは対

照的に、外ワイ灘タンを中心とする上海旧市街は、死の沈ちん黙もくに包まれている。

二一世紀初頭の混乱期、再開発計画の破は綻たんによって上海市が衰すい退たいの一いつ途とを辿たどる中、すでに多た国こく籍せき企き業ぎようの活動拠きよ点てんとして機能し始めていた浦東は、企業と癒ゆ着ちやくした市当局による不当な政策によってその富を独どく占せんし、旧市街の零れい落らくをよそに栄えい華がの階段を上り続けた。

言うなれば、旧市街の屍し肉にくを貪むさぼることで肥こえ太ってきた金融貿易区。その爛らん熟じゆくした繁栄が邪よこしまなものを孕はらんで見えるのは、古き上海の怨おん念ねんが影かげを落としているせいか。

闇に沈しずんだ対岸に、劉リユウは想おもいを馳はせる。あの闇のどこかに、今も孔コン濤・タオ羅ローは隠かくれ潜ひそんでいるのだろう。胸に凝こごった憎ぞう悪おで殺意の刃やいばを研とぎながら……

「孔コンのことを考えてるのかい？」

想いに耽ふける副ふく寨さい主しゆの背中に、部屋の主が声をかける。いま三〇〇メートル眼下の絶景を睥へい睨げいする劉リユウの立つ場所は、上海電脳義ぎ肢し公司ビル最上階。取締役社長呉ン・榮ウイン成シンの執しつ務む室である。

歴代社長の執務を支えた黒こく檀たんのデスクを足あし枕まくらにして、磨き抜いた革かわ靴ぐつをぞんざいに投げ出した呉ンには、企き業ぎよう家かの風格など欠片かけらもない。高級スーツの出いで立ちこそ豪ごう奢しやだが、伝法な口調といい、下げ卑びた笑え顔がおから滲にじみ出る横おう柄へいさといい、胡う乱ろんな酒場で女でも侍はべらせていた方が余よ程ほど様になる風ふう体ていである。

事実その印象は、間ま違ちがってはいない。この男は堅かた気ぎではなく青チン雲ワン幇パンの香こう主しゆ。それも劉リユウの腹心の一人だ。

最さい先せん端たんサイバーウェアの開発で世界的に知られた気き鋭えいメーカーが、M＆Aによって青チン雲ワン幇パンの手中に堕おちたのは半年前。顔ぶれを一新した株主たちによって社長の椅子に据えられた呉ンは、言うなれば傀かい儡らいである。

幇会副寨主たる劉リユウが、今こうして社長室の窓の展望を恣ほしいままにしている有様にも、実は何の不思議もない。

上海電脳義肢公司の買収は劉リユウが幇パン香こう主しゆとしてのキャリアの総仕上げに成し遂とげた偉い業ぎようであり、これによって青チン雲ワン幇パンは上海の覇は権けんのみならず、アジア黒社会の雄ゆうとして威い名めいを轟とどろかすまでになった。

第四次産業革命とも謳うたわれるサイバネティクス技術の実用化が、結果としてもたらした新たなる社会的脅きよう威い―サイバーウェポンや電脳ドラッグ、ガイノイドによるポルノ産業―いずれも、犯罪結社の金脈として旨うま味みあるものばかりである。

いち早く規制に踏ふみ切った欧おう州しゆうに対し、法整備の出で遅おくれた東欧とアジア圏では裏サイバネティクス市場が猖しよう獗けつを極きわめた。かつてメコン・デルタが麻ま薬やくの産地として隆りゆう盛せいを誇ほこったかのように、いま東南アジアは非合法サイバーウェアの一大拠点として、全世界の暗黒街における需じゆ要ようを賄まかなっている。

その中心地がここ上海であり、世界屈くつ指しのパーツメーカーを傘さん下かに収めた青チン雲ワン幇パンなのだ。

かつて何なん人ぴとたりとも想像し得なかったサイバネティクス・マフィアの誕生……その立役者である劉リユウの功績は計り知れない。その若さにも拘かかわらず副寨主の座にまで上りつめたのには、相応の理由があった。

「しかし解げせないね。奴やつはあんた自身が引導をくれてやったんだろ？　一年前に」

「そのつもり……だったのだがな」

夜景に見入りながら返事を返す劉リユウは、心ここにあらず、の態

ていである。
「是ぜ非ひもない。俺とて人の子だ。仕損じることもある」
「よく言うぜ」
　語り手に似合わぬ謙けん虚きよさを、呉ンは鼻で嗤わらい飛ばす。
「俺に言わせりゃ、あんたはとっくに人じん外がい化け生しようの域に踏み込んでるぜ。〝鬼き眼がん麗れい人じん〟の旦だん那な」
「化け生しよう……か。そういう貴様はどうなんだ？　〝網もう絡らく蠱こ毒どく〟」
　劉リユウもまた冷ややかに微び笑しようしながら、かつての異名で呉ンを呼ばわる。
「脳まで増設しているサイボーグに、俺だけ怪かい物ぶつ扱あつかいされては心外だ」
「あんたらサイバネ拳けん法ぽう家の連中に比べれば、俺なんて可愛かわいいもんさ。
　それに、とりわけあんたはな……手足を取っ替かえ引っ替え機械にしたぐらいじゃ、到とう底てい及およばない場所まで行っちまってるように見えるんだがね？」
　劉リユウは相手の弁舌に背を向けたまま、窓の外の夜景に冷たく微笑む。呉ンのとりわけ剽ひようげた口調が、実は畏い怖ふの色を隠すためのものと──彼は見み抜ぬいていたのだろうか？
「その化け生しようを出し抜ぬいて生き延びたとなると、あの孔コンもまた人の域にはいないのかもしれん。果たして、この上海に舞まい戻もどってきた今……奴は、いったい何者なのかな？」
「考えたくもないね。他ほかの奴らに訊きいてくれ」
「……連中はまだ揃そろわないのか？」
「すぐにも飛んでくるさ。なんせ事が事だけに……お？　噂うわさをすれば何とやら」
　社長室直通のエレベーターに、今まさに二人の客人が乗り込んだことを、呉ンは居ながらにして察知した。彼の脳はセキュリティを含ふくむすべての社内ＬＡＮに常時接続されている。

ほどなく……必要以上に広大な社長室の一角で、大おお扉とびらが音もなく滑すべり開いた。秘書の取り次ぎもなければ案内もない。このビルにおいては、望めば直々に最上階まで推参できるのが青チン雲ワン幇パンの香主たちである。

「この面子メンツに、この場所とは……いったい何の相談だ？　副寨主」

禿とく頭とうに黒の長ちよう袍ほうをまとった剽ひよう悍かんな男は『百ひやく綜そう手しゆ』こと斌ビン偉・ワイ信ソン。幇会内では〝盟証〟と呼ばれる参さん謀ぼう役を務め、普段から劉リユウの補ほ佐さ役として采さい配はいを振ふるっている。

その隣となりで、女だてらに鋭するどい眼がん芒ぼうを放つのは『羅ら刹せつ太たい后こう』朱チユウ笑・シヤオ嫣ヤン。彼女は〝陪ばい堂どう〟……幇パン内部での揉もめ事に対処する、いわば〝仕置き役〟の香主である。

「何だか知らないけどさ。今あたしが暇ひま持て余してるわけじゃないのは知っての事だろうね？」

斌ビンはともかく、今まさに樟ジヤン殺しの調査に奔走している最中だった朱チユウの見幕は穏おだやかでない。

青チン雲ワン幇パンの手の者がいち早く現場を押さえたため、女銜ぜげんの死は表おもて沙ざ汰たにはなっていない。官かん吏りに代わり下げ手しゆ人にんを捜さがすのは〝陪堂〟……幇内でのトラブルを処理する朱チユウの役だった。

「その件くだんの、樟ジヤン殺しの下手人だがな……」

呉ンが言いさすのを、劉リユウが手で遮さえぎる。

「調べの方は、どの程度進んだ？」

忌いま々いましげに嘆たん息そくして、来らい賓ひん用のソファに腰を下ろす朱チユウ。副ふく寨さい主しゆを相手に、いずれの香主も遠えん慮りよがないのは、彼らの付き合いの長さもさることながら、揃いも揃って徳や礼節といった言葉とは縁えん遠どおい人格の持ち主であるが故だ。

「とりあえず、樟ジヤンの腕うで……高周波ブレードかナノワイヤーでも使わない限り、ああも見事にゃ斬きれないもんだが、だとしたら破断面に特とく徴ちようが残る。ただの刀でブッタ斬ったとしか見えないんだよね。ま、充じゆう分ぶんな速さがありゃ出来んこともない。下手人はかなりヘヴィな筋力、神経強化をしてると見ていいね。……それと、ＥＭＰ。たぶん高出力のマイクロウェーブ砲ほうか何かだ」

「……」

　聞いているのかいないのか、相あい槌づちのひとつもよこさない劉リユウのことを内心では訝いぶかりつつも、ともかく朱チユウは先を続けた。

「まず外から樟ジヤンの部屋の警備システムを黙だまらして、それから押し入って打ちよう々ちよう発はつ止し……あと、最後の決め手にも使ってる。樟ジヤンのパーツの回路はシールド越ごしに焼き切られてた。よほどの至近距きよ離りからブチ込まれたんだな。わざわざそんな方法でトドメ、ってのも解げせないんだがね。わざと苦しませるつもりだったのかも。趣しゆ味みのいい野や郎ろうだぜ。まったく。

　ともかく、武器屋を片かたっ端ぱしから当たらせてる。ここ数日のうちにＥＭＰウェポンの商あきないがなかったか……」

「ご苦労だった」

　ここにきて、今度は唐突に劉リユウが割り込んだ。

「だが残念ながら、無む駄だ骨ぼねだ」

「あん？」

「さらにもう一人、犠ぎ牲せい者しやが出た。……李レイ寨主が亡なくなられた」

　胡う乱ろんげに眉を寄せていた朱チユウと斌ビンが、驚きよう愕がくに顔を強こわ張ばらせる。

「寨主が……!?　馬ば鹿かな、一体いつ？」

　劉リユウからの目配せに頷うなずいて、呉ンが備え付けのスクリーンに画像を表示する。

「三時間ほど前になる。まだ情報は抑おさえている。事が事だけに、な……
　警備カメラに録画が残ってる。見てくれ」
　李レイ天テイエン遠ユエンの寝しん室しつに据すえられた監かん視しカメラの画像。わずかな画像の乱れは、暗所での映像に階調補正をかけた結果だろう。細部までが鮮せん明めいに記録されている。
「……ここだ」
　予あらかじめマーキング済みの尺位置をサーチして、呉ンは問題のシーンを再生した。
　斜ななめ俯ふ瞰かんの画角の中、寝台に横たわる李レイ寨主の枕まくら辺べに、長ちよう衫さんの人ひと影かげが立ちはだかる。老人は眠ねむってはおらず、来訪者と口論の最さ中なかなのか、目を剝むいて激げつ昂こうしている。口角に泡あわを飛ばす老人に、やおら掌しよう撃げきを振り下ろす長衫の男。
「……寨主と面識のある相手、か？」
　斌ビンの問いに、呉ンは暗殺者の顔周辺をトリミングして引き延ばし、凶きよう行こうの瞬しゆん間かんをもう一度再生する。その風貌は李レイ寨主のみならず、この場に居合わす全員が見知っているものだった。
「孔コン濤・タオ羅ロー……!?」
　有り得ない、とばかりに呆然と呟く斌ビン。それを受けて劉リユウが頷く。
「そう、奴やつだ。間ま違ちがいない」
　一年の時を隔へだてたとはいえ、斌ビンや朱チユウがその顔を見誤ることはなかった。かつては劉リユウの許もとで、共に働いた男である。
「樟ジヤンを殺したのも奴だろう。鋼はがねも断ち切る戴天剣けん法ぽう、そして秘伝の電でん磁じ発はつ勁けい……〝雷らい鳴めい気き〟と〝紫電掌〟だな。
　武器屋を問い詰つめても埒らちはあかない。奴が使ったのは刀一ひ

と振ふり……あとは生身に具そなわった技わざだけだ」
「そんな馬鹿な……奴には、あんたが直々に引導を渡わたしたんだろうが。劉リユウ豪・ホー軍ジユン」
「あのときは仕損じた……と、いうことか」
　悪びれた風もなくあっさりと認める劉リユウ。立て続けの驚愕に言葉をなくして、二人の香主は食い入るようにスクリーンを見つめている。
「生きていただけでも驚おどろきだが……なぜ奴が寨主を？」
「そりゃ、寝ね返がえったからだろ」
　呉ンが苦虫を噛かみつぶしたような顔で、斌ビンの問いを受ける。
「劉リユウは、奴を斬った時にはもう青チン雲ワン幇パンの香主だったんだぜ。奴が幇会そのものに裏切られたと思ってたって不思議はない。そんな孔コンが、いまさら寨主に恩義を感じてると思うかい？　この一年で誰だれの飼い犬に成り果ててたとしたって、驚くことはないさ」
　かつての幇会員を刺し客かくに仕立て、寨主を襲おそわせる黒幕……心当たりはいくらでもある。
　同じサイバネ裏マーケットの利益を争うロシア系シンジケート、市場を荒あらされ殺気立つユーロ・マフィアの諸勢力。青チン雲ワン幇パンを取り巻く勢力図は、決して穏おん当とうなものではない。
「だが、孔コンが寨主を屠ほふるためにこの上海へ戻ったのなら……何で先に樟ジヤンを手にかけた？」
「不思議か？」
　解わかりきった問いだとでも言わんばかりに、劉リユウは斌ビンを眇すがめ見る。
「当然だ。寨主暗殺などという大事を請うけ負っていたのなら、なぜその直前に、あたら幇会を警けい戒かいさせるような真似まねをした？」
「孔コンが樟ジヤンを憎にくむ理由、それを考えれば納なつ得とくできよう。あの男が上海に戻もどったら、まず何をすると思う？」

　場に居並ぶ全員が沈ちん黙もくする。誰も、自ら答える役を負いたいとは思わなかった。
「……当然、妹の消息を尋ねるだろうな。そこで瑞ルイ麗リーの死んだ顚てん末まつについて知る」
「……まさか」
　笑い飛ばそうとした斌ビンを遮さえぎって、さらに劉リユウが言葉を続ける。
「〝左さ道どう鉗かん子し〟の謝ツエ逸・イー達ターがな、先週から行方ゆくえが知れんそうだ。あの医師が孔コンの手にかかったとすれば……洗いざらい喋しやべらされたとしても不思議はないな」
「……」
「とかく妹のこととなれば見境のつかなくなる男だ。事情を知れば、寨主殺しの首しゆ尾びなぞ意中から失うせたに違ちがいない。
　何を差し置いても妹の仇あだ討うちを先に……そう思えば、まず誰よりも襲いやすいのは樟ジヤンだ」
「で、次はアタシ達の誰かが狙ねらわれる、ってわけ？」
　それまで沈黙を守っていた朱チユウが、低く抑おさえた声で呟つぶやく。
「孔コンを始末しない限り、その危険はつきまとうと思っていい」
「上等じゃないのさ……なら捜す手間が省けるってもんだわ」
　朱チユウの双そう眸ぼうは、虚きよ勢せいでなく本物の憎ぞう悪おに燃えていた。孔コンの怨おん念ねんよりも、孔コンが彼女の身を脅おびやかすという事態そのものに激げつ昂こうしているらしい。
「舐なめやがって……内家拳の腸ちよう詰づめ肉なんざ、この手で挽ひき肉にくにしてやるよ！」
「否、我々が出るまでもない。奴はすでに墓穴を掘ほった」
　闘志に昂たかぶる朱チユウを余所よそに、斌ビンはあくまで冷静である。
「なるほど俺たちは奴にとって、妹の仇かたきかもしれん。だが孔コンが李レイ寨主を手にかけた以上、奴はもう青チン雲ワン幇パンの仇

きゆう敵てきだ。奴を始末するために幇会を総動員しても、俺たちが後ろ指をさされることはない」
「幇を動かすってのかい？　馬ば鹿かをお言いでないよ。あんな狗いぬコロ一匹ぴきのために？　幇会の面子メンツはガタ落ちじゃないか！」
「自重しろ、朱チユウ。お前とてもう幇会の香主だぞ」
「さては怖おじ気けづいたね？　斌ビン。〝百ひやく綜そう手しゆ〟で鳴らした暗器の腕うで、もう錆さびついちまったのかい？」
　抑えの利きいていた斌ビンだったが、これには流石さすがに顔色をなくす。だが口を開いたのは劉リユウが先だった。
「随分と孔コンに拘こだわるんだな。朱チユウ。それは、拳けん法ぽう家としての意地か？」
「だとしたら、何さ？」
「〝紫し電でん掌しよう〟を侮あなどれば命はないぞ」
「……」
　朱チユウの眼まな差ざしが、殺気さえ孕はらませて静かに凍こおる。それを受け止める劉リユウは、逆さか撫なでするのを承知の上で、なお能面のような無表情を崩くずさない。
　音もなく鍔つば競ぜり合う視線が、際限なく空気を重くする。
「さっきも言ったことだが……寨主の死は、まだ誰にも漏もらしていない。察して欲ほしいものだな。斌ビン」
　劉リユウからいきなり話を振ふられて、斌ビンが目を眇すがめる。
「……どういう意味だ？」
「速すみやかに寨さい主しゆの葬そう儀ぎを執とり行いたいところだが、下げ手しゆ人にんが野放しのまま、というのは如何いかにも拙まずい。李レイ寨主の逝せい去きよを触ふれ回るより先に、まずは孔コンの始末に目め途どをつけねばならん」
「……幇ほう会かいは動かすな、と？」
「猟りよう犬けんを放て。孔コンの首に賞金をかける。フリーランスの連中に奴やつを狩からせろ」

「随ずい分ぶんと詰つめが甘いね」
　やはり納なつ得とくがいかないのか、呟く朱チユウの語調は刺とげ々とげしい。
「お前は口を出さんでいい。朱チユウ、くれぐれも先走って寨主の仇討ちなど考えるなよ」
　柳りゆう眉びを逆立てる朱チユウが何か言う前に、さらに劉リユウは言葉を継つぐ。
「お前は、樟ジヤン殺しの下手人さえ追っていればいい。寨主の件とは無関係だ」
「……ああ、成る程ほど」
　出かかった怒ど気きを呑のみ込んで、得心した朱チユウは獰どう猛もうな笑えみを満面に浮うかべる。
「そいつは樟ジヤンの一件だけで仕置きしていい、ってわけね」
「そうだ。くれぐれも混同するな」
「……さてと。それじゃぁお方々、話がまとまったところで解散しちゃぁくれないか？　俺も執しつ務むが溜たまってるんでね」
　緊きん迫ぱくの余よ韻いんが残る空気を混ぜ返すように、呉ンが気楽な声を挟はさむ。
「フン、飾かざり物ものが何を言うか」
　鼻を鳴らす斌ビンに、呉ンは剽ひようげた仕草で肩かたを竦すくめた。
「時は金なり、って奴だよ。盟証。
　ともかく方針は決まったんだ。動こうぜ。今日は朝から忙いそがしい日になる」

　今世紀初頭の大規模な再開発計画と、それを破は綻たんさせた経済恐きよう慌こうは上海の運命を決定づけた。
　住民を立ち退のかせたものの、いざ解体という段になって計画が頓

とん挫ざし、放置された廃はい屋おくの群れ。旧市街のそこかしこに、区画整理の途と中ちゆうで放ほう棄きされたゴーストタウンが散見される。

この南市、敦ドウン仁レン里リーも、そんな上海の暗部を物語る景観のひとつである。

未明から濤タオ羅ローは盛さかり場を離はなれ、この寂さびれきった街区に身を潜ひそめていた。樟ジヤンを手にかけた以上は青チン雲ワン幇パンが動くに違ちがいない。街にいては人ひと狩がりに遭あう。

もはや訪おとなう人もない、うち捨てられた関かん帝てい廟びようが、今は濤タオ羅ローの根城である。金きん箔ぱくは残らず剝はぎ取られ、鮮あざやかな朱しゆに塗ぬり込められていたはずの柱や梁はりも、色落ちして生木を晒さらしている。

往時にはどれほどの人が詣もうでたのかも定かでないが、長年に渡わたって炷たき込められた香こうの残り香がは、朽くちかけた建材に染しみついて今も離れない。

そんな黴かびと、線せん香こうの残ざん滓しの漂ただよう空気の中に、瑞みず々みずしいミントの芳ほう香こう剤ざいが薫かおる。

連れ歩いていたガイノイドの服を脱ぬがし、濤タオ羅ローは買い込んできたデオドラントペーパーをたっぷりと使って、身体からだの隅すみ々ずみまで汚よごれを拭ぬぐい取ってやっていた。

老ろう廃はい物ぶつなど生じないガイノイドの肌はだだが、それでも何日もの間、煤ばい煙えんと酸性雨の街を連れ回してきただけに、白い肌のそこかしこに煤すすの流れた跡あとがある。

むろん今日までこの人形に、こんな心づくしを施ほどこしたことはない。『左さ道どう鉗かん子し』の言葉に半信半疑だったうちは、勝手についてくるというだけの荷物に過ぎなかった。

だが今は、もう違ちがう。この人形の有機メモリの内部には──愛する瑞ルイ麗リーの欠片かけらが詰まっている。

「こんな風に風ふ呂ろに入れてやるなんて、もう何年ぶりだろうな」

語りかける声にも、我知らず想おもいがこもる。
「……」
「お前はませた女の子だったから、こういうこと嫌いやがるようになったの、俺よりも早かったんだよな。まだ餓が鬼きだった俺には、何が何だか解わからなくて、嫌きらわれたのかって勘かん違ちがいして……傷ついたっけな。あの時は」
「……」
返答が戻もどることはない。濤タオ羅ローとて承知している。それでも、話しかけずにはいられなかった。
もう幾いく度どとなく繰くり返してきたことだ。星なき夜空に、雨音の響ひびきに、いつも瑞ルイ麗リーの面おも影かげを想っては、虚むなしく語りかけてきた。
そんな独言に比べれば、こうして手で触れられる躰からだを前に語るのは、幾許いくばくかは報むくわれる。
身体を拭ふき終わった後は、ほつれた髪かみにドライシャンプーの泡あわをまぶし、丹たん念ねんに梳ときほぐす。
ナイロンの頭とう髪はつの手て触ざわりは、もちろん瑞ルイ麗リーのそれとは似ても似つかない。だがそれでも、指に覚えている感かん触しよくをそこに重ねて追想することはできる。
そうだった……髪を梳すいて結う段になると、いつも瑞ルイ麗リーは兄を呼ばわって手伝わせた。侍じ女じよは髪かみ結ゆいが下手へただとか、それに比べて濤タオ羅ローの方がまだ器用だとか、そんな言い分を理由にして。
自慢の髪を兄に触らせる瑞ルイ麗リーは、何であんなにも嬉うれしげだったのか。人形の髪を梳くしけずりながら、妹の弾はずむような笑え顔がおを思い出す。
「お前のために、兄妹らしいことなんて何一つしてやれなかったのに……そんな俺なのに……どうしてお前は、あんなにも……俺に懐なついてくれたんだ？」
「……」

あの笑え顔がおも、今はない。ただ虚うつろな眼まな差ざしが、無意味な問いかけを繰くり返す濤タオ羅ローに注がれるばかり。

そんな彼女の前に、濤タオ羅ローはポケットから取り出した鈴すずの腕うで輪わを掲かかげて見せる。

「ほら、これ。憶おぼえてるか？　誕生日の贈おくり物だっただろ？」

人形の手を取り、その細い手首に、腕輪を通してやる。かつて瑞ルイ麗リーにそうしてやったのと同じように。

そっと揺ゆすると、銀の鈴が蕭しようしようと鳴りさざめく。だが人形は、戸と惑まどったように小首を傾かしげ……それ以上の興味は示さない。

「嬉しくないか？　あの時は、あんなに喜んでくれただろ？　気に入ってくれてただろ？」

掠かすれた声で訴うつたえかけながら、だが濤タオ羅ローは承知していた。少女が返答することはない。濤タオ羅ローが誰だれなのかも、彼の言葉の意味すらも理解するまい。

今この人形に詰つまっているのは、かつて瑞ルイ麗リーだった魂こん魄ぱくの、ほんの断だん片ぺんでしかない。考えることも、声を出すことも、表情を見せることもできず、ただ濤タオ羅ローの為なすがまま、途と方ほうに暮れたように身を委ゆだねていることしかできない。

何もかもが、虚むなしい。

「お願いだ……笑っておくれ……もう一度、声を聞かせてくれ……」

眦まなじりから溢あふれ出た雫しずくが、小さな白い手に落ちる。

濤タオ羅ローは知っていた。彼女の身に何があったかを。何が瑞ルイ麗リーをこんな姿にしたのかを。

彼の大切な妹は、数人がかりで犯おかされながら死んでいった。身体のみならず魂たましいまで凌りよう辱じよくされ、人として死ぬことさえ許されず……死よりなお悲ひ惨さんな境きよう遇ぐうに堕おとされた。こんな慰なぐさみ物ものの人形に。

「御ご免めんよ……御免よ、瑞ルイ麗リー……」
　すべて濤タオ羅ローが悪かった。安あん穏のんな暮らしに背を向けて、幇ほう会かいの凶きよう手しゆとして剣けんに生きる道を選んだ兄。慢まん心しんするあまり、みすみす罠わなにかかった愚おろかしさ。彼は妹を守れなかった。側そばにいてやれなかった。
　あのとき、裏切りに気付いていれば。上海を留守にしなければ。濤タオ羅ローは、妹を護まもってやれた。
　だからこれは、濤タオ羅ローに科せられた罰ばつ……妹の変わり果てた姿を前にして、贖あがないようのない罪を思い知る。揺るがしようのない事実を再さい認にんする。
　もう二度と瑞ルイ麗リーは還かえらない。それが人の死だ。神ならざる人の手で曲げ得うるものではない。
『左さ道どう鉗かん子し』が何と請うけ合おうと、やはり信ずるには値あたいしない。あの闇やみ医者はたしかに稀き代たいの天才かもしれないが、だからといって天意を覆くつがえせる道理はない。
　昴たかぶりすぎた心を鎮しずめるために、床に置いてあった倭わ刀とうを握りしめる濤タオ羅ロー。その重みを確かめ、鞘さやの中で震ふるえる刀身の冷たい音を聞くうちに、慟どう哭こくは怨えん嗟さへと変わる。
「……もう誰にも、お前を触さわらせはしないからな。瑞ルイ麗リー……
　お前を殺した奴やつらは……一人残らず地じ獄ごくに落とす。奴らが奪うばったお前の欠片かけら……俺が残らず、取り戻もどしてやる」

　夜半──自宅でくつろぐ劉リユウ豪・ホー軍ジユンの許もとを、呉ン・榮ウイン成シンが直々に訪問した。
「えらい一日だったな。今日は」

劉リユウは独り黙もく々もくと玉ぎよく杯はいの汾ふん酒しゆを傾かたむけながら、鷹おう揚ように頷うなずいて迎むかえる。
「こんな夜よ更ふけに自らお出ましとは、余よ程ほどの大事か？　呉ン社長」
「表の大事と、裏の大事が一件ずつな。まず……」
家僕が退さがるのを待ってから、呉ンは劉リユウに一本のフラッシュメモリを投げ渡わたす。
「こいつが本物の証しよう拠こ映像だ。煮にるなり焼くなり好きにしな」
本物……寨さい主しゆの寝しん室しつの監かん視しカメラに録画されたままの、未編集の映像である。
「世話をかけたな。榮ウイン成シン」
「なんの」
腹心の中でもただ一人、寨主の死の真相について知る立場にあったのがこの男だった。無論、ただ知るというばかりではない。彼は歴れつきとした共犯者である。
寨主の暗殺と同時進行で行われた情報操作。証拠の隠いん滅めつ、捏ねつ造ぞう……かつて凄すご腕うでのハッカーとして腕を鳴らした呉ンにとっては、朝飯前の工作だった。もとより腕うでっ節ぷしではなく、そういう手練を見込まれて幇に登用された男である。
加えて呉ンは、今では幇会の内部に身を置く立場にはない。いかに青チン雲ワン幇パンの傀かい儡らいとはいえ、あくまで上海義ぎ肢し公司は表稼か業ぎようである。その采さい配はいを任された呉ンは必ひつ定じよう、幇会と距きよ離りを取らざるを得ない。謀む反ほんの計画を持ちかけるには誂あつらえ向きの相手だった。
事実、誘いを受けた呉ンは二つ返事で承しよう諾だくした。驚おどろきさえしなかった。いつか劉リユウならばやるだろうと思っていた──それが呉ンの正直な感想だった。
「これで青チン雲ワン幇パンもあんたのもんか」
「そういう話は、寨主の葬そう儀ぎを出すまでは慎つつしんで欲ほし

いな」
「寨主殺しを孔コンに被かぶせるたぁ、相変わらず考えることがエグいね」
「もとは俺の配下だ。せっかく上海に戻って来たのなら、役立ってもらうのが当然だろう」
「樟ジヤンの死に様を見て、ひと目で孔コンだって見破ったのかい？」
「かつては俺も、奴と同じ戴天流門下に身を置いたことがある。紫し電でん掌しようの手て際ぎわは知り尽つくしているからな」
「そういや、そうだったっけね……」
　サイバネ拳けん法ぽう家は多くの場合、外家拳の修練の果てに肉体の機械化に踏ふみ切るケースが主流である。劉リユウのように内家拳の修業に見切りをつけてサイボーグ化を果たす者は珍めずらしい。
「しかし、てっきり斌ビンの言うように幇会を動かして孔コンを狩かるつもりだと思ってたんだがな。あの場で面子メンツがどうのと言い出すとは、あんたらしくもない」
「だから斌ビンも俺を疑わない。私し怨えんの敵より、幇会の沽こ券けんが優先……俺もなかなか出来た副寨主だと思わないか？」
「へいへい。お見み逸それしましたよ。幇会の手助けもなしに俺たちだけで奴を始末しようってのは、ぞっとしねぇ話だもんな」
「気弱だな。朱チユウが聞いたらまた怒いかり狂くるうぞ」
「……あいつ、何で孔コンのことになるとあぁムキになるんだ？」
「流派の意地、というやつだ。拳法家でないお前には、解わからんのも無理はない」
　武術の大系は大別して二つに分けられる。かたや膂りよ力りよく、瞬しゆん発ぱつ力りよくを鍛きたえ上げ、型と技法を磨みがき抜ぬくことに終始する外家拳法。一方で、呼吸や血流を律することで経けい絡らくをめぐる〝氣き〟を鍛え、駆く使しする内家拳法。
　その方法論の差さ違いから、事あるごとに優ゆう劣れつが取り沙ざ汰たされてきた両派だが、古来その趨すう勢せいは決まっていた。所

しよ詮せん、人の筋骨は虎とらとも象とも違ちがう。いかに鍛たん錬れんを重ねても肉体にはおのずと限界がある。

それに対して、内功の世界は深遠無む辺へん。極きわめるのは至難でも、その果てには人じん智ちを超こえた驚きよう異いの世界が待ち受けている。

結局、外家の使い手は多々あれど、真に内家の深しん奥おうを極めた達人には誰だれ一人ひとりとして及およばない。それが武林の定石であった。

だが、サイバネティクス技術の普ふ及きゆうがすべてを一変させた。肉体的限界という枷かせは消え、外家の武術にもまったく新しい可能性が拓ひらけたのである。

いかに気功の達人が素す手でで岩がん盤ばんを砕くだき、刃やいばを弾はじいて見せようと、超ちよう音おん速そくで繰くり出される義手義足の前では、氣を練る暇いとまも与あたえられない。羽毛のように宙を舞まう軽功の術をもってしても、知覚増強型サイボーグのレーダーロックオンを振ふり切ることは叶かなわない。

こうして内家、外家の力関係は逆転し、秘技秘法をもって武林に君臨した内家拳は武道としての命脈を絶たれた。かつて外家を畏い怖ふせしめた数々の気功術も、今は一部の行者たちが、古来の修身法として細々と伝承するばかりである。

「朱チユウのようなサイバー外功派の拳法家には、我わが手で内功派から武林の覇は権けんを奪うばったという自負がある。それが今になって生身の内家功夫に後おくれを取ったなど、許せる話ではあるまいな」

「そういうあんたは、どうなんだい？」

「俺は濤タオ羅ローの腕を知っている。奴やつの電でん磁じ発はつ勁けいは、サイバー外家に対たい抗こうするためだけに編み出された内家の絶技だ。油断してかかると痛い目を見るぞ」

「それほどのもんか？　電磁発勁ってのは」

「遇ぐうし方、次し第だいだな。ともに一いち撃げき必殺となれば、

功の冴さえだけで勝負は決まる。
　内家拳との立ち合いは、濁だく流りゆうを泳ぐようなもの。流れに乗れば制せいするし、流れに呑のまれれば溺おぼれて果てる」
「ふぅん」
「……で、もうひとつの大事とは？」
「ああ、そっちは歴れつきとした正規業務さ。カスタマーサポートって奴だ」
　外に控ひかえていた部下を呼ばわり、下げ知ちを下す呉ン。ほどなく義肢公司の技術者たちが恭うやうやしく運び込んできたのは、最高級モデルのガイノイドを収める化け粧しよう箱だった。大きさは小こ振ぶりな棺ひつぎほどもあるが、形状は伝統に則のつとってヴァイオリンケースのそれを模している。
「日ひ頃ごろご愛あい顧こいただいております弊へい社しや製品の修理が終わりましたので、本日はお届けに参上した次第」
「ああ、成る程ほど……」
　得心した劉リユウが、杯さかずきを置いて立ち上がる。
「なにもお前が出向くほどの用向きではあるまいに」
「いいや……あんたの人形に限って言えば、万に一つも間ま違ちがいがあっちゃいけねぇからな」
　いつも通りに剽ひようげた呉ンの口調。だがそれでも緊きん張ちようの色は隠かくせない。正規の業務と言いながら、むしろ呉ンは寨さい主しゆ謀ぼう殺さつの話題について取り沙ざ汰たしている時より硬かたくなっている。
「うちの商品の中でも随ずいー一いち……たぶん世界中どこを捜さがしても、これ以上金のかかってるガイノイドはない。外装だけでも市し販はんモデルが三〇体は賄まかなえる。そいつをあんたは、肌はだに五ミリ傷がついたってだけで総交こう換かんときたもんだ」
「感心せんか？」
「いやいや、滅めつ相そうもない。こいつが絡からむときばかりは……あんた、いつだって本気だもんな」

劉リユウは呉ンの差し出したプラチナの鍵かぎを受け取り、ケースに設しつらえられた古風な錠じよう前まえに差し込んで、回す。

ケースの開かい封ふうに連動して起動信号が送られ、中のガイノイドが覚かく醒せいした。内張りの中で衣きぬ擦ずれの音がした後、白く細い腕うでがゆっくりとケースの蓋ふたを持ち上げる。

最新デザイナーズブランドの旗チヤイナ袍ドレスに身を包んだ少女が、気け怠だるげに身を起こす。豊かな黒くろ髪かみがドレスの白しろ緞どん子すよりもなお艶つややかに煌きらめいて、肩かたの上を滝たきのように流れ落ちる。

その傍かたわらに片かた膝ひざをついて、劉リユウは人形の頬ほおに指を添そえ、無言のまま凝ぎよう視しした。修復の成果を確かめているのだろう。

普段は軽口の絶えない呉ンだが、今ばかりは口を噤つぐんで、その様子を見守っている。

呉ンは、劉リユウという男の様々な側面について知っている。だがそのどれよりも怖おぞ気け立つものを感じるのは、この人形と一いつ緒しよにいるときの彼だ。この人形を前にしたとき、劉リユウの意中からは森しん羅ら万ばん象しようが意味を失う。

その肌に、家僕の不注意から傷が付いたときも、きっとそうだったのだろう。怒りに駆られた劉リユウが粗相したメイドを打ちよう擲ちやくしたときも、彼は相手の顔さえ見ていなかったという。メイドは文字通り四散して即そく死しした。

「……申し分ない仕上がりだ」

抑おさえた声で評する劉リユウ。呉ンは我知らず安あん堵どの吐と息いきを漏もらす。

「孔コンがこの人形を見たら、どんな顔をするかねぇ」

普段のペースを取り戻した呉ンは、さも呆あきれたと言わんばかりに頭を振ふった。

劉リユウもまた冷れい笑しようで応じる。

そんな二人の男たちに、見上げた視線を往復させるガイノイド。物

問いたげな眼まな差ざしには、断じて既き製せいの感情スクリプトではない生々しさが見て取れる。彼女もまた、魂こん魄ぱく転写を施ほどこされた非合法ガイノイド……孔コン濤・タオ羅ローの妹から作られた五体のうちの一つだった。

「返す返すも罰ばち当あたりなのはあんただよ、劉リユウ。なにも殺した女と同じ顔に造らなくたっていいもんを」

劉リユウが金額に糸目を付けず、オーダーメイドで設計させた機械仕じ掛かけの少女。小首を傾かしげるその顔は……今は亡なき孔コン瑞・ルイ麗リーの風ふう貌ぼうを、寸分違たがわず再現したものだった。

同じ夜、同じように酒を傾かたむけながら、しかし朱チユウ笑・シヤオ嫣ヤンの心中は笑いとは対極にあった。

今日一日、配下の者たちに街中を馳はせさせたものの、孔コン濤・タオ羅ローの行方は杳ようとして知れない。

階下のリビングには、子飼いのサイバネ拳けん法ぽう家たちが集まっている。孔コンの居所が知れ次し第だい、連中を率ひきいて強きよう襲しゆうする態勢なのだが、待機はもう半日以上も続いていた。手下たちの士気は弛たるみはじめ、朱チユウの苛いら立だちは臨界に達している。

独り自室に籠こもった朱チユウだが、下の連中が何を話題にしているかは容易に想像がつく。

寨さい主しゆの死は伏ふせられたまま──だが、今日になって朱チユウが標的を一人に絞しぼり込んだことで、樟ジヤン殺しの下げ手しゆ人にんについては誰だれもが知るところとなった。

『紫し電でん掌しよう』が生きている……上海に戻もどり、『金こん剛ごう六ろつ臂ぴ』を手にかけた……

幇ほう会かい内のみならず、やがては市し井せいでも噂うわさにな

ることだろう。

孔コン濤・タオ羅ロー。かつての青チン雲ワン幇パン内では随一の気功派拳けん士し……奴やつもまた上海では知れた名だ。特にサイボーグを毛け嫌ぎらいしていた李レイ寨主の許もとでは、随ずい分ぶんと厚こう遇ぐうされていた。

たしかに犯罪組織のサイバー武装化が進む中、『電でん磁じ発はつ勁けい』というのが便利な駒こまだったのは間ま違ちがいない。生身だというだけで敵の警けい戒かいは格段に弛む。触ふれただけで重装そう甲こうサイボーグを破は壊かいするような〝武芸〟など、誰も予期するはずがない。

同じ幇会にいた頃ころも、闇やみ討うち専門の凶きよう手しゆと思えばこそ、朱チユウはあの男を捨て置いたのだ。尋じん常じような立ち合いとなれば、所しよ詮せんは内家の奇き術じゆつ師しごとき、外家サイボーグの敵ではない……その暗あん黙もくの了りよう解かいが脅おびやかされることはなかった。

なのに樟ジヤンの腰こし抜ぬけは……

「くそったれ！」

朱チユウは手にしたグラスを手加減もせず壁かべに投げつけた。

亜あ音速で宙を飛んだグラスは砕くだけるより先に壁にめり込み、建材の内側で粉々になる。

死んだ樟ジヤンを悼いたむ心など、朱チユウは毛ほども持ち合わせていない。『金剛六臂』などという二つ名でいい気になっていたものの、所しよ詮せんは二流の使い手だった。あの程度の男、子供に寝ね首くびを掻かかれたとしても意外には思わない。

だがそんな理ことわりを解するのは、樟ジヤンの力量を知る者だけ。市井の噂は、あくまでも……青チン雲ワン幇パンのサイボーグ武芸者が内家拳に後れを取った、ただその一点にだけ終始する。

あの程度の奴を、たとえ末席といえども幹部に連ねるべきではなかった。奴には青チン雲ワン幇パンの面子メンツを背負うだけの器うつわなどなかった。

〝くそったれが……〟

青チン雲ワン幇パン香こう主しゆにあるまじき無様な最さい期ごを晒さらした樟ジヤンも腹立たしければ、恐おそれげもなく青チン雲ワン幇パンに挑ちよう戦せん状じようを叩きつけてきた孔コンの大だい胆たんさも許せない。

卑ひ怯きようが取り柄えの闇討ち屋なら、それらしくもっと姑こ息そくに立ち回っていれば相応なものを……真っ向から挑いどんできた孔コンの不敵さは、朱チユウから見れば挑ちよう発はつ以外の何物でもない。

〝負け犬が、図に乗りやがって……〟

いっそ真っ先に朱チユウのところへ乗り込んでくれば、八やつ裂ざきにしてやったのに。朱チユウと樟ジヤンとの力量差は決定的である。孔コンの紫電掌など、恐おそれるまでもない稚ち戯ぎだ。

にも拘かかわらず、樟ジヤン程度の奴を手にかけただけで、今も得意絶頂になっているであろう孔コンを思うと、それだけで朱チユウは腑はらわたが煮にえくり返る。

酒を呷あおっても募つのる一方の、やり場のない怒いかり。

「……」

気分が荒あれて落ち着かないとき、朱チユウは生身の娘むすめを痛めつけて己おのれを慰い撫ぶするのが常だった。脆もろくて臆おく病びようで、可愛かわいい悲鳴を聞かせてくれる小こ娘むすめたち。臈なぶり尽つくして潰つぶれる頃には、たいてい朱チユウの気分も晴れている。

だが生憎あいにく、今は生いけ贄にえを取り寄せている余よ裕ゆうなどない。そもそも先月もそうやって、かれこれ五人以上の生き娘むすめを長江の魚の撒まき餌えにしてしまい、口やかましい劉リユウから諫いさめられたばかりである。

結局、今夜も代用品で我が慢まんするしかない。

「瑞ルイ麗リー！」

朱チユウは語気荒あらく、部屋の片隅に蹲うずくまるペットを呼ば

わった。
　主あるじの語調だけで、その虫の居所の悪さをペットは悟さとったのだろう。まるで折せつ檻かんを待つ子供のようにまごつきながら、それでも小走りに近寄ってきた。逆らったり躊ちゆう躇ちよしたりすれば容よう赦しやなく罰ばつを受ける。その辺の因果は、もう充じゆう分ぶんすぎるほど身体からだに教え込まれていた。
　そういう怯おびえた仕草が、なおいっそう朱チユウの嗜し虐ぎやく心しんを煽あおる。時折こいつがガイノイドだということを忘れてしまう程ほどだ。
「機械仕じ掛かけの玩具おもちやにしちゃ、ほんと、イイ出来だね。おまえは」
　劉リユウから贈おくられたガイノイド、『ベネトナシュ』……朱チユウもまたこの人形を、魂こん魄ぱく転写の元となった少女の名で呼び慣わしていたが、あの酔すい狂きような副ふく寨さい主しゆのように顔まで彼女に似せているわけではない。
　朱チユウの人形はあくまで規格品だけで構成されている。何せ消しよう耗もうの激しさが、他の香こう主しゆたちの比ではない。
「ねぇ瑞ルイ麗リー、お前の兄貴が生きてたそうだよ」
「……？」
「……ハン、そうは言ったって、どうせ憶おぼえちゃいないんだろうね。あれほど大事だった兄上様の記き憶おくは、いったい誰の瑞ルイ麗リーの所に行ったんだろうねぇ？」
　朱チユウにいくら詰なじられようと、人形にはその内容が理解できない。主あるじの厳しい口調が、叱しつ責せきなのか何なのか……それが判断できず、ただ怯えて畏い縮しゆくするだけだ。
「……ケッ、木偶でく人形が」
　言葉で嬲る面おも白しろ味みはないが、それでも朱チユウにとって幸いだったのは、この人形が辛かろうじて数の概がい念ねんを理解できるということだ。それだけでも遊びの趣しゆ向こうはいくらでも凝こらしようがある。

「今夜はカウント六〇〇だ。いいね？」
　人形の瞳ひとみが怯えに見開かれた。六〇〇秒。普ふ段だんより四割も短い。
　朱チユウはソファに仰あお向むけに身を投げ出して、あられもなく着衣をはだけた。
「さぁ、始めるよ」
　朱チユウがクロームメタルの指を鳴らして合図すると、ベネトナシュは貪むさぼりつくようにして、朱チユウの白い肌はだに顔を埋うずめた。
「んぐ……」
「く……フフ、そうだ……もっと頑がん張ばりな……」
「ん……んぐ……」
　己の行こう為いにどういう意味があるのか、もちろん人形は理解していない。その有機メモリが認にん識しきしているのは、事の因果関係だけ……この〝奉ほう仕し〟を怠おこたれば、そのときは〝罰〟が待っている。
　カウント六〇〇、それは主あるじがペットに下した処しよ刑けい宣告である。猶ゆう予よは六〇〇秒。それまでに彼女の奉仕が主あるじを満足させなければ、主あるじの鉤かぎ爪づめが容赦なく振ふり下ろされる。
　無論、ガイノイドに死という概念はない。動力源を失えば機能を停止するだけのこと。メモリさえ無事なら、またハードウェアの交こう換かんで元通りに動作するようになる。
　にも拘かかわらずこの特製の人形は、破は壊かいされることに恐きよう怖ふを見せた。まるで本物の人間が命に固こ執しゆうするかのように、人形の少女は、我わが身が機能を失っていく行程に悶もだえ苦しみ、いつも最後の瞬しゅん間かんから逃のがれようと必死になって抗あらがうのだ。
　何度繰くり返しても、馴なれるということはないらしい。レストアされ再起動するごとに、人形は以前と変わらぬ初ういゞういしさで、

朱チユウの〝死の遊ゆう戯ぎ〟に興を添そえた。

痛みを恐おそれるガイノイド。エミュレートではなく、本物の感情……そのくせ壊こわれれば修理もできる。真性のサディストである朱チユウにとって、これほど遊びがいのある玩具はない。

懸けん命めいに口で奉仕を続ける人形少女の背中に、朱チユウは死をもたらす鋼はがねの指を這はい回らせて、その硬かたさを思い知らせるかのように、白い尻しりの上でリズミカルにタップさせる。

意思も感情もないガイノイドに使うには語ご弊へいのある表現とはいえ、明らかに人形の少女は〝必死〟だった。

奉仕の開始より二〇〇秒。朱チユウは薄うす笑わらいを浮うかべたまま、まだ余よ裕ゆうを見せている。長い指が人形の股こ間かんに忍しのび込み、その奥の花か芯しんに冷たく触ふれる。

「!!」

ガイノイドとして過か剰じように調整された性感を刺し激げきされ、人形は激しくわなないた。底意地の悪い妨ぼう害がいに、だが気を逸そらされている場合ではない。彼女の恐れる〝死〟の刻限は着々と迫せまっている。秘所をまさぐる硬い感かん触しよくに耐たえながら、なお一心に朱チユウの性感を刺激し続ける。

「んん……フゥ……いいじゃない……効くわぁ……」

朱チユウが陶とう然ぜんと甘い声を出す。ひたむきな奉仕が、ここにきて漸ようやく功を奏してきたか、その吐と息いきは熱く湿しめりはじめていた。

蜘蛛くもの足のように音もなく、ベネトナシュの首にからみつく朱チユウの指。気道の圧あつ迫ぱくは、人間のそれと同程度の苦痛をガイノイドに科す。

「んぐっ……が……く……」

「ゥ……ウフ……いいよ、その調子……」

喜悦の呻うめきを上げる朱チユウの、その鋼鉄の指はじわじわと緊きん縛ばくの度を増していく。人間ならとうに窒ちつ息そくしている。呼吸や血流を必要としないガイノイドだからこそ保もっている

が、このまま頸けい骨こつの神経嚢のうを断たれれば……

　少女には涙なみだを流す機能はない。悲鳴を上げることもない。焦燥と絶望の狭はざ間まに落ち込んでいく想おもいを訴える術すべは、ただひたむきに主あるじの欲望を慰い撫ぶし続けるしか他ほかになかった。

「ハ……ァハ……あふぅぅッ！」

　朱チユウの機械化された神経中ちゆう枢すうに流れ込む快感の波。だがそれ以上に彼女を酔よわせるのは、悲痛に歪ゆがんだ人形の顔と、それに重なる一年前の面おも影かげだ。

〝そうだ……あの時も、こんな風に……あの女を嬲なぶってやった……。あのパーティーは最高だった。何よりも……孔コンの妹だってのが良かったよ。

　いつも気き障ざに取り澄ましてた気功野や郎ろうが、蝶ちようよ花よと可愛かわいがってた妹を……あたしはこの手で壊してやった〟

　積年の溜りゆう飲いんが下がる心地ここち。肉の快楽より嗜し虐ぎやくの趣おもむきより、その爽そう快かい感かんに朱チユウは笑いが止まらなかった。

　そう。苛いら立だつ必要はない。今もこうして朱チユウが瑞ルイ麗リーの忘れ形見を犯おかしていると知れば、孔コンは血の涙を流すだろう。なんといい気味だろうか。

　溜ため込んだ鬱うつ憤ぷんから解放されて、朱チユウはいよいよ凌りよう辱じよくの悦よろこびを堪たん能のうした。

「はふッ、ゥウッ……ッ!!」

　絶頂の恍こう惚こつ感かんのあまり、つい力加減を誤ってしまう。

　その途と端たん、拍ひよう子し抜ぬけするほどの脆もろさで人形の頸骨が折れ、あらぬ角度にねじ曲がった。

　朱チユウが法ほう悦えつの果てに脱だつ力りよくするのと、機能停止したベネトナシュが四し肢しの力を失うのとは、ほとんど同時だった。

「……はぁ……はぁ……」

カウントは……さて、結局はどうなっただろうか。我を忘れて熱中するあまり、朱チユウはペットと戯たわむれるルールを忘れていた。

ほぼ真横に傾かたむいた人形の首は、断だん末まつ魔まの怯おびえ顔のまま、相変わらず哀かなしげに朱チユウを見下ろしている。その表情は、本物の人間と見み紛まがうほどに生々しい。

「今となっちゃ犬ほどのオツムもないアンタだけどさ……こうして殺す間ま際ぎわの顔は……昔の瑞ルイ麗リーのまんまだね。そこだけが楽しめる」

悦えつ楽らくの余よ韻いんに息を荒あらげながら、朱チユウはいつまでも壊れた人形の顔に見入って、邪じゃ悪あくな悦よろこびに浸ひたっていた。

……そのまま、どれほどの時が流れただろうか。心地ここちよい脱力感の中で、朱チユウは間近な喧けん噪そうの音を聴ききき留めた。

階下だ。どうやら相当に激しい乱らん闘とうらしい。朱チユウの集めたサイボーグたちが戦っている。この家に押し入ってきた誰だれかと。

「おやおや……」

最初に樟ジヤンを襲おそったのは、孔コンなりの打算だとばかり思っていた。万ばん全ぜんの勝機があったからこそ、真っ向から立ち合うような蛮ばん勇ゆうを見せつけたのだと。

だがそれさえも買い被かぶりだったようだ。一度ならず二度までも、正面切っての殴なぐり込み。しかもよりによってこの朱チユウ笑・シヤオ嫣ヤンの前に、逃にげも隠かくれもせず現れるとは……奴やつは知ち恵え者ものでも何でもない。ただ身の程ほどを知らぬだけの馬ば鹿かだ。

鼻で嗤わらって、朱チユウは人形の首を縊くびり折った手にさらに力をこめた。メリメリと骨格が破断して、ベネトナシュの首は胴どう

からもげ落ちる。
　階下から聞こえてくるのは、罵ば声せいと悲鳴……どれも聞き覚えのある部下のものばかり。
「情けないねぇ。まったく」
　揃そろいも揃って内家の肉にく達だる磨ま相手にいいようにあしらわれているらしい。だが、それでまた孔コンが思い違ちがいをしようとも……構わない。
　愚おろかしいほどの図太さも、今はもう大目に見てやってもいい。誤った認にん識しきは、即そく座ざに正されることになる。奴はすぐにもこの場所で、本物のサイバネ外家拳けんを相手にすることになるのだから。

　やがて音もなく影かげのように、孔コン濤・タオ羅ローは部屋に入って来た。右手には抜ぬき身の倭わ刀とう。鞘さやは傍かたわらに寄り添そう幼年型のガイノイドが掲かかげ持っている。
　奇き妙みような同伴者を訝いぶかった朱チユウだが、すでに相手は正気の埒らち外がいにいる男である。敢あえて拘こだわりはしなかった。
「てっきりあんたは、呉ンか斌ビンのとこに行くかと思ったんだがね」
「順番はどうだっていい。たまたま貴様が、近かった。だから貴様が先に死ぬ」
　不敵な物言いに逆上しかかった朱チユウだが、事ここに至って急せくことはない。この男は嬲り殺しにするものと決めている。
　胸の上に覆おおい被かぶさった人形の残ざん骸がいを払はらい除のけると、朱チユウはソファから立ち上がり、手の中に残った頭部を掲げ上げた。
「用があるのは、このガラクタかい？」
　高らかに嘲ちよう笑しようしながら、孔コンに向けて人形の首を放ほうり投げる朱チユウ。受け取った孔コンは、悲ひ愴そうな相のまま

停止した生首の貌かおに、無言で見入る。
「感動のご対面ってヤツだねぇ？　折角ならブチ壊こわしちまう前に訪たずねて来りゃ良かったのに。……どうせならさ、あんたの手足もいでダルマにして、それからこの玩具おもちやで愉たのしむべきだったよね。あんたの見てる目の前で」
　悪意も露あらわな朱チユウの挑ちよう発はつに、だが孔コンは何ら反応を見せないまま、投げ渡わたされた人形の首を傍らの連れにそっと差し出す。幼年型ガイノイドは、片手に倭刀の鞘を摑つかんだまま両りよう腕うでを広げて、あらたな荷物を抱だき留めた。
「退さがってろ」
　従順に頷うなずいて、人形は小さな歩ほ幅はばも慌あわただしく部屋を出ていく。
　後に残った二人には、もとより相手を立ち去らせる気など毛頭ない。生きてこの部屋を出ていくのは、どちらか一方だけと決している。
　電子化された朱チユウの義眼は、可視光を捉とらえるばかりではない。視野をサーモグラフに切り替かえれば、孔コンの脈みやく拍はくも体温分布も一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。
　表情をどう繕つくろおうと、身体からだまでは嘘うそをつけない。案の定……孔コンの疲ひ労ろうは明らかだった。たった今も五人からの戦せん闘とうサイボーグと渡り合ったばかりなのだから。
「ハンデが必要なんじゃない？」
「貴様がそう言うなら、是ぜ非ひもない」
　侮蔑も露わな朱チユウの揶や揄ゆに、だが孔コンが返したのは失しつ笑しようだった。
「貴様の自じ慢まんの〝鷹よう爪そう功こう〟、五手までは見み逃のがしてやる。俺が攻せめるのはそれからだ」
　一いつ旦たんは抑おさえていた朱チユウの憤ふん怒ぬも、さすがにこれは抑えかねた。孔コンの応じた〝是非もないハンデ〟とは、朱チユウを利することだったのだ。

「……呆あきれたね。あんた本気でアタシに勝つ気でいるわけだ」
「のみならず、貴様を殺す」
　柳りゆう眉びを逆立てる朱チユウを前に、孔コンの語調はあくまで冷たい。
「貴様は俺から妹を奪うばった。だから俺は貴様から、その愚ぐにもつかない驕きよう慢まんを奪う。まるで釣つり合いが取れんが……そのぶんは、貴様の命を上乗せして良しとしよう」
「大きく出たね……」
　両腕の義手を握にぎっては開き、威い嚇かくするように禍まが々まがしい金属音を立てる朱チユウ。鋼はがねの四し肢しから繰くり出す攻こう撃げきを、孔コンが受けうるとすれば一ひと振ふりの倭刀だけ。
　あの刀を、まずは右手共々奪ってやれば……少しは減らず口も慎つつしむだろうか。
　ひとくさり笑った後で、朱チユウは貫ぬき手てを奔はしらせた。
　朱チユウの強化義手には、樟ジヤンの重装義手のような剛ごう性せいやトルクがあるわけではない。だがそれを補って余りあるスピードと柔じゆう軟なんさ、さらに朱チユウ自身の技わざの〝功〟がある。
　完全に間合いの外、そう見せかけた距きよ離りから腿たい力りよくの伸のびを効かせて一気に相手の急所を突つく。呵か責しやくない初手の『急きゆう落らく鷹よう爪そう』。狙ねらったのが急所でなく右手の刀だという以外、一いつ切さいの遊びはない。朱チユウをして会心の疾はやさの奇き襲しゆうである。
　応じる暇さえない──そう見えた孔コンは、だが事も無げに右半身を退ひいて朱チユウの指先を避よけた。
〝読みやがったか!?〟
　朱チユウは内心で歯は噛がみしながらも、すでに獲え物ものは両手の間合いの内である。左右から穿せん指しで挟はさみ込むように襲おそう『旱かん天てん鷹よう翅し』。今度こそ躯かわす余地はない……
　鏘そう々そうと金音ふたつ。顎あごを閉じるはずだった双そう手し

ゆが、弾はじき返されて再び左右に開く。朱チユウの指を迎撃した孔コンの剣けん戟げきは、律りち儀ぎにも峰みね打うちだった。あくまで『五手まで譲ゆずる』約やく定じように撤てつする腹か。

「なら死になッ!!」

怒ど声せいーいつ喝かつ、朱チユウはついに殺意を剝むき出した連れん撃げきを繰り出した。

左手は跳はね返された勢いのまま下に流し、一転して下段から掻かき上げる『深しん渓けい鳶えん翼よく』―加えて右手は逆に大上段から振ふり下ろす勾こう手しゆの『旋せん空くう飛ひ燕えん』で追い討うちをかける。

孔コンはまず下段の攻撃を刀で真っ向から受け止めた。その衝しよう撃げきを肩かたで殺そうとせず、逆におのれの腿力を加えて背後に跳ちよう躍やく。続く勾手を見み越こしていたかのように、やすやすとその間合いから逃のがれる。

「どうした？　あと一手」

着地と同時にそう嘯うそぶく孔コンに、朱チユウは間かん髪はつ入れず突きかかる。『旋空飛燕』の後手に隠かくした爪そう撃げきの三連れん環かん。

孔コンは退さがると見せかけて二手を受け流し、三手目は身を捻ひねりつつ踏み込んで朱チユウの体側へと逃のがれた。

翻ひるがえったそのコートが、朱チユウのすぐ眼前を掠かすめ過ぎる……そう見えた刹せつ那な、彼女は強きよう烈れつな衝撃に顔面を打ちのめされた。

コートの裾すそに阻はばまれた朱チユウの視線、まさにその死角を衝ついて振り下ろされた孔コンの踵かかとが、布地もろともに左眼がん窩かを直ちよく撃げきしたのだ。

長衣の裾を目め眩くらましに繰り出す、電光石火の後ろ回し蹴げり。戴天派の『臥が龍りよう尾び』……本来なら剣けん術じゆつに交えて使う隠かくし技わざである。

いかに鮮あざやかなクリーンヒットとはいえ、金属繊維で補強され

た朱チユウの頭ず蓋がいは砕くだけも歪ゆがみもしない。だが精密機器の電子義眼は、この衝撃に耐たえられなかった。非力な内家の蹴り技で、朱チユウは左目を失ったのだ。

「～～～ッ!!」

逆上のあまり言葉を失う朱チユウを、鼻を鳴らして嗤わらう孔コン。右手の倭わ刀とうは構えを解いて、刀身を肩に預けている。

「知りたいか？　貴様の攻撃がなぜ当たらんか」

冷たく歪んだ孔コンの笑えみは、今まさに踏みにじられつつある朱チユウの面めん目ぼくを嘲あざ笑わらってのものだろう。

「拳こぶしも脚あしも、貴様がこの俺めがけて繰り出そうと思った時点で、すでにその一いち撃げきは放たれている。外家の〝拳〟は〝意〟よりも遅おそい。先んじて放たれた〝意〟の後を、遅おくれて〝拳〟が飛んでくる。俺はそれを払はらいのければ済むだけのこと。欠伸あくびが出るほど簡単だ」

朱チユウに言い返す言葉はない。速さでは明らかに朱チユウの拳けん撃げきが上回っている。にも拘わらず的を外すのは……彼女の知る理ことわりでは説明がつかない。

「ところがこの刀は、な」

語りながら孔コンは、担かついだ倭刀を一転させて突きつける。刹那、禍まが々まがしいほどに鋭するどい煌きらめきを放った白はく刃じんが、切っ先をぴたりと朱チユウの目線に据すえる。

「ひとたび抜ぬき払ったが最後、刃じん圏けんに捉とらえた万ばん物ぶつを、俺の意に先んじて斬きって捨てる。内家の〝刀〟は〝意〟よりも疾い。

刀をして既すでに意。我わが刃やいばはすでに〝一刀如によ意い〟の境地にある。……外家の力馬ば鹿かでは十年経たっても至らぬ場所だ」

「……ッ!!」

歯は噛がみするあまり軋きしみを立てる朱チユウの顎がつ骨こつ。

言わせておくのか？　たかが内家の手て妻づま使いに、これ以上、

得意面づらをさせておくのか？　その名も聞こえた『羅ら刹せつ太たい后こう』が……
「俺の間合いで貴様が隙すきを見せたとき、それが最後だ。この一刀が貴様を断つ。……遊びは終わりだ。貴様も得え物ものを執れ。〝羅刹太后〟」
「たわけがッ!!」
　総身を鋼はがねと化した朱チユウを前に、この男は……まだ拳と刀の差があると吐ぬかすのか？
　猛たけり狂くるう激情に身を任せ、朱チユウは再び孔コンに躍おどりかかる。
　拳速の風切る唸うなりは切れ目さえなく、一いち陣じんの突とつ風ぷうの如ごとし。より速く、より複雑に……鷹爪拳の秘技を尽つくして放つ、虚きよ実じつ入り乱れての連続技。この『一いつ嘴し双そう爪そう繚りよう乱らん舞ぶ』は、同じサイバネ外家の拳士を相手にしても、未いまだかつて破られたことはない。
　それでも孔コンは刀でいなし、或あるいは軽功の跳躍で躱かわしながら、すべて危なげなく回かい避ひする。加えてなお挑ちよう発はつの言葉を続ける余よ裕ゆうさえ見せながら。
「……ただ一度だけ、貴様にはチャンスがある。貴様にとって致ち命めい打だになるこの掌しよう、『紫電掌』の一撃だけは……俺は〝意〟よりも後から放つだろう」
　悠ゆう然ぜんと語る孔コンの声音に、いつしか悪意以上の感情が加わる。朱チユウの前で初めて見せる──剝むき出しの憎ぞう悪おが。
「この手で貴様に触ふれるとき、俺は想おもいを込めるだろう。俺の怒いかりを、瑞ルイ麗リーの哀かなしみを」
「ほざけぇぇッ!!」
　白刃の文あや目めを潜くぐり抜けて放った渾こん身しんの穿せん掌しようが、ついに孔コンの刀に先んじる。
　殺やった……そう確信した次の瞬しゆん間かん、朱チユウは何の手て応ごたえももたらさない指先に気付き、次いで肘ひじから先の消え

失うせた己おのれの右みぎ腕うでに瞠どう目もくする。
　そこにあるはずだった右下腕──孔コンの喉のどを抉えぐるはずだった貫ぬき手ては、さながら標的を失った流れ矢も同然に、五指を揃そろえたそのままの形で天てん井じように突つき刺ささっていた。
　いつ斬きられた？　防ぼう御ぎよに徹てつしていたはずの刀の、いったい何手目が斬ざん撃げきだった？
　ついに孔コンが見せつけた内功派刀術。朱チユウの右みぎ肘ひじの破断面は、まさしく昨夜検あらためた樟ジヤンの腕の残ざん骸がいと違ちがわない。
「なん……だと？」
　これが、重さ硬かたさを備えた刀の仕し業わざだというのか？　たとえレーザーや超ちよう音おん波ぱでも、〝斬られた〟感かん触しよくぐらいは残るというのに。
「得物を執れと、言った」
　さして得意がることもなく、さも当然と言わんばかりに淡々と嘯うそぶく孔コン。
　怒りのあまり眩暈めまいに襲おそわれ、朱チユウはよろめいて床ゆかを踏ふみしめた。
　もうこれ以上の屈くつ辱じよくは許されない。速すみやかにこの男を殺す。全身全ぜん霊れいを傾かたむけて。
「いいともさ……」
　左の義手の手首から、極ごく太ぶとのワイヤーケーブルが躍おどり出る。ただの金属光こう沢たくではない輝かがやきは、びっしりと鑢やすり状じように植え付けられたダイヤモンド粒りゆう子しの刃だ。
　武芸における軟なん鞭べんの長さは、使い手の顎あごから爪つま先さきまでを目安とするが、朱チユウの鞭むちはそれに倍する長さがある。ここまでオーバーサイズでは素す早ばやく振ふり回せるものではないが……そんな常識に囚とらわれるのは、サイバネ武術を知らぬ者だけだ。
　左手を捻ひねった途と端たん、重く長いワイヤーは生あるもののよ

うに総身をうねらせ、末まつ端たんまでが瞬しゆん時じに宙に浮うく。

「抜かせたね。このあたしに、鞭を……」

不敵な含がん笑しように嗜し虐ぎやくの色さえ滲にじませながら、朱チユウはその破は壊かい力りよくを見せつけるかのように、おのれの周囲に鞭を振り巡めぐらせて結界を張った。縦じゆう横おう無む尽じんに宙を奔はしるワイヤーの表面で、ダイヤの鑢やすり刃ばが流星雨の如く輝きを放つ。

その速度と重さに加えた摩ま擦さつの切れ味は、想像するだに恐おそろしい。

「鱠なますになりなッ!!」

瀑ばく布ふが飛沫しぶきを散らすがごとく、輝き線せんの残像を虚こ空くうに撒まきながら、鋼の鞭の猛連打が一いつ斉せいに孔コンを襲う。爆ばく竹ちくの束が弾はじけるような立て続けの轟ごう音おんは、鞭べん頭とうが大気を裂さく衝しよう撃げき波はだ。その速度はもはや音速を凌しのいで余りある。

応じる孔コンの刀術も、ここに軽けい捷しようの極きわみを見せた。前後左右から軌き道どうを変えて襲いかかる鞭の猛もう攻こうを、倭わ刀とうが受け流すごとに火花を咲さかす。

殺意を滾たぎらせて襲い来る鞭と、それを無心のままに迎撃する剣の舞まい……孔コンの総身を飾かざって狂くるい咲く火花と剣けん光こう。

猛攻を続ける軟鞭が、やおら狙ねらいを逸そらして横に奔る。

空から振ぶり……そう見えた軟鞭は、翻ひるがえって傍かたわらのデキャンタを跳はね飛ばす。

あらぬ方向から飛来した重いガラス器を、すんでのところで躱す孔コン。その頭上に、今度は宙に浮いたサイドテーブルが落下する。床を転げて避さけたところを、背後から襲うＣＲＴディスプレイ。

変へん幻げん自じ在ざいに挙動を変えるワイヤーの動きは、もはや尋じん常じようの軟鞭術のそれではない。まるでそれ自身が攻こう撃

げき本能を具そなえた大だい蛇じやであるかのように、躍おどり狂くるうワイヤーは部屋中の家具や調度品を弾はじき飛ばす。その悉ことごとくが孔コンを狙っているのだ。『羅ら刹せつ太たい后こう』の軟鞭は、その間合いに存在する物体すべてを凶きよう器きと化す。

「斬きってみろ！　内家ッ！　斬ってみろッ!!」

絶技は、しかし鞭使いの手練だけによるものではなかった。朱チユウの腕から伸のびたワイヤーは、ただの鞭でなく、神経回路と動力を内蔵した〝義ぎ肢し〟……文字通り手の延長なのだ。伸しん縮しゆく、屈くつ折せつも自在なら撓しなりの柔じゆう剛ごうも意のままの、それは金属の触しよく手しゆだった。

鞭の先せん端たんに掬すくい上げられ、革かわ張ばりのアーミングチェアが飛来する。刀で捌さばける質量ではない。孔コンは躊ちゆう躇ちよなく躯かわしにかかる。

が、身を捻った孔コンの眼前で椅い子すは真っ二つに引き裂かれ、それに代わって横よこ殴なぐりの鞭が、倍加する勢いで襲いかかってきた。椅子の軌道を目め眩くらましにした、孔コンの『臥が龍りよう尾び』と同じ騙だまし技……朱チユウなりの意い趣しゆ返がえしである。

もはや足運びだけでは躱しきれない。孔コンはたまらず背後に転てん倒とうしながら、辛かろうじて鞭の奇き襲しゆうを避ける。

得え物ものを逃のがした朱チユウの鞭は、そのまま床でバウンドするや、今度はガラガラ蛇へびの跳躍さながら一直線に孔コンを襲う。軟鞭では有り得ない〝突つき〟の攻せめ手。まさしくサイバネ武術の真しん骨こつ頂ちようだ。

床を転がる孔コンは、咄とつ嗟さの判断でコートの裾すそを跳ね上げた。その布地を易々と貫通した朱チユウの鞭頭は、だが紙かみ一ひと重えの見切りで首を反らした孔コンの頬ほおを、浅く掠かすめ過ぎただけに終わる。

肝きもを冷やす暇いとまもあらばこそ、孔コンはさらにコートを振りかざし、分厚い布地を鞭に絡からみつかせる。ほんのわずかな摩ま

擦さつ抵てい抗こうが、鞭を引き戻す朱チユウの手を一いつ刹せつ那なだけ遅おくらせた。

その一いつ髪ぱつ千せん鈞きんを引く瞬間に……孔コンは鑢状の鞭頭を左手で摑つかみ取る。

もし孔コンが完全に素す手でであったなら、朱チユウは迷わず鞭を引き、その五指を豆とう腐ふのように削けずり落としていただろう。だが、鞭と孔コンの指とを隔へだてる一枚の革手て袋ぶくろ。その厚さを削る一ミリ秒があれば……

〝くっ……〟

鞭を摑まれたことの意味を弁わきまえたのは、朱チユウの武人としての判断の賜たま物ものであった。変幻自在のワイヤー軟なん鞭べんは、朱チユウの腕うでの延長。内蔵されたその配線は、朱チユウの運動神経に直結されている。

まさに刹せつ那なの判断で、朱チユウは左腕の全回路を遮しや断だん。上じよう腕わん部ぶの緊きん急きゆう解除ボルトに着火して、肩かたと腕との結合を解く。切り離はなされた左腕が、鞭を介かいして流れ込んだ電磁パルスに焼き尽つくされたのはその直後だった。

みたび間合いを取って相対する両者の間に、傷ひとつない残骸と化した朱チユウの義手が床ゆかに落ちる。

極限下の応おう酬しゆうに、朱チユウはもはや矜きよう持じも、憎ぞう悪おもなく、そこまで追いつめられたことの屈くつ辱じよくに心を割さく余よ裕ゆうさえない。戦う前の予告の通り、孔コンは朱チユウの驕きよう慢まんを根こそぎ奪うばい取っていた。いま朱チユウの意中にあるものは、活路を拓ひらくための一手だけ。今や両腕を失った彼女だが、まだそれで勝敗が決したわけではない。

「キエェェッ!!」

朱チユウは鷹たかの嘶いななくが如ごとき奇き声せいとともに床を蹴けり、高々と孔コンの頭上に跳ちよう躍やくした。肉を斬らせて骨を断つ、起死回生の鴛えん鴦おう脚きやく。

立て続けに繰くり出す蹴り技の、左右どちらか一方は孔コンの刃や

いばに迎げい撃げきされるだろう。だがそのとき残る一脚きやくは、確実に相手の脳天を砕くだく。

これが生身とサイボーグとの決定的な差だ。動脈ひとつ破られればそれまでの人体も、総身が武器のサイボーグとなれば話は違ちがう。決着とは脳か脊せき椎ついを破は壊かいされたときの話であり、残りの器官は使い捨ての部品も同然だ。両手片足を失おうと大事はない。ただの一いち撃げきでも相手に届けば勝ちなのだ。

頭上から迫る朱チユウの双そう脚きやくに、だがそのとき、孔コンの一刀が有り得ない動きで応じる。……刃は下段へと趨はしったのだ。無防備な頭を上段に晒さらしたままで。

〝馬ば鹿かがッ!!〟

朱チユウの踵が孔コンを捉とらえるその直前、孔コンの身体からだが沈しずみ込む。無論、その程度で獲物を逃のがす朱チユウではない。鴛鴦脚の後手は六通り。今さら孔コンがどう動こうと逃れることは叶かなわない。

白はく刃じんの軌き跡せきが天空へ半月を描えがく。だがもう何もかも遅おそい。一刀が応じうるのは一脚のみ。残るもう一脚は……

振ふりかざした刀身はしかし、朱チユウの脚を狙ねらったものではなかった。中空に大きく輪を描いたその軌き道どうに、ダイヤの煌きらめきが輝き線せんを流す。

「!?」

先んじて下段に趨らせた孔コンの一刀は、その切っ先で、床に転がっていた朱チユウの義手──その軟鞭の先せん端たんを突き刺さしていたのだ。孔コンは再び床に伏ふせりざま、頭上に振りかざした一刀で、吊つり上げたそれを空中に振り回したのである。

渦うずを描いて旋せん回かいする鞭とその端はしの義手は鎖くさり分ふん銅どうの要領で、まんまと朱チユウの脚を搦からめ捕とった。

「な……」

必殺を期した脚あし捌さばきを封ふうじられ、姿勢制せい御ぎよを失った朱チユウ。その胴どうが地に落ちるよりも速く、孔コンは足を

踏ふみ替えて身を起こす。

為なす術すべもなく虚こ空くうに浮ういた数ミリ秒。朱チユウの目を捉えて離さなかったのは、広げた五指に紫し電でんの氣きを纏まとう、その必殺の左手と……昏くらく燃える双そう眸ぼうの光。

そこに見た怨えん嗟さは死よりなお冷たく、憎悪は地じ獄ごくよりなお熱かった。

防ぐことも、避さけることも叶わない断だん末まつ魔まの一いつ瞬しゆん。秒針にして一目盛に足りず、魂たましいには無限に等しいその時間、朱チユウは初めて味わう恐きよう怖ふと絶望を噛かみしめた。

落下する朱チユウの鳩尾みぞおちを、孔コンの左手の掌しよう打だが捉える。踏み込みも間合いも完かん璧ぺき。床から足あし腰こしを経て手首まで加速された勁けい力りよくは、朱チユウの身体を手て毬まりのように部屋の対面まで撥はね飛ばした。

だがその破壊力の苛か烈れつ極きわまる正体は、見た目の形には顕あらわれない。猛たけり狂くるうＥＭＰの炎ほのおに総身を内側から焼かれ、想像を絶する激痛を味わいながら、朱チユウは壁かべに激げき突とつするより先に絶命していた。

左掌を引きつつ、宙に泳いだままだった刀身を守りの形に戻して残心……再び静の構えに戻った濤タオ羅ローは、だが床に転がった朱チユウが骸むくろと化したまま動かないのを見て取るや、膝ひざを折って喀かつ血けつした。

乾けん坤こん一いつ擲てきの紫し電でん掌しようは、またしても濤タオ羅ローの臓ぞう腑ふに深い傷を負わせていた。

昨夜の内傷が癒いえぬうちから、引き続いての電磁発勁。しかも今夜は朱チユウに二回、階下の五人にも三回まで『紫電掌』を振るう羽目になった。自ら望んで寿じゆ命みようを削けずっているようなものだ。

「……フン」

そう、望むところだ。もはやこの命に未練はない。引き換えに瑞ル

イ麗リーの仇あだを討うてるなら、安い買い物ではないか。
　えずく濤タオ羅ローの傍かたわらに、気がつけば彼の連れるガイノイドが佇たたずんでいた。傷つき、血を流す主オーナーの無様な様は、その目にどう映るのだろうか。依い然ぜん、機械の少女に言葉はない。
「……」
　未いまだこの子の笑え顔がおを、その喉のどに声が戻もどることを期待している己おのれに気付いて、濤タオ羅ローは苦く衷ちゆうに顔を歪ゆがめる。
　諦あきらめたはずなのに。絶望を、運命を、もう受け入れたはずだったのに。
〝精神を水のようなものと仮定してみよう〟
　記き憶おくの中の声が蘇よみがえる。戯たわむれ興じるように楽しげな、それでいて、ぞっとするほど冷ややかな声。
〝ある瓶かめの中の水を五つの杯さかずきに汲くみ分けて、それから別の瓶かめに集め直す。……最初の瓶かめと新しい瓶かめと、中の水は同じものなのか否いなか？〟
「ふざけるな……」
　言葉が口を衝ついて出た。『左さ道どう鉗かん子し』、邪じゃ悪あくの権ごん化げ。奴やつは人間の魂を瓶かめや杯で計れると思っている。
　あんな男の言葉を信じるべきではない。奴は正気ではない。すべては奴の妄もう想そうだ。
　なのに、そう思うのに何故……
〝なぜ俺は、まだここにいる？〟
　ここには遠からず幇ほう会かいの救きゅう援えんが大挙して押し寄せてくる。長居するのは自殺行こう為いだ。もとより惜おしい命ではないが、討たねばならない仇かたきはあと三人。ここはまだ死に場所ではない。そう弁わきまえていながらも……
　差し出した濤タオ羅ローの手に、少女の人形が預かり物を手て渡わ

たす。朱チユウが投げよこしたガイノイドの首、そして転送ケーブルとＰＤＡ。

〝俺は……何をしている？〟

己おのれの中の自問を余所よそに、濤タオ羅ローの手は淀よどみなく昨夜と同じ作業を再演している。……二つのガイノイドのメモリをケーブルで連結し、ＰＤＡを接続。転送コマンドの呼び出し。

〝俺は……〟

ＲＥＴＵＲＮキーを押す手前で、ようやく指が止まった。無意識のうちに用意万ばん端たん整えた濤タオ羅ロー自身の手が、最後の決断を迫せまっている。

もし『左道鉗子』の言げん質ちに偽いつわりがないのなら、これから起こることは、ただの脱魂レイス燃焼バーンとも違ちがう。データの転送だけでは終わらない。転写先の人形のメモリは空でなく、昨夜樟ジヤンのガイノイドから回収した瑞ルイ麗リーの断片が収まっている。

汲み取った水に、もう一いつ杯ぱい。注つぎ足された水は、瓶かめの中で混ざり合う。

そのとき起きるのは、誰だれも見たことのない奇き跡せき。『左道鉗子』の仕組んだ魔ま術じゆつが、いよいよ濤タオ羅ローの前で実演される。

悪あく魔まの医者。憎にくんでも憎み足りない。奴は瑞ルイ麗リーを実験台にした。濤タオ羅ローのたった一人の妹を。

だが鬼き畜ちく外げ道どうの輩やからであっても、その才能は本物だ。かつてあの男は学会の寵ちよう児じだった。そんな人の世の栄えい華がに背を向けてまで、魂たましいの神秘を追い求めた男だ。彼はこの世の誰よりも深く、未知なるものが潜ひそむ深しん淵えんへ……魂こん魄ぱく転写という禁断の領域に踏ふみ込んだ。人としての境界線を踏み越こえて。

天のオは、天の理ことわりを覆くつがえすのか？　それは有り得ないと言いきれるのか？

答えのない煩はん悶もん。その逃にげ道を求める一心で、濤タオ羅ローはＰＤＡのキーを叩たたいた。

即そく座ざに転送が開始される。もう後あと戻もどりはできない。

「……あう……」

ぴくりと身を震ふるわせ、何かに驚おどろいたように目を見開いて硬こう直ちよくするガイノイド。昨夜と同じ脱魂レイス燃焼バーン。だが昨夜よりはるかに冷え冷えとした悪お寒かんが、濤タオ羅ローの心しん胆たんを締しめ上げる。

「う、あ、か、ふ……」

前回の、いかにも機械人形然とした痙けい攣れんとは様子が違う。今夜の彼女は……まるで本物の子供が癇おこりの発作を起こしたかのように、震え方まで生々しい。

ただの脱魂レイス燃焼バーンではない。それは素人しろうと目めにも解わかる。

暗あん鬱うつに捩ねじれた己自身の心中を、ここにきてようやく濤タオ羅ローは理解した。

〝俺は……『左道鉗子』の才能を疑っているわけではない。瑞ルイ麗リーの復活を諦めきっているわけでもない。ただ、恐おそろしいだけなのだ。それを疑わなくなったときの俺自身が。

瑞ルイ麗リーが蘇ると、そう信じてしまったとき……この俺がどうなってしまうのかが……〟

信じたかった。だが信じるのが怖こわかった。

今この場で魂魄転写を始める必要はなかった。もっと安全な場所まで逃げ延のびてからでも良かった。

だが濤タオ羅ローはもうこれ以上、惑まどわされたくなかった。真相を先送りにしたままでは、もう一歩たりとも先には進めなかった。

それとも、いっそ……いっそ今この場に、青チン雲ワン幇パンの処しよ刑けい人にんたちが踏み込んできてくれたなら……問答無用の十字砲ほう火かが、濤タオ羅ローとこの人形を八つ裂ざきにしてくれたなら……

　このまま、答えを見ずに済む。結末を知らずに済む。
〝いっそ、俺は……〟
　わずかな異い臭しゆうが鼻をつく。ガイノイドの抱だいた生首は焦こげ臭くさい煙けむりを上げていた。溶よう解かいし液化した有機メモリが、耳といわず目といわず穴という穴から漏もれ出て床ゆかに滴したたっている。脱魂レイス燃焼バーンは終わっていた。
　ＰＤＡの液えき晶しよう画面は、転送完かん了りようのダイアログを表示したまま待機中。エラー件数は……ゼロ。
　すべてのデータを抽ちゆう出しゆつし終えた人形は、立ったまま微睡まどろむかのように、薄うすく半眼に瞼まぶたを下ろしている。
　何も……変わりはない。触ふれて揺ゆり起こせぬものかと、濤タオ羅ローは恐おそる恐る手を伸のばす。
　はたと居い眠ねむりから醒さめたかのように、少女が目を開けて彼を見上げた。
　不意の悪戯いたずらに面めん食くらったかのような、かすかな驚きの相。ただそれだけの表情が、まるで枯かれ枝に不意に咲さいた花のように、活いき活きと人形の貌かおを彩いろどっている。
「あ、に……さ、ま……？」
「……!?」
　驚きよう愕がく、歓かん喜き、そして──畏おそれ。あらゆる激情の渾こん然ぜんとなった塊かたまりが濤タオ羅ローを打ちのめす。
「……解るのか？　瑞ルイ麗リー、俺が……」
「あに、さま……ルイリ、の……あに、さま……」
　たどたどしい発音で、馴なれない言葉を少しずつ口に昇のぼらせて、それから人形の少女は、はにかんだような笑え顔がおを見せた。
　いや、人形と言っていいのだろうか？　この眼まな差ざしを、微笑ほほえみを、過ぎし日のままの妹の顔を。
　故人は、決して戻もどらない。生まれ落ちた身体からだを抜ぬけ出て、生きながらえる人間はいない。
「あはっ。あにさま……すごく、へんなかおしてる」

「……瑞ルイ麗リー……」

そんな理ことわりを知りながら、だが濤タオ羅ローは歓喜に泣いた。この幸福の瞬しゆん間かんに、心しん魂こんのすべてを注そそぎ込んで泣いた。

左道とは、天の理ことわりに背そむく道。そこに踏ふみ出す者を外げ道どうという。そこに住まう者を鬼おにという。

許されざる禁きん忌きの向こう側に、決して届かなかったはずの願望が待ち受ける……それを知ってしまったとき、人は人であることを辞やめる。

いま濤タオ羅ローは自覚していた。己おのれが人の道を外れ、鬼の道に堕おちたことを。

もはや何物も彼を阻はばみはすまい。この一刀で、命を削けずる渾こん身しんの拳こぶしで、死んだ妹が蘇よみがえるというのなら……もはや何物を惜おしもうか。

天意も知らぬ。神仏も知らぬ。我はこの一刀に賭かける修しゆ羅ら。何をか恐れん、人ならぬ鬼が。

「ククク……ククク……」

哄こう笑しようが喉のどを衝ついて出る。それは産うぶ声ごえ──濤タオ羅ローが心に育はぐくんだ怨おん念ねんの卵から、ついに殻からを破って孵かえった鬼の声。人ならぬ化け生しようの笑い声だった。

そう、もう化け生しようで構わない。残り三つの瑞ルイ麗リーの欠片かけら、そのすべてを手に入れる日まで。

目を閉ざせば思い出す。繚りよう乱らんと咲さき散る桃ももの花。その下で紡つむいだ想おもい出の数々……

爛らん漫まんと咲く桃とう花かの下で、濤タオ羅ローは剣けんを執とっていた。

そよ風が梢こずえを揺ゆらすたび、白い花弁は飛ひ沫まつを散らすが如ごとく盛大に宙へと舞まう。まるで満ちに満ちた木の生気が、蕩とう々とうと溢あふれ出るかのように。

日課の鍛たん錬れんをするのに、今日に限って道場でなくこの桃園を選んだのは、ほんの気き紛まぐれである。ただ眺ながめているだけでも心沸わき立つ桃の咲きぶりを眺めるうち、無む性しように身体からだを動かしたくなったのだ。

魔ま都と上海の喧けん噪そうも遥はるかに遠い、崑こん山ざんは陽よう澄ちよう湖この畔ほとりにある孔コン家の私し邸てい。若い兄妹と使用人だけが住まうには些いささか広さを持て余すものの、さりとて引き払はらうとなると、この先祖伝来の桃園が惜しい。

代々続くこの中庭が今の時代に命脈を繋つないでいるのも、濤タオ羅ローの父が大枚をはたいて設しつらえた近代設備の賜たま物ものである。中庭は与圧された透とう過か樹じゆ脂しの天てん蓋がいで覆おおわれ、桃園は汚お染せん物質を被かぶることなく、春のうららかな陽光だけを浴びている。

道着ではなく平服のままだが、花か香こうを孕はらんだ空調はむしろ涼すずやかで心地ここちよい。

服ふつ気きの調ちよう息そくによって丹たん田でんに満たした内ない気きを、閉へい息そくして呑のみ込み、練れん気きを繰くり返す。次し第だい次第に身体が軽くなるのを実感してから、おもむろに佩はい刀とうの鞘さやを払い、提てい膝しつ平へい衡こうの姿勢から形取りに入る。

二八刀三六剣、しめて六四套とう路ろの戴さい天てん流刀とう剣けん法ほうは、刀剣いずれにも対処できるが、畢ひつ竟きようそのすべ

てを活いかすとなれば、斬ざん撃げきと刺し突とつを共にこなす器械が最適だ。

細身で反り浅く片かた刃ばの刀身……主なところでは太極刀や倭わ刀とうが誂あつらえ向きだが、濤タオ羅ローは南派俠きよう拳けん門の鋏きよう刀とうを好んで使っている。

舞い落ちる花弁の一枚を切っ先で払うと、薄はく片へんは音もなく二つに割さける。

なきに等しい重さの手て応ごたえを、確かに指先で捉とらえたことに、濤タオ羅ローは満足する。今日は功クン夫フーの冴さえがいい。氣きが剣けん先さきにまで満ち満ちている。

二手、三手と形取りを重ねていく濤タオ羅ローの節奏に、ふいに柔やわらかな琴ことの音が添そえられた。

「……ん？」

見ればいつからそこにいたのか、木の根元に腰を下ろした瑞ルイ麗リーが、嫋じよう々じようと琴を奏かなでている。濤タオ羅ローの視線に応えて、悪戯いたずらっぽく微笑ほほえむ妹。

瑞ルイ麗リーもまた、この沸き立つような桃の咲さきぶりに心誘さそわれ、一曲奏でたくなったのだろう。練習に茶々を入れられるのは困りものだが、もとはといえば道場でなくこんな場所で剣を振るっている濤タオ羅ローが悪い。桃花の風ふう雅がには、むろん琴の音の方がよく似合う。

それに耳に快い音曲は、さして鍛錬に障さわることもなかった。むしろ小気味よいそのリズムに剣の節奏を重ねてみれば、ますます一手一手の鋭するどさが増す。

軸じく足あしを踏み替えながら、『雲うん霞か渺びよう々びよう』、『四海縦横』、『沙さ羅ら断だん緬めん』の三連続剣。疾はしる剣風が嚊子はやしのように、琴の調べに拍ひよう子しを刻む。兄の応答に喜色を浮うかべて、瑞ルイ麗リーの演奏もまた爪つま弾びく弦げんの数を増やしていく。

響ひびき幾いく重えにも入り乱れ、奥深さを増していく琴の音に、

釣られて激しさを増す濤タオ羅ローの剣けん舞ぶ。二人の琴と剣の技わざは、互たがいに競い合うように、それぞれ玄げん妙みようの度を深めていく。

濤タオ羅ローの丹田で、かつてないほどに充じゆう溢いつする内息。その手応えに心が湧わく。

今ならば……未いまだ達していない絶技秘剣の一つも、あるいはものにできるのではないか？

武に生きる者として抗あらがえない欲求が、濤タオ羅ローを虜とりこにする。

「撥はつッ！」

濤タオ羅ローは長ちよう嘯しよう一いつ声せい、地を蹴けって高らかに宙を舞う。旋シヤン子ヅ転ジヤン体テイで姿勢の天地を逆転させながら、眼下の虚こ空くうに舞い散る花弁、そのうちの一〇枚を見定める。

極限まで高まる氣。流れすぎる一秒を一〇〇に分かちた刹せつ那なの視野に、それら純白の薄はく片へんは凍こおりついたように止まって見える。

剣が奔はしる。一いつ刹せつ那なよりも僅わずかな六徳の間、よりなお細い虚きよの瞬しゆん間かん……

傍はた目めには十条の剣光が、まったく同時に迸ほとばしったように見えただろう。これぞ戴天派剣法の絶技『六りく塵じん散さん魂こん無む縫ほう剣けん』。神速にして細さい緻ちの剣けん刺しは、薙なぎ払ったとしか見えない刃じん影えいが実は悉ことごとく刺し突とつの残ざん影えいという、超ちよう絶ぜつの秘技である。

歇シエ歩ブの姿勢で着地を決め、刻んだ虚こ空くうを仰あおぎ見れば……微び風ふうに舞って宙に浮く花弁は、その数、たった一四片。一〇枚悉くを両断していれば、白い薄片は二〇を数える道理である。

失意の吐と息いきとともに刀を検あらためれば、その切っ先に三枚の花弁が貼はりついていた。十手のうち三手は、花弁を斬きるまでに刃じん速そくが至らなかったのだ。

剣けんの研けん鑽さんに励はげんで十余年、未だこの奥おう義ぎの会得には至らない。あらためて濤タオ羅ローは戴天派剣法の奥深さに感じ入る。

ふと目を上げると、とうに琴を弾ひく手を止めた瑞ルイ麗リーが、拗すねたように目を眇すがめている。

「酷ひどいわ兄様。わたしの琴を聴きいていてくれるんだとばかり思ってたのに」

「ああ、済まん……」

途と中ちゆうからの冒ぼう険けんは、伴ばん奏そうを無視して舞まい手だけが先走ってしまったようなものだ。琴を弾く瑞ルイ麗リーが面おも白しろいわけがない。

「兄様ったら、いつもそう。剣を手に取ったら最後、私なんて眼中にないものね」

「そういう訳じゃ……ない」

むくれる妹を宥なだめようにも、濤タオ羅ローはいまひとつ歯切れが悪い。

そもそも……剣舞に打ち込むあまりすっかり失念していたが、今日は瑞ルイ麗リーにどんな風に声をかけるか、朝からそのことにばかり頭を悩なやませていたのだ。

なのに出会うや否いなや、まだ一言も要件を切り出さないうちから機き嫌げんを損そこねてしまうとは。濤タオ羅ローは我わが身の迂う闊かつさに歯は噛がみする。

「だってお前、俺の剣に合わせて弾いてくれたんだろう？　お陰かげで勢いが乗りすぎた」

「私の曲のせいだっていうの？」

相変わらず脹ふくれ面づらだが、兄のこの言い分は、瑞ルイ麗リーにとってまんざらでもないらしい。

「いいわ。ちゃんと聴いてたっていうのなら、何の曲だか当ててごらんなさいよ」

「途中までは『碧へき霄しよう吟ぎん』だったな。でもその先は、

ちょっと……」
　濤タオ羅ローは言い淀よどんだものの、瑞ルイ麗リーは不機嫌面を脱ぬぎ捨てるようにして破顔した。まるで雲間から日が射さしたかのように表情が明るくなる。
「その先は出で鱈たら目めよ。いま私が作りかけの曲。……だって兄様の剣、どんどん速くなっていくんだもの。『碧霄吟』じゃ追いつけないわ」
「お前の意い匠しようだったのか、あれは」
　妹が舞まいや楽曲に見せる造ぞう詣けいの深さは知っていたが、これには濤タオ羅ローも驚おどろいた。
「いや……素す晴ばらしかった。てっきり大家の名曲だとばかり……」
「おだてたって何にも出ないわよ。もう」
　朗ほがらかに笑ってから、ふいに瑞ルイ麗リーは面相を畏い敬けいに改める。
「そんなものより、兄様の最後の剣の方がよほど物もの凄すごかったわ。速くて眩まぶしくて……稲いな光びかりかと思ったくらい」
「あれはな……しくじったんだ」
　妹の賛辞に、しかし濤タオ羅ローは憫びん笑しようとともに目を逸そらす。
「つくづく俺は至らない。この身を剣に捧ささげておきながら、まだ届かない秘技奥おう義ぎがいくつあることか……」
　己おのれの凡ぼん夫ぷの器うつわを思うたび、濤タオ羅ローはかつて同じ戴天派の兄あに弟で子しだった豪ホー軍ジユンの才能に嫉しつ妬とじみた羨せん望ぼうを懐いだく。あれほどの傑けつ物ぶつが、義のためとはいえ天てん賦ぷの才を捨てざるを得なくなるとは……つくづく運命とは皮肉に運ぶものらしい。
「剣って、そんなにも深いもの？」
　瑞ルイ麗リーの声音の翳かげりを、濤タオ羅ローは耳ざとく聞きとがめる。

こと務め事に話が及およべば、決まって瑞ルイ麗リーが見せる愁うれい顔がお。心優やさしい妹は、未いまだに気持ちを整理できていないのだ。幇ほう会かいの凶きよう手しゆを務める兄の生業なりわいについて。

だが祖父も父もそうであったように、濤タオ羅ローもまた孔コン家の男子。誇ほこり高き青チン雲ワン幇パンの一員である。

「なぁ瑞ルイ麗リー……剣は不ふ祥しようの器なれど、没も義ぎ道どうを斬るのが俠きようの剣……お前も心得ているだろう？　俺たち青チン雲ワン幇パンの大たい儀ぎは」

「……」

「情理を尽つくすではままならぬのが人の世だ。避さけ得ぬ凶きよう事じというものはある。千人に一人の汚よごれ役だが……兄を恥はじてくれるな」

「私だって……」

思いの丈たけを口走ろうとして、瑞ルイ麗リーは口ごもる。

「……私だって、解わかっています。これでも孔コン家に生まれた身ですもの。だけど……」

その先を言うべきか否か、瑞ルイ麗リーには逡しゆん巡じゆんがあったらしい。しばし口を噤つぐんだ後──再び続けられた声音は、それまでにも増して乾かわいていた。

「だけど……ときどき思うの。いつか兄様の心の中に、剣の他ほかには何ひとつなくなってしまうんじゃないか、って」

「瑞ルイ麗リー……」

「この屋や敷しきの桃とう園えんのことも、帰りを待つ私のことも、何もかも忘れて……どこか手の届かない場所に行ってしまいそうで」

何をか言わんや、だ。

白はく刃じんの下をかいくぐり、返り血の飛沫しぶきを浴びる日々。だが幾いく度ど修しゆ羅ら道どうをくぐり抜ぬけようと、この生家に戻れば瑞ルイ麗リーがいる。いつの日も変わらず優しい、妹の笑え顔がおが迎むかえてくれる。

そう思えばこそ濤タオ羅ローは、辛かろうじて心の均きん衡こうを保っていられた。掟おきてや大儀だけで支えられるほど、彼の精神は強きよう靭じんではない。今日まで凶手という過か酷こくな務めを果たしおおせてきたのも、心に妹の面おも影かげを留とどめておけばこそ、なのだ。

「剣けんを揮ふるう兄様は、なんだか真っ直すぐすぎて……怖こわい」

そう言った後で、陰いん鬱うつな空気を払はらおうとしてか、瑞ルイ麗リーはまた笑顔を見せる。

「だから、その剣の道の幾いく分ぶんかでも、この妹のことを想おもってくれたらな……って」

妹の心こころ遣づかいに甘えて、濤タオ羅ローは笑い返してこの場を流すこともできた。だがそうするには、彼女の無理に繕つくろった笑顔の硬かたさが、あまりにも痛ましかった。

そんなことはない、そう声を大にして叫さけびたかった。だがそうしたところで、瑞ルイ麗リーは哀かなしげに笑うだけだろう。思いの丈を伝えようにも、濤タオ羅ローの言葉はあまりに拙つたない。

なぜこんな日に限って、瑞ルイ麗リーを悲しませてしまうのか？　今日という特別な日に、彼女を想う気持ちを知らしめたくて、形にして伝えたくて、そのために濤タオ羅ローは朝から頭を悩なやませているというのに。

「瑞ルイ麗リー、目を瞑つぶってごらん」

「……？」

小首を傾かしげる妹の顔に、濤タオ羅ローはそっと掌てのひらを添そえて、有う無むを言わさず瞼まぶたを下ろさせる。

「……手を出して」

言われるがまま、所在なげに差し出された細い手首。濤タオ羅ローは懐ふところをまさぐり、朝からずっと携たずさえていた悩みの種──今日のために匠たくみに誂あつらえさせた、銀の腕うで輪わを取りだした。

どの頃ころ合あいを見計らって、どんな言葉とともに贈おくればいいのか……ついに妙みよう案あんは浮うかばなかった。が、もう体てい裁さいを取り繕っている場合ではない。こんな風に瑞ルイ麗リーを嘆なげかせないための、そのための贈り物なのだから。

ひやりと手首に触ふれた感かん触しよくに、驚いた瑞ルイ麗リーが手を退ひくと、ちりん、と玲れい瓏ろうの鈴すずが鳴る。

「……!?」

「誕生日、おめでとう」

元来が朴ぼく訥とつな濤タオ羅ローは、これまで贈り物などしたことがない。むかし幼子の頃の瑞ルイ麗リーに玩具おもちやを買い与あたえたのとは訳が違ちがう。こんなとき、どういう手順があるのか、どんな言葉が相応ふさわしいものか、てんで見当がつかなかった。

「その……気に入ってくれたら、嬉うれしい」

どうして己おのれの口からは、こう当たり前の台詞せりふしか出てこないのか？　花も恥じらう乙女おとめを前に、何の雅みやびもない己の無骨さが、濤タオ羅ローには我が慢まんならなかった。

むろん婦人の扱あつかいに長たけた者に助言を仰あおぐことも、考えなかったわけではない。が、それはそれで釈しやく然ぜんとしなかった。己の偽いつわらぬ心を伝えるのに、人の言葉を借りていいものか迷ったのだが……

案に違たがわず、妹は放心のていで手首の腕輪を眺ながめている。とめどなく濤タオ羅ローの胸に湧わき上がる不安。

意い匠しようが好みに合わなかったか？　重さ大きさが煩わずらわしかったか？　思えば彼女が金物の腕輪など身につけていた例ためしがない。迂う闊かつだった。あんなもの、琴ことを弾ひくときはきっと邪じや魔まになる。

「……済まん。その……」

詫わびる言葉にさえ窮きゆうする濤タオ羅ローに、だが瑞ルイ麗リーは慌あわてたようにかぶりを振ふる。

「私……ごめんなさい。その、あんまりに嬉しかったから、つ

い……」

さり気なく目元に触れる指で、滲にじみ出た涙なみだを拭ぬぐい取る様子に、濤タオ羅ローはただ途と方ほうに暮れるしかない。悲ひ嘆たんの心には笑顔を被かぶせ、そして今度は涙しながらも喜びを口にする、少女という性さがの摩ま訶か不ふ思し議ぎに。

「ありがとう、兄様。本当に嬉しい」

そっと瑞ルイ麗リーが手首を振ると、優やさしく囁ささやくようにまた鈴が鳴る。

「これからは、ずっと一いつ緒しよです。寂さびしくなんかない……

この鈴が鳴るたび、私、兄様のこと思い出します」

そして瑞ルイ麗リーが、再び見せた微笑ほほえみは──晴れた秋空のように澄すみ渡わたった、濤タオ羅ローがそうあって欲ほしいと願った通りの笑顔だった。

冬の夜、凜りん烈れつと澄んだ闇やみの彼方かなたには、街の灯ひがとりわけ眩まばゆく見える。

虹ホン口コウのスラム街に隠かくれ住む闇やみ医師謝ツエ逸・イー達ターの診しん療りよう所しよからは、遠く彼方に燦さん然ぜんと輝かがやく金きん融ゆう貿易区の夜景が見て取れた。

もっと高台から全景を一望できる窓ならば、それだけでも値が付いただろう。だが黄浦江の寒水を挟はさんだ手前側に、のしかかるほどに大きくそびえ立つ廃はい墟きよの群が、浦東の輝きを怨うらみがましげに遮さえぎっている。

百年を遡さかのぼった昔には、今の浦東がそうであるように近代アジアの象しよう徴ちようたる壮そう麗れいな建築美を誇ほこっていた、外灘のアール・デコ高層建築群。長江より訪おとずれる船せん舶ぱくを迎むかえ入れる外灘は、古き良き時代の上海の玄げん関かん口でもあった。

イギリス領事館をはじめサッスーンハウス、旧・中国銀行本店など、ネオルネサンスやネオバロックまで入り乱れた華か美びな建築群は、都市機能の中ちゆう枢すうを他に譲ゆずった後も上海の歴史的名所として観光客を集め続け、その賑にぎわいが絶えることはなかった。

だが財政破は綻たんと、それに拍はく車しやをかけた金融貿易区の優ゆう遇ぐう政策によって文化財の維い持じにすら手が回らなくなった市当局は、この歴史ある老ろう朽きゆう建築物を崩くずれ去るがままに放置した。

今では安全性の問題から立ち入りさえ封ふう鎖ささされ、観光客は黄浦江を巡めぐる遊覧船から寂さびれた廃墟を望んでは、在りし日の栄えい華がを偲しのぶばかりである。

寂れ果てた外灘地区を前景に、はるか対岸の浦東の灯を望む……いつ見ても寂せき寥りようの募つのる侘わびしい夜景を、謝ツエはいつものように酒さか瓶びんを呷あおりながら眺めていた。

我わが身の凋ちよう落らくを思い知らせる、なんと寓ぐう意い的な眺めだろうか。そんな風に謝ツエは、己おのれの運命の皮肉さについて思い致いたさずにはいられない。

その昔、彼はあの光の中に身を置いたこともあった。誰だれが知ろう。このうらぶれた老骨が、かつては電脳神経学の権けん威いであり、魂こん魄ぱく転写の第一人者として学会を賑わせた時の人だったとは。

精神と肉体の分ぶん離り。記き憶おくと思考の量子化。人格の複製の可能性と、その前に立ちはだかる脱魂レイス燃焼バーンという謎なぞ……科学史上かつてないほど先せん鋭えい的で、加熱した研究分野。その旗手を担になうのが謝ツエ博士だったのだ。

だがその技術によって脅おびやかされる倫りん理り観かん、予期される法的問題はあまりにも甚じん大だいだった。

精神という神秘の世界。その根幹を神ならぬ人が摑つかみ、恣ほしいままにすることの脅きよう威い。その責を負うには、まだ人類の社

会はあまりに未熟すぎる……そう判断するだけの謙けん虚きよさが、学会の識者たちにはあった。

　各方面から糾きゆう弾だんされ、ついには学会を追放されて、謝ツエが生しよう涯がいを捧ささげた研究には〝禁きん忌き〟という名の重石が載のせられ封ふう印いんされた。

　過日の栄華も夢と消え……今では、この体ていたらく。裏路地に幾いく人にん蠢うごめくとも知れぬ、時化しけた非合法サイバネ医師の一人でしかない。

〝夢追い人の墓は侘びしいものよ……〟

　憂ゆう愁しゆうの想おもいに浸ひたりながら噛かみしめる静せい寂じやくを、不意の騒そう音おんが打ち砕くだく。

　物ぶつ騒そうな界かい隈わいには相応な程度に補強してあったはずの扉とびらが、いとも容易たやすく蹴けり破られ、黒外がい套とうの男が現れた。驚いて腰を浮かせかけた謝ツエは、侵しん入にゆう者しやの風ふう体ていを見て取るや、落ち着きを取り戻もどして座り直した。予期せぬ来訪者ではなかったからだ。

「呼び鈴りんぐらいはあった筈はずだが？」

　毒づいてはみたものの、皮肉が通じる相手でないのは解わかりきっている。抜ぬき身の白はく刃じんを提さげ、袖そでに返り血の染しみをつけた男を前に、むしろ謝ツエの平静さこそ異常であった。

　暖だん房ぼう機きの唸うなりを余所よそにみるみる冷えていく室温は、吹ふき込む外気の冷たさか、それとも男の発する殺気のせいか。

「……質問はひとつだ」

　爛らん々らんと燃える双そう眸ぼうの前に、男は左手を掲かかげ上げる。銀で鋳いられた小さな鈴すずが、この場にそぐわぬ朗ほがらかな清音を鳴らす。

「これを売ったのは貴様だそうだな？　謝ツエ逸・イー達ター」

　瀟しよう洒しやな銀細工の腕うで輪わ。久しく目にしていなかったが、むろん謝ツエには見覚えがあった。

「その通り。儂わしが故売屋の石セツに売った。飲み代しろのカタに

な。もし〝紫し電でん掌しよう〟の孔コンと出会ったなら、きっと高く買い取るだろうとも言っておいたが……石セツには仇あだになったか。何も奴やつを斬きらんでも良かろうに」
「咎とがのない奴でさえ、斬った。だから貴様は……斬るだけでは済まさん」
「君の妹の腕輪を売ったから、かね？」
「とぼけるな！」
　白はく刃じんが唸り、傍かたわらの戸と棚だなが真っ二つになって崩れ落ちる。
「貴様は悪あく魔まだ。〝左さ道どう鉗かん子し〟……人の魂たましいを売る下げ司すがッ!!」
　渾名あだなで呼ばわれて、謝ツエは冷れい笑しように口元を歪ゆがめた。
『左道鉗子』……忌いまわしい異名には訳がある。
　かつて魂魄量子化の研究においては旗手を担っていた謝ツエだが、彼の確立した精神コードの抽ちゆう出しゆつ方法は、被ひ験けん者しやの痛覚神経に過度の刺し激げきを与あたえ続けることで転送に伴ともなうノイズを遮しや断だんするというものだった。マニュアル化されたそれは事実上、拷ごう問もんと同義の内容だったのである。
　実験中の〝事故〟によって発はつ狂きよう、あるいは廃はい人じん化する被験者は後を絶たなかった。
　学会からの追放も、謝ツエの妄もう執しゆうにも近い学究心に歯止めをかけることはなかった。それどころか栄誉を手放すことで法や倫理の束縛からも解放された謝ツエは、自らアンダーグラウンドに身を投じ、嬉き々きとして悪魔の研究を続行したのである。
　肉体の完全放ほう棄き、不老不死の可能性。活動の場所を変えても、謝ツエが示し唆さする展望に魅みせられて集つどう者は後を絶たなかった。ある者は資金を提供し、またある者はおのが身を献けん体たいとして差し出して……
　犯罪の領域へと足取りも軽く踏み込んだ謝ツエの人体実験は、この

頃まさに猖しよう獗けつの極きわみにあった。いつしか、彼が脳のう膜まくを切り開くメスには『左道』の名が冠かんせられていた。

また魂魄転写という技術を思わぬ方向に応用しはじめたのが、ガイノイドによるセックス産業である。

被験者を死に至らしめない程度に抽出した〝魂の欠片かけら〟でも、ガイノイドの情じよう緒ちよスクリプトに付加する形で生体メモリに書き込むと、その人形は決して演算では表現できない〝人間味〟を醸かもし出すようになる。ただの人形とも生身の女とも違ちがう性奴ど隷れい、これが一部の性倒とう錯さく者しやに絶大な人気を博したのである。

こうして魂魄転写を施ほどこされた非合法ガイノイドは、ブラックマーケットで法外な価格で取引されるようになり、新たな犯罪市場を形成しはじめた。

むろん闇やみ医者たちが模も倣ほうしたのは、かつて謝ツエ博士が確立した転写プロセスである。転写元となる脳は損傷を受け、時には生命すら危あやうくさせる。その需じゆ要ようを満たすために、サイバネティクス技術の普ふ及きゆうによって廃すたれていた臓器売買というビジネスが形を変えて復活した。生体脳の売買である。

人ひとりの脳が壊え死しするまでに、上手うまくいけば五〇体以上のガイノイドに魂こん魄ぱく転写を施すことができる。人買いや誘ゆう拐かいの末、闇医者たちのラボに消えた犠ぎ牲せい者しやは数知れない。

貧ひん窮きゆうした麻ま薬やく中毒者の中には、頭を壊されるのは薬も同じと割り切って、自分の脳のう細さい胞ぼうを切り売りするような手合いまで現れる始末である。

そんな実状を知るだけに、大切な妹が『左道鉗子』の許もとへ連れ去られたと知ったとき……濤タオ羅ローの怒いかりと絶望は極きわまった。

「答えろ。貴様は瑞ルイ麗リーに何をした？」

「勘かん違ちがいしてもらっては困るが、私はあくまで依い頼らいに

応こたえただけのことだ。樟ジヤン賈・ジヤ寶ボウ、斌ビン偉・ワイ信ソン、朱チユウ笑・シヤオ嫣ヤン、呉ン・榮ウイン成シン、そして副寨主の劉リユウ豪・ホー軍ジユン……この五人が君の妹を私のクリニックに担かつぎ込んできた。彼らの人形の〝部品〟としてね」

「嘘うそだ!!」

血も吐はかんばかりに濤タオ羅ローは叫さけんだ。

「豪ホー軍ジユンが……奴がそんなことをする訳がない！　あいつは……」

「マカオで誰だれに斬られたか、まさか忘れたわけではあるまい？」

「……ッ!!」

濤タオ羅ローの身体からだが揺ゆらぐ。いま謝ツエを前にして懐いだく憤ふん怒ぬより、なお重くのしかかる絶望に脚あしの力を奪うばわれたのだ。

「……何故、知っている？」

「だから言ったではないか。劉リユウ豪・ホー軍ジユンがここに来たと。彼の口から直々に聞いたよ」

「嘘だ……」

膝ひざの固さを失って、濤タオ羅ローは俯うつむいたまま床ゆかに頽くずおれた。

「そんな馬ば鹿かな……嘘だ……」

「いいや、他ほかでもない劉リユウ豪・ホー軍ジユンの計らいだった」

自失のていの濤タオ羅ローを前に、謝ツエはあくまで冷然と言い放つ。

「さもなければ、こうも大それたことはできんよ。私も今では、そこいらの闇医者と変わらない」

サイバーポルノ業界に於おいて、極きわめて歪ゆがんだ形とはいえ需要と供給を見み出いだした魂魄転写のテクノロジー。だがその一方で、謝ツエの本来の課題である魂たましいの複製、転写保存という研究は袋ふくろ小こう路じに突つき当たっていた。

被験者の脳細胞を破壊する脱魂レイス燃焼バーン、転送に伴ともなう地じ獄ごくの苦痛……この二点については、未いまだ解明の糸口すら見つからない。

不死を求め、謝ツエに期待を託たくしたスポンサーたちも、廃はい人じん化の危険を冒おかしてまで精神の転送を図るより、やがて肉体の機械化と脳そのものの延命処置に期待を見出すようになっていった。

かつて『左さ道どう鉗かん子し』の二つ名で鳴らした風評も、後見人を失った後の凋ちよう落らくは目を覆おおうばかりであった。今ではこうして他の闇医者たちと同様、ガイノイドの非合法改造で糊こ口こうを凌しのいでいる有様だ。

天意は魂魄の複製を決して許さず、また人の魂が、滅ほろびる運命の肉体を離はなれて器うつわを替えようとする試みも、厳しく罰ばつしたのだろうか。

「来る日も来る日もジャンキー共の相手ばかり……まるごと一人分の実験台を手に入れる機会などありはしない。

そんな折、旧知の友人から誘さそいがあった。とある少女を拷ごう問もんしたい。精神の壊れるまで徹てつ底てい的に……立ち会えば丁度良い実験の機会ではないか、とね。一も二もなく乗ったよ、私は。

経験則上、レイプというのは只ただの拷問より効率的なのだ。神経系に与あたえる損傷は最小限だが、極きわめて高い精神的ストレスを発生させ、最終的には自我や感情が認にん識しきと分断を起こす。自分が人でなく〝モノ〟として扱あつかわれることを許容する……そういう精神状態が、転写には理想的でね」

怨念の一刀を携えて現れた濤タオ羅ローを前にして、謝ツエのさも得意げな弁舌は悪意ある挑ちよう発はつ以外の何物でもない。一度は膝を折った濤タオ羅ローも、再び狂くるおしい程ほどの怒りを呼び覚まされる。

「……ここで、瑞ルイ麗リーは死んだんだな？」

「処置の結果、三時間で脳波計は沈ちん黙もくした。君の言う〝死〟

とは、そのことか？」
　剣けん柄ぺいを握にぎる手に力がこもるあまり、刀身が小刻みに震ふるえる。白刃の冷たい反射光が薄暗い室内にちらちらと躍おどり……だが濤タオ羅ローの双そう眸ぼうは、なおいっそう凍こおっている。
　そんな眼まな差ざしを受け止めてなお、謝ツエの顔に恐きよう怖ふの色はない。
「私が施し術じゆつしたことを、君は喜ぶべきだったんだぞ？　今日きよう日び、魂魄転写を請うけ負う闇医者はごまんといる。そんな手合いにかかっていれば、彼女は一〇〇％不可逆な処置を受けていただろう。
　その点、私の実験は……彼女の蘇そ生せいを目もく論ろむものだった」
「……何？」
「君の妹は生きている。彼女は肉体こそ滅ほろんだが、その魂が器うつわを替えただけのこと」
「人形のプログラムに作り変かえて、か……!?」
　憫笑でかぶりを振る謝ツエの仕草は、教え子の呑のみ込みの悪さを嘆なげく教師のようだった。
「たとえば、だ。精神を水のようなものと仮定してみよう。ある瓶かめの中の水を五つの杯さかずきに汲くみ分けて、それから別の瓶かめに集め直す。……最初の瓶かめと新しい瓶かめと、中の水は同じものなのか否いなか？　精神に対する除算と加算だ。はたしてプラスマイナスはゼロになるのか……脱魂レイス燃焼バーンの解明には繋つながらない実験だが、こと魂の量子化という点では、興味深い試みになる」
　蕩々と語る謝ツエの語調は、死を目前にした人のそれではない。その異常なまでの自信を訝いぶかる心が、濤タオ羅ローの殺意を臨界点の手前で留とどまらせている。
「君の妹の脳は、ありったけの内容を吸い出されて壊え死しした。だ

がその魂は失われたわけではない。分断され、場所を変えて保存されている。
　これらを再結合させて、もとの孔コン瑞・ルイ麗リーを再生できるとしたら……どうかね？」
「……出来るのか？」
「判わからんよ。言っただろう？　実験だと。結論はこれから出る。
　ただし、私の理論と技術を信じるのなら……君は私に感謝するだろう。妹の恩人としてね」
　異い端たん科学者謝ツエ逸・イー達ターの伝説は、濤タオ羅ローも聞き知っている。人間の精神を脳とは違ちがう媒ばい体たいに移す……それこそが彼の目指した最終目標だ。
「この実験、クライアントたちには無許可でしたことだ。彼らとしては、レイプされる少女の精神を転写できる技師だけが必要だった。私の思おも惑わくなど興味すらなかっただろう。
　とはいえ、相手は青チン雲ワン幇パンの幹部たちだ。あんな連中からサンプルを回収して廻まわるなど、この老骨には酷むごすぎる。それができるスタッフを雇やとう富もツテもない。見ての通りの貧びん乏ぼう暮ぐらしでね。そこで私は、自発的な協力者が現れるのを待つことにした。一人だけ、心当たりがあったからな。
　君の生存は、私なりの情じよう報ほう網もうで摑つかんでいた。いずれはこの上海に舞まい戻もどると踏ふんでいたよ。……まさか一年も待たされるとは思わなかったがね」
　軽い眩暈めまいが濤タオ羅ローを襲おそう。怒いかり、混乱、そして……愚おろかしいほどに儚はかない、希望。
　どこまでが真実なのか。どこまでが正気なのか……この謝ツエという男の頭の中は。
「俺に、貴様の走そう狗くになれと？」
「君は妹の仇あだ討うちをする腹だったようだが、事態はそこまで捨てたものではない。いや、むしろ輪をかけて嘆くべきかな？　今の〝彼女たち〟の境きよう遇ぐうを考えれば。

五等分された君の妹は、こうしている今も慰なぐさみ物になり続けている。彼女を辱はずかしめた者たちの手て許もとでね。ひとつ白馬の騎き士しにでもなって、彼女たちを救い出してみてはどうかね？」

「貴様……」

老科学者の理論を検証できるほどの知識は濤タオ羅ローにない。むしろ彼の培つちかってきた知識と、かつてそれに伴ともなった名声には、嫌けん悪おだけでなく畏い怖ふさえ懐いだいていた。

否いな……老科学者の語る内容を世よ迷まい言として一いつ蹴しゆうするには、あまりにも濤タオ羅ローは弱かった。瑞ルイ麗リーの死を否定する言葉なら、いっそどんな戯たわ言ごとでも信じたい……そう願う心の隙すきがあった。

己おのれが、いつしか老科学者の言葉の幻げん惑わくにまんまと呑み込まれていることを自覚していた濤タオ羅ローは、ただ怒りの声をぶつけるしか他ほかになかった。

「貴様は人の命を……魂たましいを、何だと思ってる……!?」

「さて、何と思うべきなのか」

濤タオ羅ローの怒ど気きを淡たん泊ぱくに受け流して、『左さ道どう鉗かん子し』は肩かたを竦すくめる。

「その問いの答えを追い求めて、私は一いつ生しよう涯がいを費ついやしてきた。……挙げ句の果てが、このザマだ」

気け怠だるげに腕うでを振ふって、乱れきった部屋の有様を示す謝ツエの口元には、自じ嘲ちようの笑えみさえ浮うかんでいた。

「さて、返事を聞かせてくれないか？　君を待った甲斐かいがあったのかどうか。私の準備は万ばん端たん、整っている。あとは君の一存次し第だいだ」

「……」

力の限りに握りしめた濤タオ羅ローの手の中で、倭わ刀とうの柄つかがかすかに軋きしむ。

この剣けんで……残らず斬きって捨てる腹だった。仇かたきは『左道鉗子』だけではない。彼を裏切った豪ホー軍ジユン。瑞ルイ麗リー

を辱めた香こう主しゆたち。一人残らずその全員を。
　そう、殺すとなれば残らず全員。その誓ちかいさえ確かなら、誰だれから先に始末しようと順序にさしたる意味はない。
「いいだろう……」
　押し殺した声で呟つぶやくと、濤タオ羅ローは抜ぬき身の倭刀を鞘さやに収めた。
「貴様の言うとおり、まずは幇会の奴やつらから先に、狩かる」
　香主たち全員を血祭りに上げ、連中のガイノイドを残らず回収してみれば、謝ツエの言げん質ちには裏が取れる。この男をどうするかは、それから決めても遅おそくはない。
　濤タオ羅ローは凶きよう手しゆとして、幾いく多たの人間を狩ってきた。そんな己おのれの直感に依よるなら、この老科学者は逃にげも隠かくれもするつもりはない。先の弁舌も、延命のためのものではない。この男は本当に瑞ルイ麗リーを蘇よみがえらせる……或あるいは、そんな妄もう想そうに憑つかれた狂きよう人じんだ。
　今夜こうして捜さがし出したように、次もまた容易に居場所を摑つかめるだろう。ここで殺さずとも見み逃のがすことはない。
「決まりだな」
　寿ことほぐように手を打ち鳴らし、謝ツエは会心の笑え顔がおで頷うなずいた。こんな笑顔で執しつ刀とうに臨む医師がいれば、どんな患かん者じやでも安あん堵どして身を任せるだろう。かのファウストと約やく定じようを結んだ悪あく魔まも、あるいはこんな顔をしていたかもしれない。
「それでは君に、預けるものがある」

「……こいつは？」
　謝ツエに引き合わされたものを前にして、濤タオ羅ローは露ろ骨こつに顔を歪ゆがめた。

「この日のために用意しておいた、特別なガイノイドだ。連れて行け」

ガイノイド。今時、夜の街に繰くり出せばいくらでも目につく性せい玩がん具ぐ。濤タオ羅ローから見れば虫むし酸ずの走る悪あく趣しゆ味みだった。

「これ自身に歩かせても良し、邪じや魔まならトランクにでも詰つめて持ち歩けば良かろう。そう思って幼年型にした」

「こいつを、どうしろと？」

「さっきの喩たとえ話で言うところの〝新しい瓶かめ〟だよ」

準備してから、よほど永らく放置されていたのだろう。起動した機械仕じ掛かけの少女が起きあがると、前まえ髪がみから薄うすく埃ほこりが散り落ちる。

「この人形のメモリには特製のユーティリティがインストールしてある。〝水〟を汲くみ変え、混ぜ合わす……魂こん魄ぱく転写と再結合のプログラムだ。私が香主たちに贈おくったガイノイドからメモリの内容物を吸い出し、回収した他のデータと結合させる。

君はこの人形のメモリに、五体のガイノイドの魂魄を片かたっ端ぱしから転写していけばいい。五体分が揃そろったとき……君の妹は、この人形の中に復活する。彼女は生体脳から人工脳へと一〇〇％の移行を果たす、最初の人類になるだろう」

謝ツエの語り口に、濤タオ羅ローは空そら恐おそろしいものを感じ取る。

「瑞ルイ麗リーが元通りになったかどうか、どうやって確かめる？」

もとより人の魂の質や量など、単位で計れるものではない。ひとたび引き裂かれた瑞ルイ麗リーの魂魄を寄せ集めて、それが過不足ないものとどうして言えるのか？

「それこそがこの実験の焦しよう点てんだ。器うつわを変えた孔コン瑞・ルイ麗リーの魂が、果たして孔コン瑞・ルイ麗リーその人と言えるか否いなか……ただ一人の肉親である君にしか判断はできまい。だからこそ君を選んだのだ。

すべてが終わったら、ぜひとも君の主観を聞かせてほしい。この人形の中にいる魂が、本当に君の知る妹かどうか」
「……」
そう、この『左道鉗子』とて、答えを持ち合わせているわけではない。彼自身がその答えを求めて、こんな場末にまで零れい落らくしてきたのだから。
ベッドから降りて立ち上がった幼年型ガイノイドは、空虚な眼まな差ざしをぴたりと濤タオ羅ローに据すえている。オーナーとして認にん識しきをした様子だが、それ以上の挙きよ措そは一いつ切さい見せない。
謝ツエの言うとおり、本当に〝空の瓶かめ〟……基本動作系のドライバ以外は何ら実装されていないらしい。
「報告を待っているよ。孔コン濤・タオ羅ロー」
握手を求めて手を差し出す謝ツエを余所よそに、濤タオ羅ローは妙みように冷え冷えとした眼差しで部屋を見み渡わたしている。
「ここの設備なら、手足を義ぎ肢しにするくらいは訳もないんだろうな」
「無論だ。一〇分もあれば事足りる」
「そいつは何よりだ」
言い終わる前に、左手の鞘から白はく刃じんが躍おどった。
床ゆかが傾かしぐ……不意の違い和わ感かんに襲おそわれ、だが謝ツエは身体からだの均きん衡こうを取り戻もどすこともできず転てん倒とうした。
手がかりを求めて泳いだ腕うでが、書類戸と棚だなをひっくり返す。倒たおれた床は血に染まっていた。謝ツエの右みぎ脚あし──かつて膝ひざのあったあたりから、鮮せん血けつが飛沫しぶいている。
ここに至ってようやく、謝ツエは片脚を切り落とされたことに気がついた。痛みは認識と同時に襲おそいかかってきた。
「あまり血の抜ぬけんうちに処置をしろ。この程度で死なれてはつまらん」

　悲鳴を上げてのたうちまわる謝ツエを冷然と見下ろし、濤タオ羅ローは刀を血ち振ぶりしてから再び鞘さやに滑すべり込ませる。
「がッ……ぐゥ……!!」
「他人の痛みなど意に介かいさん奴やつが、なかなかどうして、我わが身の痛みには達者に嘆なげくじゃないか」
「～～～ッ!!」
　無論この程度で溜りゆう飲いんが下がるはずもないが、今夜のところは濤タオ羅ローも自制することにした。もし再び相あい見まみえるようなら、そのときは片脚どころでは済まさない。そう心に決めて、あとは一いち瞥べつもくれずに蹴け破やぶった扉とびらから出ていった。
「……」
　後に残された人形もまた、この場の状じよう況きように対処するルーチンは何一つ持ち合わせていない。ひとしきり環かん境きようを走査した後は、血の海に沈む謝ツエには目もくれず、オーナー認識した人物の後をたどたどしい足取りで追いかけた。

『羅ら刹せつ太たい后こう』の二つ名で知られる青チン雲ワン幇パン陪ばい堂どう、朱チユウ笑・シヤオ嫣ヤンの死より一夜明けた翌朝……
　上海義肢公司ビル最上階の社長室に、今また三人の香こう主しゆたちが一堂に会していた。
「これが、見つかった樟ジヤンのガイノイドの首」
　呉ンがテーブルに載のせた残ざん骸がいは、見るも無む惨ざんな有様だった。磨坊街の裏路地にうち捨てられていたまま、見つかるまで三日あまり放置されていたのだ。柔やわらかい外装を鼠ねずみに食い荒あらされて、セラミックの骨格が剝むき出しになっている。
「有機メモリは完全に焼けついている。間違いなく脱魂レイス燃焼

バーンだ。そしてこれが……」
　続いて呉ンはもう一つ、今度は破損の具合の少ない生首をテーブルに載せる。
「朱チユウの部屋に残されていたガイノイドの残骸。こいつのメモリも、また同上。つまり孔コン濤・タオ羅ローは、妹から魂こん魄ぱく転写されたガイノイドのデータを吸い出してまわってる。俺たちへの意い趣しゆ返がえしもあるだろうが、孔コンにとっちゃむしろ、人形の方が目当てなのかもしれん」
「何を血迷って、そんな真似まねを？」
　斌ビンに問われて、呉ンは大げさに肩かたを竦すくめる。
「さあね。仰おおせの通り、血迷ってるだけじゃねぇのか？　あいつの妹の可愛かわいがり方、度が過ぎていたもんな。その妹の脳が切り身になってばらまかれてるとなりゃ、トチ狂くるったとしても不思議はない。
　で、どうなんだ？　奴を追う手て筈はずの方は」
「……名うての賞金稼かせぎが何人か、行方ゆくえ知れずになっている」
　応こたえる斌ビンの声は、憮ぶ然ぜんとして硬かたい。
「やはり賞金を懸かけたのは間ま違ちがいだったかもしれん。猟犬どもは孔コンの居場所を摑つかんでも、横よこ槍やりが入るのを用心して報告をよこさない」
「で、挙げ句の果てに返り討ちに遭あって、追つい跡せきは振ふり出しに戻るわけだ。どうしてそう、揃そろいも揃って馬ば鹿かばかりなんだ？」
「朱チユウと同じだ。連中もサイボーグ……外家拳法の矜きよう持じがある。孔コンを内家のものと侮あなどってかかり、まんまと奴の刀の錆さびになる。
　やはり幇ほう会かいの兵も動かすべきだ。寨さい主しゆのことも、いつまでも伏ふせておくわけにはいかない」
「まだ早い」

盟証の諫かん言げんを吟ぎん味みする素そ振ぶりすら見せず、劉リユウはあっさりと一いつ蹴しゆうする。
「寨主の葬そう儀ぎには、下げ手しゆ人にんの首級しるしを捧ささげなければならん。そうでなければ幇パンの面子メンツにかかわる。まず孔コンの首を穫とってからだ」
「しかしよ、限度ってものがあるだろう」
劉リユウと示し合わせているつもりでいる呉ンも、ここまで来ると副寨主の腹が見えなくなってくる。
「まずいぜ。朱チユウや樟ジヤンが孔コンにやられた件は、もう街に知れ渡わたってるんだ。奴の始末に手間取ってたら、それこそ幇の面子が危あやうくなる。このうえ最後に、実は寨主まで殺やられてました、なんてオチがついてみろ。俺たちゃ黒社会の笑い物だぞ」
「孔コンを相手に、幇会内から犠ぎ牲せいを出すことこそ下策だ。実際、孔コンは手て強ごわい。樟ジヤンに続き朱チユウまでもが後れを取った。事は慎しん重ちように進めるべきだ」
「時間をかけりゃいいってもんか？」
「それこそ最善の策なのさ。奴の『電でん磁じ発はつ勁けい』に対しては」
いつになく食い下がる呉ンを前にして、劉リユウはあくまで従しよう容ようと続ける。
「電磁発勁というやつは、使い手の身体からだに相当な無理をかける。幇会の凶きよう手しゆだった頃ころは、そういう事情を考こう慮りよして、奴やつの任務の合間には充じゆう分ぶんなインターバルがあった。
ところが今、奴はそんな風に身体を労いたわっていられる立場じゃない。一夜目に樟ジヤン。翌日に朱チユウ……それ以降、奴は毎日のように追っ手の賞金稼ぎどもと渡り合っているわけだ。
サイボーグとの立ち合いを重ねるごとに、孔コンの生命いのちは磨すり減っていく。俺たちの前に現れる頃には、半死半生の有様だろうな」

「……」
　淀よどみなく続く劉リユウの解説を、斌ビンと呉ンはただ黙だまって聞いているしかない。
「幇の兵隊を噛かませ犬にして浪ろう費ひする必要はない。もうしばらく、野良犬どもをけしかけて消しよう耗もうさせてやれ」
　筋は通っている。誰だれよりも戴たい天てん派の電磁発勁について知る人物の言葉だ。説得力も充分にある。だがそれでも、劉リユウの人ひと柄がらを知っている二人は釈しやく然ぜんとしない。
「珍めずらしいよな。あんたがそこまで雑ぞう兵ひように心を割さくなんて」
　そう呟いた呉ンの後を斌ビンが引き継つぐ。
「リスクより能率を優先するのが、あんたのスタイルだと思っていたが」
　そんな二人に対し、劉リユウは相変わらず底の知れない微び笑しようでかぶりを振るばかり。
「人は誰しも成長するものさ。李レイ寨主亡なき今、明日の青チン雲ワン幇パンを担になう身としてはな……今まで以上に、幇ほう会かいの皆みなには愛を感じる」
「馬ば鹿か吐ぬかせ」
　毒づく呉ンは一笑しようとしたらしいが、依い然ぜん硬かたいままの空気の中では不発に終わる。
「ともかく、幇が直々に動くのはまだ先でいい。代わりに賞金の額を上乗せしろ。それと、情報提供にも手当を出すとしよう」
　それを聞いた斌ビンは、埒らちがあかぬとばかりに嘆たん息そくする。
「ガセが集まるばかりだぞ？」
「そいつを選えり分けていれば気休めぐらいにはなる。手持ち無ぶ沙さ汰たなんだろう？　お前らも」
「……」
　劉リユウの棘とげのある言い方に、斌ビンの眼まな差ざしが険しく

なる。すぐにも普ふ段だんの鉄面皮を取り繕つくろったものの、それでも苛いら立だちの程ほどは隠かくしようがない。
　おもむろに腰こしを上げてから、斌ビンは見下ろす視線で劉リユウを凝ぎよう視しした。
「忘れないでくれよ、劉リユウ。いま幇会を采さい配はいする一手一手が、後々に次期寨主の器うつわを問う材料になる。……俺たちが担かつぐあんたには、下手へたを打ってほしくない」
「心しておくさ」
「……」
　なお釘くぎを刺さすように鋭く劉リユウを一いち瞥べつしてから、斌ビンは背を向けて社長室の専用エレベーターに乗り込んだ。
　その背中を見送った後から、さも愉たのしげに破顔する劉リユウ。
「脅おどかしてくれるな。斌ビンの奴。俺の器量の次し第だいによっては、出し抜ぬいて次期寨主を狙ねらうと……そう言いたかったのか？　あれは」
「奴はともかく、俺にはそんな甲斐性かいしようはねぇよ。劉リユウ」
　笑う副寨主とは裏腹に、呉ンはいつになく神しん妙みように、抑よく揚ようを抑おさえた声で応こたえる。
「だから……なぁ、腹割って教えてくれ。いったい何を考えてる？」
「何のことだ？」
「……」
　視線だけで真意を問いただす、そんな度胸は呉ンにはない。とりわけ相手が劉リユウともなれば。
「朝早くから邪じや魔ましたな、社長」
　固い空気を意にも介かいさず、劉リユウは颯さつ爽そうとソファから腰を上げた。
「腹黒い連中の事は放ほうっておいて、経営業務に励はげんでくれ」
　白々しくそう言い残すと、斌ビンを送り戻もどってきたエレベーターに姿を消す。

「……くそったれ」
　高速エレベーターのケージが数十階を下った後で、呉ンは罵ののしりながら黒こく檀たんの机を一ひと蹴けりした。
「内輪で揉もめてる場合かよ？　えぇ」

　晴れ渡わたった寒空の下、ただ寂じやく獏ばくと響ひびき渡る潮しお騒さいのざわめき。
　訪おとなう者とてない砂すな浜はまには、海の彼方かなたから流れ着いた漂ひよう流りゆう物ぶつが回収されることもなく積み上がり、それに便乗して不法投とう棄きされた廃はい棄き物ぶつの山が、打ち寄せる波に洗われるがまま放置されている。
　宝パオ山シアン区、呉ウー淞スン口に程ほど近ちかい海岸である。待ち人と落ち合うのは、人目さえなければ何処どこでも良かった。濤タオ羅ローが敢あえてこんな場所を選んで指定したのは、単に瑞ルイ麗リーが海を見たがったという、それだけの理由だ。
「わぁ……」
　砂浜を一面覆おおい尽つくすガラクタの数々に、瑞ルイ麗リーが目を輝かがやかす。錆さびと重油と藻もの絡からまった奇き怪かいなオブジェの群は、子供の無む垢くな目で眺ながめれば心躍おどらせる異世界の景観に見えたかもしれない。
「ここ、すごいっ！　リューグージョーのおにわみたい！」
　小躍りして指し示す瑞ルイ麗リーの様に、自然と濤タオ羅ローの頬ほおも弛ゆるむ。
「タマテバコもあるかな？　あるかなっ？」
「ハハ……どうだろうね。あるかもしれないよ」
　濤タオ羅ローが曖あい昧まいに頷うなずいただけで、瑞ルイ麗リーはもう駆かけ足で海岸に向かっていた。
　一望したところ、ガスボンベや不ふ発はつ弾だんといった爆ばく発

はつ物ぶつの類たぐいは見当たらない。鋭えい利りな金属や細さい菌きん、汚お染せん物質といった類の危険物なら、今の瑞ルイ麗リーには目くじらを立てて注意する程のこともない。とりわけ頑がん強きようというわけではないが、それでもガイノイドのボディは人間のそれほど脆ぜい弱じやくではない。

「……」

打ち寄せる波と戯たわむれる様を見守りながら、濤タオ羅ローは初めて『左さ道どう鉗かん子し』のクリニックで出会った夜のことを思い出す。

あのとき渡されたのが死体も同然の抜け殻がらだったとすれば、今の彼女ははっきりと生命いのちの息吹いぶきを取り戻している。瑞ルイ麗リーの、生命を。

その魂こん魄ぱくは、まだ二体のガイノイドから回収したぶんだけしかない。言葉はたどたどしく、記き憶おくもあやふやだが、何よりも今の瑞ルイ麗リーは感情を取り戻している。

思考力や認にん識しき力りよくはまだ伴ともなわない。言ってみれば言葉を覚えたての子供のような有様だ。慎つつしみや恥はじらいといった思し慮りよ分別を忘れているぶん、むしろ今の瑞ルイ麗リーは感情表現が素す直なおで初ういゝういしい。

濤タオ羅ローは手近な場所に転がっている廃はい車しやを見み繕つくろい、そのフェンダーに腰こしを下ろした。兄に動き回る意思がないと見てとるや、瑞ルイ麗リーはすぐに駆け戻ってきてせがむように手を引く。

「あにさまもぉ、タマテバコいっしょにさがすっ！　ルイリとさがすぅ」

「ハハ……俺じゃ解わからないよ、玉手箱なんて。見つけたら運んであげるから。瑞ルイ麗リーが探しておいで」

「うんっ」

素直に頷いてまた散策へと戻る瑞ルイ麗リーは、ほんの一時たりとも凝じっとしてはいられないらしい。まるで幼い子供の頃ころの妹を

見ているようで、濤タオ羅ローの心は追想へと飛ぶ。
　剣の修練にばかり打ち込む濤タオ羅ローに、いつも幼い妹は遊び相手をせがんでいた。あの頃、構ってやれなかった罪つみ滅ほろぼしを、今からでもできるだろうか。
「ねぇね、あにさま、このぼう、ランリョーオーのバチそっくり」
「ああ……」
　瑞ルイ麗リーが拾い上げた金属のチューブは、片かた隅すみから赤いケーブルが剝むき出しになって垂れ下がり、なるほど『陵りよう王おう』の舞ぶ楽がくで使う、紅べに緒おをつけた桴ばちに見えなくもない。
「憶おぼえてるのか？　『蘭らん陵りよう王おう』……」
「もっちろん」
　胸を張る瑞ルイ麗リーはいかにも自じ慢まんげだ。
「あにさまに、おそわったんだもん。わすれたりしないよ」
　瑞ルイ麗リーは勇ましくチューブを振ふりかざし、小さな左手にも剣けん印いんを結ぶ。
　蕭しよう、蕭、蕭……
　腕うで輪わの鈴すずを打物に見立てて振り鳴らし、鼻歌で奏かなでる旋せん律りつは―たしかに『陵王乱序』の竜りゆう笛てきの伴ばん奏そうだ。剝き出しの膝ひざを高々と上げながら、出ずる手ての舞まいが始まった。
〝ああ、そうだった……思い出した〟
　幼い頃、剣の鍛たん錬れんに明け暮れる兄を羨うらやんで、剣術を覚えたいと駄々を捏こねだした瑞ルイ麗リーを宥なだめるために、濤タオ羅ローは手ずからこの舞を教えてやったのだ。
　蘭陵王。むかし斉せいの国に眉び目もく秀しゆう麗れいな王がいた。だが彼の兵たちは、王の美び貌ぼうに見惚みとれるあまり戦いくさにならない。そこで王は厳いかめしい龍りゆうの仮面を被かぶって戦場に臨のぞみ、見事、周しゆうの軍を撃うち破ったという。美しき猛もう将しようの勇姿を舞ぶ曲きよくにしたこの『蘭陵王』は、数あ

る舞楽のうちでもとりわけ軽快華か麗れいなものとして知られる。

舞らしからぬ素す早ばやく大だい胆たんな動作は、小さな瑞ルイ麗リーには剣の形取りと差のないものに見えたのだろう。瑞ルイ麗リーは夢中になって練習に励はげみ、座ざ敷しきと言わず庭と言わず、一日中舞まい踊おどっていたものだ。

あの頃そのままの元気さで、瑞ルイ麗リーは伸のび伸びと身体からだを広げて、海岸をはずむように駆かけ回る。足運びはいかにも拙つたないが、伸びやかに腕を振りつつ宙を跳ねる走わしり舞まいは、見ているだけで幼い活力を分け与あたえられるようだ。

濤タオ羅ローの心を澱よどます諸もろ々もろの想おもいが、洗い流されるように晴れていく。いつしか彼も舞手の瑞ルイ麗リーと一いつ緒しよになって、『囀さえずり』の台詞せりふを口ずさみ、手て拍びよう子しを打っていた。

小さな身体で、それでも力ちから一いつ杯ぱいに大きく桴を振りかざす三軍叱しつ責せきの仕草。子供が演じるには滑こつ稽けいなほど勇ましすぎて、それがむしろ愛らしい。

「……」

言葉もないまま、濤タオ羅ローは眼まな差ざしを和なごませる。

こんなにも……こんなにも幸福なひとときを、また再び味わうことになろうとは。

思いの丈たけに胸が詰つまり、つい気が緩ゆるむと、途と端たんに息が続かなくなった。堪こらえきれずに囃はやし声を止め、濤タオ羅ローは立て続けに咳せき込む。

「もうっ。まじめにやってよ。あにさま！」

小さな頬ほおを膨ふくらませて兄を叱しかりながら、それでも瑞ルイ麗リーは楽しげに舞い踊る足を休めない。

「すまん、すまん……」

笑って詫わびながら、濤タオ羅ローは口元に添そえていた手をそっと拭ぬぐう。赤々と散った吐と血けつの飛び沫まつも、コートの黒い布地になすりつければ、さほど目立つことはなかった。

こうして過ごす時間が、永遠であってほしかった。残された時間のすべてを、あの笑え顔がおとともに過ごしたかった。

他ほかならぬ濤タオ羅ロー自身、我わが身の行く末は理解していた。度たび重かさなる電でん磁じ発はつ勁けいの使用によって、既すでに濤タオ羅ローは回復不能なまでの内傷を負っている。

悔くいはない。そう思っていた。最愛の妹を失った今、生きながらえる理由もない筈はずだった。

だが今、こうして舞い踊る人形に瑞ルイ麗リーの面おも影かげを見るうちに、いつしか再び生に執しゆう着ちやくしつつある自分がいる。遠い日に過ぎ去った幸せな想い出を、共に過ごした平和な日々を、また取り戻もどして再現できそうな、そんな希望さえ懐いだいてしまう。

だがそれは決して、叶かなわない。残る仇かたきは、あと三人……ある者は鉄てつ壁ぺきの牙が城じように籠こもり、またある者は極きわめ抜ぬいた武術を駆く使しして、濤タオ羅ローの前に立ちはだかるだろう。

今は上海義ぎ肢し公司社長の座に昇のぼりつめた『網もう絡らく蠱こ毒どく』呉ン・榮ウイン成シン。暗器の達人『百ひやく綜そう手しゆ』こと斌ビン偉・ワイ信ソン。そしてかつての兄あに弟で子し、『鬼き眼がん麗れい人じん』の劉リユウ豪・ホー軍ジユン──これより待ち受ける死し闘とうの果てに、この身体が保もつ望みは、ない。

避さけて通れはしなかった。奴やつらに囚とらわれた、瑞ルイ麗リーの欠片かけら。その全すべてを取り戻して初めて、瑞ルイ麗リーは完全になれるのだ。

〝たとえこの身が朽くち果てようと、瑞ルイ麗リー、お前だけは……〟

笑い踊る瑞ルイ麗リーの姿を胸に焼きつけ、その姿に誓ちかいを立てる。

〝必ず戻してやる。元通りのお前に……〟

濤タオ羅ローのそんな悲ひ愴そうな想いを余所よそに、瑞ルイ麗

リーはただ爛らん漫まんと、いつまでも波打ち際ぎわを舞い続けた。

「……」

ふと背中に視線を感じ、濤タオ羅ローは肩かた越ごしに背後を窺うかがう。

その男は濤タオ羅ローの視野に入る前から、敢あえて大おお仰ぎように足音を立てながら近づいてきた。ことさらに害意がないことをアピールしているのは、相手が何者で、今どういう立場にあるのかを弁わきまえているが故だろう。

浅黒く肌はだ艶つやの悪い、これといった特とく徴ちようのない中年男だった。くたびれたハンチング帽ぼうに安物の耐たい環かん境きようコート。どこにでもいる労働者の風ふう体ていだ。

それでも、時計の針は申し合わせた通りの時刻を示している。ここで落ち合うはずだった人物なのは間ま違ちがいない。

再び浜はま辺べに目を遣やると、瑞ルイ麗リーは踊おどりに夢中になるあまり、かなり先まで離はなれている。会話を聞きとがめられる気き遣づかいは、ない。

「……変装ぐらいしてると思ったが。真っ昼間から大手を振ふって出歩くとは、大した度胸だな」

開口一番、男は冷れい笑しようまじりに濤タオ羅ローを揶や揄ゆする。

「あんたを追って、この上海に何なん匹びきハイエナがうろついてるか知ってるのかい？」

「知りたくもないな。煩わずらわしい」

今朝までに五人からの刺し客かくを斬きっている。すべて追っ手の気配を察した時点で奇き襲しゆうに先んじて討うったため、まだ逃にげ場を失ったことはない。だがそれも時間の問題だろう。いずれ青チン雲ワン幇パンが直々に組織だった追つい跡せきを始めれば、上海は

連中の庭だ。瞬またたく間まに包囲される。
　むしろ未いまだに幇会が動かず、野犬ばかりが噛かみついてくる有様に、濤タオ羅ローは内心で首を傾かしげていた。幇パンの中枢にいるはずの斌ビンや劉リユウが、なぜその威いを嵩かさにかかって攻せめてこないのか？
「街はあんたの噂うわさで持ちきりだぜ」
　海からの風に首を竦すくめながら、男は濤タオ羅ローの横に並んで廃はい車しやの屋根に肘ひじを預ける。
「墓穴から出てきた『紫電掌』が、何をトチ狂くるったか、もとの飼い主の青チン雲ワン幇パンに噛みついて廻まわってる……もう香主が二人も斬られた。あんたの首には三〇万元、居場所の情報だけでも二万元……」
「あんたは売らなかったのか？」
「売った上でノコノコこの場に来ると思うかい？」
「そうだな。あんたは二万元の賞金を棒に振って、わざわざ俺に会いに来た」
　鋭するどく探さぐるように男を一いち瞥べつしつつ、濤タオ羅ローは穏おだやかな口調で続ける。
「理由はどうあれ、俺が青チン雲ワン幇パンに仇なす人間だからだ。違ちがうか？」
　男は濤タオ羅ローの視線に応じることもなく悠ゆう然ぜんと、取り出した煙草たばこに火を点つけた。
「俺はもちろん、あんたを知ってる。その名も高き『紫電掌』の孔コン濤・タオ羅ローだ……だがその紫電掌の旦だん那ながよ、いったいどういう訳あって俺なんぞと会いたがるのか、そこんところを知りたくてな」
　男の言葉に、濤タオ羅ローは相手を見み透すかすかのような冷たい笑えみを投げかけた。
「なぜなら、俺もあんたを知ってるからさ。秦チン・賢シエン──それともミハイル・スチュグレフと呼んでやろうか？　同タヴアー志リシ

シ」
「……」
　沈ちん黙もくの中、ただ潮風だけが轟ごう々ごうと、男の煙草から紫し煙えんを運び去ってゆく。
「何処どこの誰だれだい？　そのスチュグレフってのは」
「グルジア・マフィアの〝壊こわし屋〟さ。姿形はモンゴロイドだが、頭ず蓋がい骨こつの中の脳のう味み噌そはスラブ産。青チン雲ワン幇パンの足下を掬すくうチャンスを狙ねらって、この上海でこそこそ動き回ってる工作員だ」
「詳くわしいね」
「まだ青チン雲ワン幇パンにいた頃ころ、そいつを斬るよう仰おおせつかったことが二度ほどある。……最初に斬ったのは影かげ武む者しやで、二人目もいまいち確証がなかった。むしろ俺の勘じゃ、秦チン・賢シエン、あんたが本命と睨にらんでたんだ」
「ふぅん……」
　男は気のない相あい槌づちをうって、吸いさしの煙草を砂すな浜はまに捨てる。
「だがもし、俺がそのスチュグレフだとしたら……まずいよな。二人揃そろって街に戻もどる訳にはいくまい？　どっちか片方は、この場で死体になるしかないぜ」
「俺を死体にする必要はないし、あんたに死体になられても困る。俺は生きてるスチュグレフに用があるんでな」
「同志スチュグレフの都合はお構いなしか？」
　濤タオ羅ローは薄うすく笑って、廃車のフェンダーから腰こしを上げる。
「訳あって、『上海義ぎ肢し公司』を墜おとしたい。
　となると城しろ攻ぜめだ。刀一本じゃ話にならん。……そこで、あんた達の手を借りたい」
　大手企き業ぎようを標的としたテロが頻ひん発ぱつする中、今では数多あまたの企業が、その私有地内に限ってのみ超ちよう法ほう規き

的な自衛手段を取ることが容よう認にんされている。特に上海義肢公司のような後ろ暗い事情のある企業は、私設軍といっても過言ではないほど重武装の保安セクションを保有しているのが常だった。

次なる標的を呉ン・榮ウイン成シンに定めた濤タオ羅ローだったが、敵もまた襲しゆう撃げきを警けい戒かいしてか、あれきり社屋に立て籠こもったまま外出する隙すきを見せようとしない。こうなると強きよう行こう手段に訴うつたえざるを得ないが、ならばそれ相応の兵力を用意するしかない。

そこで濤タオ羅ローが着目したのが、スチュグレフたちロシアン・マフィアの破は壊かい工作員だった。

「ロシアの御ご同どう胞ほうにとっても、悪い話じゃないだろう？青チン雲ワン幇パンの屋台骨をへし折ってやれるチャンスだぞ」

「ああ、大いに結構な話だな」

いつの間にか眼がん眸ぼうに鋭いものを含ふくませながら、スチュグレフは声音の温度を下げる。

「だがその程度のことで、何で我々があんたに頼たよらなきゃならない？」

相手が話に乗ってきた手て応ごたえを感じて、濤タオ羅ローは内心でほくそ笑えむ。

「もういい加減、解わかってもいいんじゃないか。スチュグレフ、この街に来て何年経たつ？

もとから中国人でないあんたが、いくら骨を折ってみたって無む駄だなんだよ。いくら顔を変えて、完かん璧ぺきな広カン東トン語を身につけてもな、それだけじゃ肝かん心じんの所には入り込めない。それが中国人の黒社会ってもんだ」

幇ほう会かいを始めとしたアジアの伝統ある犯罪組織は、その歴史の深さたるや西せい欧おうのシンジケートとは格が違う。永らく鉄の結束を誇ほこってきた彼らは、その独特の嗅きゆう覚かくで巧たくみに異分子を嗅かぎ分けるのだ。そういった機き微びに疎うとい西欧人では、決して牙が城じようを切り崩くずせはしない。

「あんた達には協力が必要なはずだ。この街と青チン雲ワン幇パンの事情に通じた人間の……な」
「それが貴様だ、ってのか？」
「一年ぶりの古巣だが、まだ俺個人で使えるコネは残ってる。あんたらは金と兵隊。こっちは情報と、機材調達のルートを用意する。どうだ？」
　スチュグレフは表情の読めない顔で、遠い水平線を眺ながめている。中国人に似せて作り直した偽いつわりの顔は、それこそ仮面のように動かない。
「……いま上海義肢公司が潰つぶれたら、青チン雲ワン幇パンも終わりだな」
「……」
　濤タオ羅ローは相槌も打たずに、ただ沈黙だけで先を促うながす。
「かれこれ足かけ四年以上、俺は中国人に成りすましている。お前らと同じ物を食って、同じように喋しやべって、振ふる舞まって……そうこうするうちに、お前らの考え方も身に付いた。〝礼、仁、信、義、勇、知〟……中国人が二言目には口に出す大好きな決まり文句の一セット。だよな？」
　スチュグレフの並べた六文字に、思わず濤タオ羅ローは失しつ笑しようする。
「いかにも、小学の六徳だ」
「特にお前らにとっては、親兄弟の絆きずなってのが何よりも大事なはずだ。そして幇会の誓ちかいってのは、血の絆より固いそうじゃないか。
　それをここまで平然と、容よう赦しやなく裏切るなんて……そんな中国人、俺はまだお目にかかったことがねぇ。そんな奴やつを俺は信用してもいいのかね？」
「まさか西洋人のあんたに孝こう悌ていを説かれるとはな」
　飄ひょう々ひょうとした口調とは裏腹に刃やいばの如ごとく鋭するどいスチュグレフの視線を、濤タオ羅ローは冷笑で受け流す。

「いかにもあんたが語るのは、人が人として生きる道。だがな、俺はもう人であることを辞やめた」
「……」
「だからあんた達にも義を尽つくすつもりは毛頭ない。ただ利用させてもらうだけだ。そんな風にあんた達も、俺を使い捨てる気で利用しろ。しち面めん倒どう臭くさいことは考えるな」
「……お前がどこまで堕おちようと勝手だが、俺は地じ獄ごくの底まで付き合う気なんて更さら々さらないぜ」
「なら、慎しん重ちようにな。うまく途と中ちゆう下車することだ」
　すげなく言い捨てた濤タオ羅ローだが、すでにスチュグレフの脳のう裏りの天てん秤びんがどちらに傾かたむいているのかは、確信を持っていた。青チン雲ワン幇パンから裏サイバネティクス市場の覇は権けんを奪だつ取しゆすることは、ロシアン・マフィアの悲願のはずだ。いくら危険な博打ばくちでも、スチュグレフは必ず乗ってくる。
「……本国の方に掛かけ合ってみる。今夜じゅうに返事しよう」
「期待してるよ」
　スチュグレフは踵きびすを返し、立ち去ろうとして―しばらく歩いてから振り向いた。
「お前が俺を狙ねらって殺した二人目だがな、そいつも確かにスチュグレフだった」
「……なに？」
「ドミートリィ・スチュグレフ。俺の弟だ。あのときの復ふく讐しゆうの誓い、忘れたことはない」
「……」
　それだけ言い残すと、スチュグレフは二度と振り返ることなく去っていった。その背中を見送りながら、濤タオ羅ローは凶きよう手しゆとして生きてきた日々に想おもいを馳はせる。
　顧かえりみれば屍しかばねの山。積み上げた怨えん恨こんは数知れず……そんな人生に疲つかれ、厭あきぬだけの価値があったのは、共に瑞ルイ麗リーが生きてくれたからだ。

だから瑞ルイ麗リーのいない世界には、何一つ尊ぶものはない。何もかも壊こわしていい。誰だれ一人ひとり生き残らずとも構わない。

全すべてが供く物もつだ。己おのれ自身も含めて。

「……ねぇ、あにさま？」

「ん？」

いつの間に側そばまで戻もどってきたのか、振り向いた濤タオ羅ローは不安げに彼を見上げる瑞ルイ麗リーと目が合った。

「なんのおはなし、してたの？　いまのおじさん、だれ？」

「何でもない。知らない人だよ」

嘘うそにも何ら疚やましいものは感じない。濤タオ羅ローは普ふ段だんと変わらず朗ほがらかに妹を諭さとした。瑞ルイ麗リーは何も気にしなくていい。

「もうすぐ、何もかも元通りになるからな」

「？」

「じきにもっと巧うまく舞えるようになる。琴ことの弾ひき方も思い出す。……お前は、昔のままの瑞ルイ麗リーに戻るんだ。お前の失ったもの全て、俺がこの手で取り戻す」

「？　？　？」

精せい一いつ杯ぱいの笑顔で妹を慈いつくしみながら、濤タオ羅ローは胸に渦うず巻まく狂きよう気きの熱さを感じていた。

差し向かいの椅い子すに座らせた少女の顔に、呉ン・榮ウイン成シンは息を詰つめてメーキャップブラシの筆先を近づける。

眉まゆよりも睫まつげよりも、雄ゆう弁べんに表情を物語るアイライン。ここに筆を入れるには、精神集中が欠かせない。余計なことを考える余よ裕ゆうはない……

にも拘かかわらず、抑おさえきれない指先の震ふるえ。

〝まだ早い〟　〝何のことだ？〟

〝腹黒い連中の事は放ほうっておいて、経営業務に励はげんでくれ〟

「……ちっ」

忌いま々いましげに舌打ちして、呉ンはパレットとアイラインブラシを机に置いた。

「もういい。やり直しだ。ペトルーシュカ」

苛いら立だたしげな主あるじの言葉に、ペトルーシュカと呼ばれたガイノイドは神しん妙みような手つきで顔を拭ぬぐい、小一時間ほどもかかったメーキャップを落とす。

〝解わからねぇ……劉リユウの奴やつ、いったい何を考えてる？〟

李レイ・天テイエン遠ユエンを殺して寨さい主しゆの座を奪うばい、仇あだ討うちに現れた濤タオ羅ローにその罪を被かぶせる。一挙両得の名案だ。

そのために呉ンは一ひと肌はだ脱ぬいで、結果まんまと寨主殺しの汚お名めいを孔コン濤・タオ羅ローに着せてやった。

だが劉リユウは詰めのチエツク一手メイトに躊ちゆう躇ちよする。いま寨主の死を喧けん伝でんすれば、仇討ちの名目のもと幇会を挙げて孔コンを抹まつ殺さつできるというのに。

〝面子メンツ……だと？　ふざけるなよ劉リユウ……あんた、そういう戯たわ言ごととは一番無む縁えんな奴やつだったろうが〟

だが劉リユウが韜とう晦かいを決め込む以上、呉ンが気を揉もんだところで埒らちはあかない。何もかも、考えるだけ無む駄だだった。

今いるこの部屋は、そんな煩わずらわしい諸もろ々もろから心を解放するために設しつらえたものだというのに……以前なら寝しん食し

よくを忘れて打ち込めた道楽に、今夜も呉ンは没ぼつ頭とうしきれない。

ガイノイドを性欲処理装置としてしか見ない下げ司すな手合いとは違ちがい、呉ンはオールビスク愛好家の流れを汲くむ、真の趣しゆ味み人じんとしてのドールフリークだった。本職ドールマイスターのそれにも劣おとらないこのデザイン工こう房ぼうも、もとは社長室の奥にあった休きゆう憩けい室しつを大改装したものだ。

名うてのハッカーとして鳴らす手合いの大たい概がいがそうであるように、呉ンもまた芸術家肌はだの美意識の持ち主だった。だが彼は、さながらチェスゲームの如ごときネット犯罪の技ぎ巧こうの美学だけでなく、デジタル情報で紡つむぎ上げられた仮想空間にはない、指先で感じ取れる確かな感かん触しよくというものを求めていた。

そんな呉ンの無ぶ聊りようを慰なぐさめるのが、こうしたガイノイドのカスタマイズである。緻ち密みつ可か憐れんな自然物を、見分けがつかぬほど完全に模も倣ほうしてのけるメカトロニクスの構造美は、呉ンの指先と審しん美び眼がんを愉たのしませて止やまない。

実際、『網もう絡らく蠱こ毒どく』の二つ名で世間を騒さわがせていた頃ころも、呉ンは表稼か業ぎようとしてガイノイドデザイナーの看板を下げていた。

そんな呉ンにとって、劉リユウから贈おくられた上海義ぎ肢し公司という玩具おもちやは最高のプレゼントだったと言っていい。幇ほう会かいの経済的、戦略的基き盤ばんという意味合いとはまったく別に、あくまで個人的な趣味の領域でも、呉ンは与あたえられた役職を存分に堪たん能のうしていた。

何一つ不自由ない、満ち足りた毎日。それが、こんな形で脅おびやかされることになろうとは。

樟ジヤンに続き朱チユウとその配下が襲おそわれてから、はや五日。依い然ぜん、凶手孔コン濤・タオ羅ローの行方ゆくえは杳ようとして知れない。

次に狙ねらわれるのが自分だと解わかってはいても、幇会が本ほん

腰ごしを入れて対策を講じない以上、自分の身は自分で護まもるしかない。結局、呉ンは己おのれの居城とも言える上海義肢公司本社ビルから一歩も踏ふみ出さずに毎日を送っていた。

狂きよう言げんでテロリストの犯行予告を捏ねつ造ぞうし、警備体制は大おお幅はばに強化した。だがシステム化された防衛に鉄てつ壁ぺきの二文字は有り得ない。必ず裏をかく手段が存在する。それは他ほかでもない呉ン自身が、かつて第一線の電脳犯罪者だった頃に奉ほうじていた鉄則である。

劉リユウや斌ビンは、いざとなれば持ち前の武芸を頼たのみにして事に臨のぞむつもりかもしれないが、武芸者でない呉ンにその選せん択たく肢しはない。いつ何処どこから襲いかかって来るやも知れぬ暗殺者の脅きよう威いに、ただ震えて待つしか手がないのだ。

ささくれ立った神経をなお刺し激げきするかのように、秘書室からのコール音が鳴り響ひびく。

「……何だ!?」

呉ンがこの部屋にいる間は、社用の類は一切取り次がぬよう再三言い含ふくめてある。苛立ちを隠さぬ呉ンの応答に、恐きよう縮しゆくする秘書の声。

『それが……斌ビン・偉ワイ信ソン氏より遣つかいの方なのですが……』

「……」

青チン雲ワン幇パンがらみの来客となれば、さしもの呉ンも捨て置くわけにはいかない。

「いいだろう。通せ」

正直なところ、劉リユウと秘密を共有する立場にある呉ンにとっては、幇会の人間とはなるべく顔を合わさずにおきたかった。とりわけ盟証斌ビンの手の者ともなれば尚なお更さらだ。

〝劉リユウがチンタラやってるせいで、斌ビンの奴やつまで動き出しやがった……〟

やがて工房へと現れたのは、鏡映しのような容姿をした二人組のサ

イボーグだった。
「元ユン兄弟か……」
「おお久久ししゅゅううごござざいいまますす。呉ン香香主主」
　兄の元ユン家・カー英イン、弟の元ユン尚・ソー英イン。合わせて『元氏双そう俠きよう』の異名で恐おそれられている双ふた子ごのサイボーグである。幇会内でも名の知れた使い手だ。
「お前ら、いつから伝言屋なんぞ務めるようになったんだ？」
「否いや、左様な些さ事じではありませぬ」
　拱きよう手しゆ抱ほう拳けんの礼を崩くずさぬまま、淡泊に否定する家カー英イン。その後に続く言葉を、尚ソー英インが兄とまったく同じ声音で引き継つぐ。
「我ら兄弟、斌ビン盟証の下げ知ちを受け、呉ン香主の身辺をお護まもりすべく馳はせ参じた次し第だい」
「護る、だぁ？」
　呆あきれと焦あせりの相半ばする苛いら立だちが、呉ンの声を裏返らせる。だが双子のサイボーグ兄弟は動じることなく、なおも淡たん々たんと先を続ける。
「不忠の奸かん賊ぞく孔コン濤・タオ羅ローが、青チン雲ワン幇パン香主のお歴々を脅かしております。御おん身みは代だい替たいなき幇会の要かなめなれば、用心にも重ねた用心を」
「けっ……」
　斌ビンの腹の内は読めている。護衛などと名目を立てながら、その実状は呉ンの周辺に目を光らせる心しん算さんだ。劉リユウに不審を懐いだきはじめた斌ビンであれば、真っ先に劉リユウと繋がりそうな呉ンの動きも牽けん制せいしようとするだろう。
〝冗じよう談だんじゃねぇぞ、畜ちく生しよう。他人ひと様さまの芝しば生ふを土足で荒あらそうってのか〟
　胸の内で舌打ちする呉ンの苛立ちも、当然、兄弟には通じていない。
「本日より何処いずこなりともお供させて頂きます故、どうか……」

「拳けん士し風情が粋いきがってくれるなぁ。おい」
「は……」
　呉ンは不平を露あらわにして双子を睨ねめつけた。斌ビンの周しゆう到とうさもさることながら、この兄弟の白々しいほどに格式張った物言いもまた、とりわけ呉ンの癪しやくに障さわる。
「お前らの筆頭株だった羅ら刹せつ太たい后こうでさえ、孔コンの奴にはまんまとブチ殺されたってのによ……この期ごに及およんでサイバネ外家の皆みなさんは、身体からだを張って俺を護って下さるってか。有り難がたくって涙なみだが出るね」
「……」
　あからさまな呉ンの罵ば倒とうを、しかし双侠は眉まゆ一つ動かさず聞き流す。
「拳士の護衛なんぞ当てにするかよ。一いつ切さい合がつ切さい収まりがつくまで、俺はこのビルから一歩も出るつもりはねぇ。お前らの世話にはならねぇよ」
「でですすがが」
「あぁ解わかってる解ってるって。ガキの遣つかいじゃねぇってんだろ？　帰れと言われてはいそうですかと引き払はらったんじゃ、盟証さまに叱しかられちまうもんな。……警備課に社内の通行証を発行させるから取りに行け。レベルＡ２までは出入り自由だ。
　ただし業務妨ぼう害がいをやらかしたら即そつ刻こくビルから叩たたき出す。あと俺の目につく場所にもしゃしゃり出て来るな」
「……」
　一切の表情が窺うかがえない電子義眼の双そう眸ぼうで、二人のサイボーグ拳士は呉ンを見つめる。だがその程度で譲歩する呉ンではない。
「ここの警備は万ばん全ぜんだ。お前らなんぞが気を揉もむまでもねぇ。いいからカフェラウンジで油でも売ってな」
「……は。承知致いたしました」
　呉ンの予想に反して、双侠は妙みようにしおらしく我がを折った。

意地を通さぬところをみると、さては徒いたずらに呉ンを刺激しないよう斌ビンからも言い含ふくめられていたのだろうか。

〝どいつもこいつも腹の探さぐり合い……まったく、よくもここまで野良犬一匹ぴきが引っかき回してくれたもんだ〟

深く溜ため息をついて、呉ンは目の前に鎮ちん座ざする人形、ペトルーシュカに注意を戻もどす。

彼のコレクションの中でもとりわけ手をかけた、最も貴重なガイノイド。意い匠しようを凝こらしたボディの機構は、呉ンの最高傑けつ作さくと言っていい。

「困ったもんだな。お前の兄貴は」

「……？」

意味不明な問いかけに小首を傾かしげるペトルーシュカ。そのさりげない素そ朴ぼくな仕草は、情じよう緒ちよエミュレートならではの鼻につくあざとさが微み塵じんもない。

以前の呉ンは、人形のこの手の〝演技〟については否定的だった。生きつ粋すいのビスクドール愛好家である彼から見れば、わざわざガイノイドに感情スクリプトなど組み込んで人間の真似まねをさせるなど無ぶ粋すいの極きわみである。まして本物の人間から魂こん魄ぱくを転写するなど愚ぐの骨こつ頂ちようだ。

人形は人形のままでいい。エナメルの眼めのコッペリアは、ただそのままで美しいのだから。

だがこの『左さ道どう鉗かん子し』の〝作品〟に触ふれて、呉ンはそんな持論を改める気になっていた。呉ンにしてみれば劉リユウの酔すい狂きように付き合ったというだけの乱らん痴ち気き騒さわぎに過ぎなかったが、いざ私有してみると、これはこれでまた趣おもむきがある。

何と言っても総容量の二〇％に及ぶ大量の魂魄ソースを、あの『左道鉗子』が手ずから転写したガイノイドだ。その有機メモリには値を付けられないほどの価値がある。巷ちまたに溢あふれる違い法ほうガイノイドとは格が違ちがうのも当然であろう。

そういった意味でも、ペトルーシュカは呉ンのコレクター精神に訴うつたえる逸いつ品ぴんといえた。
「もしかしたらお前には、とっておきの花はな舞ぶ台たいに立ってもらうかもしれないぜ」
「……？」
孔コン瑞・ルイ麗リーの脳から魂魄転写されたガイノイドに対して、孔コンの懐く関心は妄もう執しゆうの域に達している。
〝奴やつの狙ねらいは、やはり……〟
もし万が一、孔コン自らが呉ンの前に立ちはだかることになったときは……あるいはそこが、付け入る隙すきになるかもしれない。

呉ンに指示された通り、警備課のフロアを目指して廊ろう下かを歩みながら、尚ソー英インは先を行く兄の家カー英インに声をかけた。
「兄者……」
「言うな。〝羅刹太后〟の朱チユウどのが不覚をとった以上、我ら外家拳士に矜きよう持じを語る弁はない」
振ふり向きもせず、家カー英インは硬かたい口調で先回りした返答を返す。
「社屋内に留とどまれただけでも良しとせねば。後は我らなりに出来る形でこの砦とりでを護り抜ぬくのみ」
呉ンの嘲ちよう弄ろうに内心穏おだやかならぬものを押して忍しのびながら、兄弟は憮ぶ然ぜんと歩みを進める。
「呉ン香主がここを動かぬのであれば、孔コン濤・タオ羅ローは必ずや乗り込んでくる。あ奴は、そういう男だ」
「あの孔コンと、ついに矛ほこを交えるか……」
この兄弟、外家拳士にありながら、内家気功派の濤タオ羅ローとも交友を結んでいた数少ない好漢たちである。幇ほう会かいの許もとに義兄弟の契ちぎりを交かわせば、流派の違ちがいなど些さ事じ同

然……かつては酒を酌くみ交わしながら、共に意気投合したものだ。
「未いまだに解げせぬ。あれだけの益荒男ますらおが、何を思って斯か様ような所行を……」
「ああ、それよ。兄者は聞いておらぬか？　この一件、孔コンにとっては妹の仇あだ討うちだという噂うわさ」
「……滅めつ多たなことを言うでない。根も葉もない風聞だ」
　言葉では尚ソー英インを戒いましめながら、だが家カー英インの表情もまた苦虫を嚙かみつぶしたように渋しぶかった。兄が思うところもまた弟と変わらない。
　そう察した尚ソー英インは、敢あえて先を続ける。
「兄者も見たであろう？　呉ンどのの連れていたガイノイド、あれは尋じん常じような人形の挙きよ措そではない。奴の妹が、劉リユウ副ふく寨さい主しゆ率ひきいる香主郎ろう党とうの人形のために供されたという話、もし本当だとすれば……」
「言うな」
　今度こそ家カー英インは断固たる声で一いつ喝かつした。
「もし孔コンに報ほう仇きゆうの義が立つというのであれば、それなりに筋の通しようがあろう。なのにあ奴は口上を述べ立てるでもなく、ただ餓が狼ろうの如ごとく血を求めるばかり……いかな仕し儀ぎがあるにせよ、いま明らかなのは孔コンの咎とがのみ。同どう胞ほう殺しの不義不忠は見過ごせぬ」
「む……」
「それとも尚ソー英イン、おぬし、いっそ副寨主が孔コンの刃やいばにかかれば幸いとまで言いたいか？」
「……馬ば鹿かな。俺は何も……」
「それでいい」
　言下に否定した弟へと、家カー英インは含ふくみを込めて重々しく頷うなずく。
「俺とてな、近ちか頃ごろの鬼き眼がん麗れい人じんの専横ぶりは目に余る。李レイ寨主の檄げきあらば今すぐにでも彼奴きやつの首を獲

とりに行く」
「兄者……」
「されど刃は、たとえ没も義ぎ道どうに向けたものであろうと、それを糺ただす義が伴って初めて誅ちゆうとなる。ただ段だん平びらを振りかざすだけで斬ざん奸かんの名目が立つならば、誰だれも徳など説こうとはせん」
「……うむ」
「ゆめ忘れるな。我らは義兄弟の契りで結ばれた幇の輩ともがら。牙で我がを通す野犬の群とは違ちがうのだ。──それをあまねく知らしめるためにも、孔コンの奴めは斬きらねばならん」
「……気が重いな」
「うむ……」
　突つき詰つめれば双そう俠きようの胸中は、その一点に帰結するのであった。

　闇やみの中、埃ほこりの臭においの立ちこめる空気が、沈ちん黙もくに澱よどんでいる。時の止まったような沈黙の中……やおら静せい寂じやくを破ったのは、重い引き戸を滑すべらせる軋きしりだった。
　重油の臭しゆう気きを孕はらんだ河の風と、曙しよ光こうを間近に控ひかえた淡あわい黎れい明めいが、永らく閉へい鎖させられていたその倉庫に流れ込む。細く開かれた搬はん入にゆう口の外は、黄浦江に臨む南市・紹ヂヤオ寧ニン碼マー頭トウの岸がん壁ぺきだった。
　流れ込む外気に攪かく拌はんされて埃の舞まい踊おどる薄うす闇やみを、さらにマグライトの光線が真っ二つに切り裂さく。
「こっちです、兄貴。足あし下もとに気をつけて」
　押し殺した声に続く足音は、ふたつ。ライトの光源は闇の中を漂ただよい動いた挙げ句、倉庫の奥の壁かべ際ぎわで止まった。
「……こいつが？」

高さだけで身の丈たけを上回る木箱が五つ、防水シートを被かぶせられて整列している。ラベルも何もない生木の側面に手を触ふれながら、そう低く問うのは『紫し電でん掌しよう』こと孔コン濤・タオ羅ローの声だった。

「型落ちの新古品ですが、マジモンの軍用ですよ。武装・弾だん薬やくともフル装備のまま揃そろってます。戦争だっておっ始められますよ」

かたや得意げに嘯うそぶく案内役の若者は、面つら構がまえばかりは一いつ端ぱしの悪党だが、しばしば濤タオ羅ローを窺うかがい見る眼まな差ざしには純じゆん朴ぼくな畏い敬けいの念が見て取れる。

梁リヤン力・リク為ウアイ。青チン雲ワン幇パンに属する末まつ端たんの構成員だ。普ふ段だんは故売屋や情報屋の真ま似ね事ごとで糊こ口こうを凌しのいでいる三さん下しただが、時には青チン雲ワン幇パンの使い走りを務めることもある。濤タオ羅ローも幇会の凶きよう手しゆを務めていた頃ころ、何度か連れん絡らく要員として使ったことがあった。

「こいつらは人民軍の格納庫に眠ねむってただけの新品でしてね。それでも書類上じゃ、耐たい用よう年数を超こえたため廃はい棄き処分、ってわけですよ。あとは製造番号だけ打ち直して、南米かアフリカに転売すれば……軍部のお偉えら方がたも義ぎ肢し公司も、いい小こ遣づかい稼かせぎになるわけです」

「役人絡がらみの横流しに手を出したのか？　梁リヤン」

「こいつらはこの倉庫に隠かくしたまんま、あと三ヵ月は寝ねかしておく手て筈はずなんです。消えても暫しばらくは誰も気付きやしませんて。

あとはそれから、ソフトの類たぐいっすけど……」

梁リヤンはジャンバーの懐ふところをまさぐって、二枚のメモリカードを取り出した。

「こっちがスラスト・ヴィーグルの割りインター込みセプトキャンセラー。こいつをインストールしたＳＶなら、どこだろうと好き放題に

飛び回れます。
　それとコイツ……今回、いちばん手に入れるのが厄やつ介かいだった代しろ物ものですがね」
　そう言って梁リヤンはもう一枚、赤いテープでマーキングされたメモリカードを濤タオ羅ローに渡わたす。
「むかし呉ンの組んだ〝網もう絡らく蠱こ毒どく〟です。ネットで野生化して自己進化した奴やつを、さらに俺のダチがリライトしてます。最初の挙動はただの防ぼう御ぎよプログラムですけど、防ぼう壁へきを崩くずされた途と端たんに殺人ワームに化ける仕組みだそうです。感染したハードは物理的に壊こわすしかなくなるんで、気をつけて扱あつかって下さいね」
　殺人ワーム・プログラム……ネットワークが普ふ及きゆうし、その利用者の大半がインプラント神経端たん子しを介かいしたダイレクト結線インターフェイスを使用する今日、都市攻こう撃げきに於おいてはかつてのＢＣ兵器に相当する威い力りよくを発揮する。
　旧来の大量殺さつ戮りく兵器よりはるかに安価で、しかも地理的な制約を一いつ切さい受けない点、標的を恣し意い的に選別して絞しぼり込むことが可能な点など、とりわけテロリストにとっては至いたれり尽つくせりの攻撃手段だ。
「すまんな、梁リヤン。色々と苦労をかけた」
「なぁにこの程度、お安い御ご用ようですって」
　軽けい薄はくに笑ってから、梁リヤンはやおら表情を神しん妙みようにに改める。
「こいつで、いよいよ……討うって出るんですか？」
「……何？」
「劉リユウの一派を潰つぶすんでしょう？　兄貴が上海に戻もどって、劉リユウの取り巻きをブッ殺して廻まわってるって聞いて、あぁ、やっぱりなって思ったんですよ」
「……お前が知るべきことじゃない」
　濤タオ羅ローが表情を硬かたくする一方で、梁リヤンはますます口

調に熱を込める。
「誤ご魔ま化かさなくてもいいんです。俺たちだって気持ちは同じだ。鬼き眼がんのヤロウが副寨さい主しゆになってから、青チン雲ワン幇パンは滅め茶ちや苦く茶ちやです。戦せん闘とうサイボーグばかりがのさばって外げ道どう働きの連発ですよ」
「……」
「李レイ寨主は病気になったきり動けねぇって、幇会は鬼眼の好き放題です。最近は寨主にお目通り叶かなった奴さえいない。……ひょっとしたら、李レイ寨主ももう生きちゃいねぇんじゃねぇかって噂うわさする連中もいますよ。
　もうみんな我が慢まんの限界なんだ。だから兄貴、どうか手伝わせてください。一声かけりゃ兵隊も揃います」
　真っ直すぐに見つめてくる梁リヤンの視線を、濤タオ羅ローは正視できずに顔を背そむける。
「俺は……そんな器うつわじゃ、ない」
「いいや、孔コン兄貴の威い名めいなら上海中に轟とどろいてます。もう青チン雲ワン幇パンを立て直せるのは、兄貴、あんたしかいねぇんです……」
　そこまで捲まくし立ててから、はたと梁リヤンは口を噤つぐむ。間近に迫せまってくるディーゼルエンジンの排はい気き音おんを聞き留めたのだろう。
「やべぇ、兄貴、隠れないと」
「いや……心配ない」
　梁リヤンと違ちがって、濤タオ羅ローには相手が解わかっている。まさかこうも早く現れるとは聞いていなかったが。
　エンジン音は倉庫の表で止まり、半開きだった倉庫の搬はん入にゆう口こうが、外から全開に引き開けられる。徐じよ行こうのまま、我わが物顔で倉庫内に乗り入れてくるハーフトラック。
　ハロゲン灯の射るようなアッパーライトが、真っ向から梁リヤンと濤タオ羅ローの目を眩くらませる。その光源の背後から、悠ゆう然ぜ

んと歩み寄る複数の人ひと影かげ。
「兄貴、こ、こいつら一体……」
　狼狽する梁リヤンに向けて、スチュグレフは邪よこしまに歪ゆがんだ笑えみを投げかけた。
「おイ邪ズ魔ヴだイっーたニかチなイ？　同タヴアー志リシシ」
　意味は解らずとも聞き違えようのないロシア語のイントネーション。梁リヤンの表情が驚おどろきに凍こおる。
　それ以上のリアクションを梁リヤンが起こすより早く、濤タオ羅ローは行動に移っていた。
　立ち竦すくむ梁リヤンの後頭部に素す早ばやく手を伸のばし、玉ぎよく枕ちんの穴けつ道どうを指先で一ひと突つき。途と端たんに意識を失い、昏こん倒とうするところを抱だき留とめて、今度は胸の窮きゆう絞こう穴けつを突つく。
　致ち命めい的な勁けい絡らくを封じられて循環器系が麻痺した梁リヤンは、意識を失ったまま酸欠で絶命した。先に玉枕を突いて眠ねむらせたのは、疑うことすら知らなかった愚おろかな心しん酔すい者しやに対する、濤タオ羅ローなりの慈じ悲ひだ。
「指ひとつ閃ひらめけば地じ獄ごく行き……流石さすがは名にしおう凶きよう手しゆだけのことはあるな」
　さも感心した風なスチュグレフを、濤タオ羅ローは怒いかりに凍こごえた目で一いち瞥べつした。
「あんた達がいきなり現れなければ、なにも殺すことはなかった」
「そういう寝ね言ごとを言い出すかと思って、口くち封ふうじに出向いたわけよ」
　スチュグレフは冷たく笑いながら、後ろ手に隠かくし持っていた自動拳けん銃じゆうからサイレンサーを外し、安全装置をかけてホルスターに戻す。
「もっとも、あんたの方が手は早かったがな」
　二人のやり取りを余所よそに、スチュグレフの部下たち……いずれも容姿は東洋人を擬ぎ装そうしているが、まぎれもなくロシア人……

は、梁リヤンが濤タオ羅ローに見せた木箱のひとつにバールを揮ふるい、さっそく開けにかかっていた。
　中から現れたのは、球体をやや撓たわめたラグビーボール型の巨きよ大だいなオブジェである。
　木き枠わくを組んで固定されたその直径は、大人の背せ丈たけにやや劣おとる程度。塗と装そうも表面処理もない地金剝むき出しのメタリックな質感は、ただ無骨に機能性だけを要求した、軍用機械ならではの冷れい酷こくな没ぼつ個こ性せいぶりを醸かもしている。
「さて、専門家に検あらためてもらおうか」
　梁リヤンの死体をハーフトラックへと運び込んだ男が、代わりに古式ゆかしい木製の樽たるを荷台から担かつぎ下ろす。樽の側面に捺おされたキリル文字の焼き印に、濤タオ羅ローが眉まゆを顰ひそめた。
「……キャビア？」
「おうよ。黒海産の最高級品だ。一口どうだい？」
　本気とも冗じよう談だんともつかぬ台詞せりふを言いながら、スチュグレフは樽の蓋ふたにバールを突っ込んで開かい封ふうすると、タールのように黒く波打つ内容物に何の躊ちゆう躇ちよもなく手を突っ込む。
「……」
　しばし樽の底をまさぐってからスチュグレフが引っぱり出したのは、ポリ袋ぶくろで厳重に梱こん包ぽうされたバスケットボール大の包みだった。
「こいつは誰だれだ？」
　スチュグレフが配下の一人に訊きくと、問われた男は樽のロットナンバーを確かく認にんし、「ミーシャですね」と応じた。
「起こしますか？」
「ああ、用意しろ」
　一匙さじで数千元はするであろう高級キャビアを惜おしげもなく床ゆかにこぼしながら、スチュグレフはポリ袋の梱包を解き、内容物を取り出した。

ドーム状の金属容器の外周に、やはり金属製のフレキシブルチューブが蜷局とぐろを巻いている。完フ全ル義ボ体ー化グボディの標準規格に合わせた脳ポッド……いわば極限までコンパクトにモジュール化された〝人間〟である。ドーム部分は脳を収めた対ショック構造のポッドと生命維い持じ装置、周囲のチューブには脊せき椎ついの中ちゆう枢すう神しん経けい嚢のうが収まっている。

「……ずいぶんと無茶な密入国だな」

「車のトランクに隠れて越えつ境きようするよりは、よほど快適だと思うがね」

かたやスチュグレフの下げ知ちを受けた男は、トラックのダッシュボードからモバイルＰＣとハンディカムを持ち出してきた。

巻き取り式のケーブルを引き出すと、梱包を解かれた脳ポッドにＰＣ、さらにその先にハンディカムという順番で数珠じゆず繋つなぎに接続していく。

「……ＯＫです」

手て渡わたされたハンディカムの電源を入れ、スチュグレフはレンズを覗のぞきこみながらマイクに向かって語りかけた。

「おはよう同志ミーシャ。お目覚めの時間だぜ」

すると、モバイルＰＣのスピーカーがぶつぶつとノイズめいた呟つぶやきを漏もらした後、ロシア語で喋しやべり始める。

『……ああ、見えてる。あんたがミハイルか？』

「そうだ。ようこそ上海へ。空の旅はどうだった？」

『最低だ。ヴァシリの野や郎ろう、よりによって俺がもう一〇〇回は見てるポルノに繋つなぎやがって……』

声音こそ中性的な合成音だが、語調だけが妙みように生々しい。この脳……ミーシャの本来の口調なのだろう。

『もうＶＲはうんざりだ。はやくリアルな手足を動かしたい。今回のボディはどこだい？』

「いま見せる。確かめてくれ」

スチュグレフはハンディカムを木箱の中のアサルトギアに向ける。

途と端たん、スピーカーから洩もれた甲かん高だかいノイズは……どうやら喝かつ采さいの口笛だったらしい。
『三七型重機動甲こう装そうか……こいつぁいい。火力と機動力はピカイチだ。短時間の作戦行動なら絶好のボディだな。……もう少し寄ってみてくれ』
　ミーシャに言われるがまま、スチュグレフはアサルトギアに歩み寄り、ハンディカムの画角を変えて細部を撮さつ影えいする。
『……よし。あとは中身だ。端たん末まつをメンテナンスポートに繋いでくれ』
　指示された通り、スチュグレフはモバイルＰＣのスロットとアサルトギアの外部端たん子しをケーブルで接続した。
　即そく座ざにパフォーマンスチェックが始まり、ＰＣの液えき晶しよう画面上にアサルトギアの詳しよう細さいスペックが表示される。
　むろんスチュグレフが目で追って把は握あくするより、データをダイレクトに認にん識しきするミーシャの脳の方が速い。合成音ながらも喜びも露あらわな含ふくみ笑いが、スピーカーを軋きしらせる。
『……クックック。痺しびれるねぇ。五・五六㎜多フア連ラン装クスチェーンガンにスマート・グレネード、高周波振しん動どうバイスときやがった。第一種突とつ撃げき装備じゃねぇか。これなら首相官かん邸ていにだって殴なぐり込んでやるぜ。
　オーケイ。すぐにも繋いでくれ。早速このボディを試してみたい』
「おいおい、まだＶＲ酔よいが醒さめてないだろう？　麻ま酔すいが抜ぬけるのを待てよ」
『舐なめてくれるなよ。こちとら一五の春から肉のボディを捨ててんだ。目ェ醒ましてから五分でフランカーを飛ばしたこともあるんだぜ。
　経エコ済ノミ運ーモ転ードならバッテリーも保もつ。残り五体、そのトラックに積むんだろ？　フォークリフトの代理ぐらいはしてやるよ。いい馴ならしになる』
「ま、あんたがそう言うなら……」

スチュグレフは外部ハンドルを操作してアサルトギアの背面にある緊きん急きゆうハッチを開くと、開放されたハッチの下から露わになったソケットにミーシャの脳ポッドを塡はめ込んだ。

アサルトギアの動力が目覚め、滑なめらかな外装ベアリングが柘榴ざくろのようにはぜ割れて展開し、内側に折りたたまれていた四し肢しが伸のび上がる。

光学センサーの集中したターレットが回転し、周囲の空間を認識する。起立する二足歩行の姿勢制せい御ぎよに危あぶなげなところはない。自負するだけあって、ミーシャは身体からだの乗り換かえには馴れているらしい。

稼か働どう中のアサルトギアは、その威い容ようだけで見る者を畏い怖ふせしめる。無骨な金属の構造物が生物的な素す早ばやさと滑なめらかさで動き回る様は、恐きよう竜りゆう並なみに巨きよ大だい進化した節足動物を思わせる。

もはやモンスターと呼ぶしかない姿形にも拘かかわらず、それは人間の脳を備え、ボルトの一本に至るまで身体として一体化した、まぎれもない〝ヒト〟の一形態なのだ。

「どうだい紫電掌の……」

駆く動どう音おんも勇ましく闊かつ歩ぽするアサルトギアの姿に惚ほれ惚ぼれと見入るスチュグレフは、心ここにあらずといった口調である。既すでに彼の脳のう裏りには、襲しゆう撃げき作戦の成功が絵図面として描えがかれているのだろう。

「あんたの電でん磁じ発はつ勁けいってやつは、コイツとやり合っても勝ちを取れるもんかね？」

濤タオ羅ローは無言のまま首を横に振ふった。こんな火力の塊かたまりのような化け物が相手では、ロックオンされた時点で肉片も残さず粉ふん砕さいされる。近づく隙すきさえ与あたえられまい。

ただし裏を返すなら、照準に捕ほ捉そくされない限りどうとでもなる。つまりは戦い方次し第だいということだが、今そんな事を言い張ってロシア人たちを挑ちよう発はつする必要もない。事が済むま

で、この連中は重要な戦力なのだ。
「他ほかのパイロットもすぐに覚かく醒せいさせる。コンディションの調整には半日もあれば充じゆう分ぶんだ。決行は予定通り今夜に」
「わかった」
　ミーシャのアサルトギアはマニピュレーターを駆く使しし、アンバランスなシルエットとは裏腹な安定感と力強さで、次々と木箱をトラックの荷台に積み込んでいく。後日この倉庫を検あらためた青チン雲ワン幇パンの人間は顔色をなくすだろう。盗人ぬすつとの痕こん跡せきは、床ゆかについたキャビアの染しみだけだ。
「今のうちに休んでおきな。生身のあんたには休息が必要だろ？」
「……そうさせてもらおうか」
　濤タオ羅ローは撤てつ収しゆうの準備を進めるロシア人たちに背を向けて、独り倉庫を出ていった。ふと、自ら手にかけた梁リヤンを思い、遣い骸がいをロシア人から取り戻もどしたい衝しよう動どうに駆られたが……今いま更さら、そんな感傷を懐いだいたところで何の意味もない。
　瑞ルイ麗リーの魂たましいを賭かけたこの戦いのために、人の心を捨てて鬼おにになると、そう決めたのは他ならぬ自分自身ではないか。
　曙しよ光こうを浴びて虹にじ色いろに染まる黄浦江をしばし眺ながめた後、濤タオ羅ローは足早に岸がん壁ぺきを後にした。

　また上海の街に夜が訪おとずれる。だが今夜がいつになく熱い夜になることは、まだ誰だれにも知れてはいない。
　短い仮か眠みんから醒めた後、導引法で内息を整えているうちに、ロシア人たちと落ち合う刻限はすぐ間近にやってきた。
　近代兵器を山ほど抱かかえていくスチュグレフ達に比べれば、濤タオ羅ローには準備というほどの準備はない。倭わ刀とうの目め釘くぎ

を改め、柄巻を固く締しめ直すと、それだけで用意は整った。
「それじゃ、また出かけてくる」
　形ばかりの耐たい環かん境きようコートに袖そでを通して、濤タオ羅ローは壁かべ際ぎわに踞うずくまる瑞ルイ麗リーに声をかける。
「危ないから外には出ちゃいけない。それと、ここにある警報機が鳴ったら、誰かが来る徴しるしだ。すぐにどこかに隠かくれること。いいね」
　いつもなら素す直なおに頷くはずの瑞ルイ麗リーだが、なぜか今夜は背中を向けたきり返事をしない。
「……瑞ルイ麗リー？」
　まさか聞こえていないんだろうか。それとも反応できないのか？途端に濤タオ羅ローの中で不安が膨ふくれ上がる。今の瑞ルイ麗リーには何が起こっても不思議はない。彼女の存在そのものが奇き跡せきと言っていいほど危ういものなのだ。
　恐おそる恐る正面に廻まわって覗のぞき込むと……彼女は故障したわけでも、何か異常をきたしたわけでもなく、ただむくれ顔でそっぽを向いているだけだった。
「あにさま、ぜんぜんルイリとあそんでくれない」
　何のことはない、瑞ルイ麗リーは子供っぽい恪りん気きで退たい屈くつを訴うつたえていただけだった。安あん堵ど と、そんな妹の幼い反応を慈しむ気持ちが濤タオ羅ローの緊きん張ちようをほぐす。
「ごめんよ。でも、今夜も大事な用事があるんだ」
　細い首に無理をかけないよう、小さな頭をそっと撫なでながら、濤タオ羅ローは誠意を込めて諭さとした。
「今夜は瑞ルイ麗リーのために特別なお土産みやげがあるよ。帰ってきたら、いっぱい話をしよう。いろんなことをして遊ぼう」
「ほんとう？」
「ああ。今夜、俺が帰って来たら……瑞ルイ麗リーは、もっといろんな事を楽しいと思えるようになる。いろんな話ができるようになる。また一歩、もとの瑞ルイ麗リーに近づけてあげられるよ。

だからそれまで、ここでじっとして待っててくれ。いいね？」
「……うん」
確実に安全を期するなら、今ここで瑞ルイ麗リーの動力を落として待機状態にしていけばいい。ガイノイドのパワーボタンは項うなじの皮ひ膚ふの裏側にある。盆ぼんの窪くぼを強く押し込むだけでいい。
機能を凍とう結けつした状態でどこかに隠してしまえば、彼女自身がトラブルを引き起こす恐れはなくなる。
だが、そんな風に彼女を人形然として扱あつかうことに、濤タオ羅ローは気が咎とがめた。今こうして潑はつ剌らつと言葉を交かわしている妹が、また身じろぎもせず冷え切った、ただの機械人形の姿に戻るというのは……たとえ一時的なこととはいえ、まるでもう一度彼女を殺してしまうようではないか。
今の瑞ルイ麗リーの肉体は、生命なき愛あい玩がん人形のものでしかない。だがそれは濤タオ羅ローにとっては―愚おろかしいことではあるが―出来うる限り目を背そむけたい現実なのだ。
「それじゃあ、行ってくる」
今夜、生きて戻った時には……またひとつ、瑞ルイ麗リーの魂の欠片かけらを持ち帰る。
次に彼女が思い出すのは何だろうか。舞ぶ楽がくの技芸かもしれない。貞てい淑しゆくな気品かもしれない。いつも兄をからかっては困らせた、目から鼻へ抜ぬけるような機知かもしれない。
そんな風にして少しずつ、瑞ルイ麗リーは元に戻っていく。そんな行く末に想おもいを馳はせるだけで、濤タオ羅ローの胸には温かいものが広がる
廟びようを出しなに、濤タオ羅ローは入り口の周囲に配置した動体センサーを確かく認にんした。巧たくみに隠いん匿とくされた三機のセンサーは、よほど注意深く捜さない限り見つけられまい。
もし何者かが侵しん入にゆうしようとしても、中の瑞ルイ麗リーは先んじて異常を知ることができる。
もう少し厳重な防ぼう御ぎよ策さくを講じたいところではあるが、

あまり剣けん呑のんなトラップを配置すると、万が一にも瑞ルイ麗リーが作動させてしまう危険があった。

出来ることなら、あまり長く瑞ルイ麗リーを独りにしておきたくないが……今夜の戦いの展開は予断を許さない。局面ごとに臨機応変の判断を迫せまられる乱戦となるだろう。

「……待ってろよ。瑞ルイ麗リー」

独り、誰だれにともなく呟つぶやくと、濤タオ羅ローは死に絶えた街の夜よ闇やみへと消えていった。

濤タオ羅ローが去った後、瑞ルイ麗リーは海辺から拾ってきた金属チューブや、腕うで輪わの鈴すずを玩具おもちやにして漫まん然ぜんと時を過ごした。

独り遊びはつまらない。それでも兄の言いつけは絶対だ。

いい子にしていれば必ず帰ってきてくれると、兄はいつも約束してくれた。だから瑞ルイ麗リーはいつも待ち続けた。広いお屋や敷しきで、独りぼっちで……

そう、あの頃ころの彼女が暮らしていたのは、ここではない、どこか別の場所。

時折、水面みなもから浮うかび上がるように蘇よみがえる記き憶おくの断片がある。それはどこかの景色であったり、誰かの面おも影かげであったり、いずれにせよひどく朧おぼろ気げで心こころ許もとない。

それでも、とみに思うのは──そういった人や景色と向き合っていた自分は、今の自分とは何かが大きく異なっていた気がする。

「……」

しかし今の彼女は、なお深く自省を続けるほどの関心も根気も持ち合わせていなかった。漠ばく然ぜんとした感かん慨がいに飽あきると、瑞ルイ麗リーはまた腕輪や髪かみ飾かざりや服の裾すそを手て慰

なぐさみにしながら暇ひまを潰つぶしはじめた。
　そうやって、どれほどの時間を過ごした後だったろうか。
　ゆっくりと床ゆかに散った瓦が礫れきを踏ふみ砕くだく足音を聞きとがめ、はたと瑞ルイ麗リーは顔を上げた。廟内に、誰かがいる。
「？」
　もし誰かが来ても、そのときは先に瑞ルイ麗リーに解わかる仕組みになっていると、出掛けに濤タオ羅ローは言っていたのに……
「こんばんは。瑞ルイ麗リー」
　その男の眼まな差ざしは優やさしく親しげで、まるで瑞ルイ麗リーのことを見知っているかのようだった。
「……？」
「俺のことは憶おぼえているかい？」
「？　？　？」
　言われてみれば、確かに見覚えがあるような気がしなくもない。
「う～んと、ねぇ……」
　少女は男の貌かおにしげしげと見入った挙げ句、はたと手を打った。
「そうだっ！　あにさまのおともだちっ！」
　そう、覚えている。この人もよく屋や敷しきに遊びに来た。いつも濤タオ羅ローと親しく話していたものだ。
「……うんと、ぇえっと……リュウさん、だよね？」
「……そうだよ。瑞ルイ麗リー。
　今の君にとっては、俺もその程度の存在でしかないんだね」
　どこか遠くに視線を飛ばして、男は苦く笑しようする。その微び笑しようがなぜか寂さびしげなものに思えて、途端たんに瑞ルイ麗リーは申し訳なくなる。
「……ごめんなさい。でもね、もうすぐルイリは、いろんなことといっぱいおもいだすんだって。あにさまがそういってた。そしたらリュウさんのことも、もっとちゃんと、おもいだすとおもうの」
「そうか。それは楽しみだ」

　男は頷うなずいて、まるで瑞ルイ麗リーを励はげますように明るい声音で続けた。
「幸せな想おもい出が、たくさん見つかるといいな」
「うん！」
　男が半歩脇わきへ寄る。すると瑞ルイ麗リーは、その彼の背後にもう一人、誰か別の人間が付き従っていたのに気がついた。
　薄暗い廟の中にいてなお眩まぶしいほどに輝く白緞どん子すの旗チヤイナ袍ドレスが、瑞ルイ麗リーの目を魅み了りようする。
「紹しよう介かいしよう。俺の連れの瑞ルイ麗リーだ」
「え？　だって、ルイリはわたしだよ？」
「そう。だがこの娘も君と同じ瑞ルイ麗リーなんだ。この顔をよく見てごらん。見覚えがないかい？」
「……？」
　狐きつねにつままれたような面おも持もちで、瑞ルイ麗リーは長く艶つややかな黒くろ髪かみと憂うれいを含ふくんだ美び貌ぼうに見入る。確かにそれは……幾いく度どとなく鏡の中に見み出いだしたことがある。そんな気がする。今の瑞ルイ麗リーとはまったく違ちがう顔だというのに。
「……うん、そうだよね。ルイリのおかおだね。
　ルイリのかおしたルイリがいて、でもわたしもやっぱりルイリで……うぅ、あれ？　よくわからなくなっちゃったよぉ……」
　頭を抱える瑞ルイ麗リーを、男は相変わらず静かに微笑し続けながら、柔やわらかい眼差しで見守っている。
「いいんだよ。色々と考えて疲つかれただろう？」
「うん……」
「大したことじゃない。忘れておしまい。いま君は夢を見てるんだ」
「ゆめ？　……これ、ゆめなの？」
「そうだ。だからゆっくりお休み。次に目を覚ますときは、濤タオ羅ローも戻もどっているよ」
　男の掌てのひらが優しく瑞ルイ麗リーの顔を覆おおい、そっと瞼ま

ぶたを撫なで降ろす。
「さよなら、瑞ルイ麗リー。濤タオ羅ローのことは眠ねむってお待ち」
「うん。さよならリュウさん。あにさまがかえってきたら、おはなしするね。リュウさんのゆめをみたって」
「それはいいね。きっと驚おどろくよ」
　楽しげに笑って去っていく足音を聞きながら、瑞ルイ麗リーはいつまでも目を閉ざして、不思議な夢が終わるのを待ち続けた。

―つづく

カバー・口絵・本文イラスト / 中央東口
カバー・口絵・本文デザイン / アフターグロウ
(C) Nitroplus 2002, 2005

鬼き哭こく街がい

紫し電でん掌しよう

虚うろ淵ぶち 玄げん(Nitroplus)

平成25年12月1日

(C) Nitroplus 2002, 2005

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『鬼哭街　紫電掌』
平成17年1月1日初版発行

発行者　山下直久
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　角川書店
〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19
03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/